
父が魔王で息子が勇者で!?

sibugaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父が魔王で息子が勇者で!?

【Nコード】

N7745M

【作者名】

sibugaki

【あらすじ】

突然父が魔王になってしまった

更にその父が魔王になると宣言しだし、息子を勇者に仕立て上げてしまった

どうなるこのお話

どうなるこの世界

父と息子が織り成すギャグファンタジー

その1（前書き）

本格的なギャグ小説を書きたくて書いてみました
宜しければ見てください
そして、笑って下さい

その1

突然だが、読者の方々に質問したい

皆様は勇者と魔王の関係をどう思っている？

言ってしまうば勇者は善、魔王は悪と分類される

そして、魔王が地上を侵略して世界が暗黒に包まれてしまう

これもまたお約束である

そんでもって、それを選ばれた勇者が颯爽と現れて魔王をケチヨンケチヨンにして世界を平和にする

これもまあお約束である

んでもって、囚われのお姫様を救い出して見事にゴールイン！そしてお城の王様になって末永く幸せに暮らす

とまあ言ってしまうばこんな感じであろう

それが長く続いた勇者と魔王の関係である

しかし、考えてみて欲しい

何故勇者が善で魔王が悪である必要があるのだろうか？

中には悪人の勇者も居るだろうし、反対に善人の魔王も居る筈である
世の中にはきつといろいろな勇者もいればいろいろな魔王も居るであらう

この物語は、そんな勇者と魔王の関係のほんの一部の物語である

此処は、何処かの大陸にあるとても普通の村・・・名づけて「タダノ村」と3分位で思いつきそうな名前の村にはこれといった目立つ物は何も無く数件の民家が立っていてその周りには小さな畑を耕す村人の姿があるという至ってシンプルな村である

正に勇者が誕生するにはもってこいと言わんばかりの地味さである
(酷っ！)

物語は勿論こんな地味な村から始まるのである

地味な村の奥の方にはこれまた地味な一軒屋が立っていた
大きさはそれほど大きくも無いかといって小さくも無い・・・まあ
言ってしまうえば普通の家である
そして、そんな家の中では・・・

「ピッケル！そろそろご飯だからお父さんと呼んできて！」
「分かったよ、母さん」

母親と息子と思わしき少年がいそいと朝ごはんの準備を進めていた
この少年こそがこの物語の主人公である後の勇者「ピッケル」である
弱冠9歳のこの少年がどのようにして勇者になって行くのか・・・
それはまた後で話すとしよう

「多分お父さんは表で薪を切ってるだろうから呼んで来て」
「はい」

間延びした声でピッケルは家を出て表に出た
すると『カコーン』と音がした

恐らく表で父が薪を切ってるのだろう
そう思ったピッケルは急ぎ父の居るであろう元へ向かった

「父さん！そろそろご飯……」

父を呼ぶ途中で少年ピッケルは己が目を疑った
目の前に居る筈の父を見て驚くチビッコはそうそう居ない
だが、今日の前に居るのは、黒い服を身に纏い、これまた同じ色の
マントを羽織っており、頭には2本の大きな角を付けた所謂「魔王」
が立っていたのだ

「おお、ピッケル！もうご飯の時間か？あと少ししたら終るからち
よっと待っててくれ」

魔王はそう言ってニコやかに手を振る
だが、ピッケルは冷や汗をダラダラと流し歯を震わせて腰が砕けて
その場に倒れこむ

「どうしたんだ？そんな化け物を見たような顔をして？」

父は何食わぬ顔で近づくが、それと同時にピッケルは数歩下がる

「ん？どうして下がるんだ？ピッケル」
「と……父さん？……なの？」

「当たり前じゃないか！寝ぼけてるのか？ピッケル」

父はガハハと笑う

大らかな父の笑顔は誰もが安心するのだが、今日の前に居るのは魔王である

はつきり言ってかなり怖い

それでもピッケルは砕けた腰を気合で起して父を引っ張る

「お、おい何するんだ？まだ途中なんだが」

「良いから来て！」

そう言ってピッケルは急いで家に飛び込んで来た

「あらどうしたの？ピッケルそんなに慌てて」

「きっとお腹を空かしたからだろう？この食いしん坊め」

父（魔王）と母は爽やかに笑う

だが、ピッケルは笑ってない
そりゃ笑える訳が無いよねえ

「か、母さん！父さんを見てよ！」

「え？父さんを？」

母は父をじっと見る

父は何故か頬を少し赤らめる

「ね、母さん！何か気づくでしょ！」

「ええ、私も今気づいたわ」

母も父の異変に気づいてくれたようでピッケル自身も安心する

「母さん！やっと気づいてくれたんだね」

「ええ・・・やっぱり何時見ても父さんはカッコイイわねえ／／／」
「・・・は？」

予想外の母の回答にピッケルは目が点になる

「おいおい、母さん止せよ恥ずかしいじゃないか／／／」

同様に父も頬を染める

だが、ピッケルはそれでは怯まない

父の顔をぐっと母の方に近づけて見る

「よく見て母さん！父さん何か変でしょ！」

「えゝ？そうかしら？何時もの父さんじゃないの？」

「あんたの目は腐ってるのかあああああああ！良く見てみろ
おおおおお！父さんじゃねえだろうがあああああ！」

「ちょ！何て酷い事言うの！ピッケル！」

「そうだぞ！俺は真正銘お前の父じゃないか！」

父も母も信じられないと言った顔をする

「何時僕は魔王の子供になったの！そんな気は無いよ！」

「え？」

「魔王？」

父と母は首を傾げた

この子大丈夫か？と言わんばかりの顔である

「父さん！鏡で自分の顔を良く見てよ！」

「え？鏡？」

父は言われた通りに鏡で自分の顔を見た
そして驚愕の顔になった

「な・・・何てこった！！！」

「そうだよ・・・父さんは・・・父さんは・・・」

「顎に剃り残しがあるじゃないか」

「そうなんだよ・・・へ？」

ピッケルは素っ頓狂な声を上げた

「あらやだ！本当だわ！」

「しまった、こんな顔で出たら笑われちゃうよ」

「嫌、笑わないから！むしろ恐れおののくから」

ビシッとツツコミを入れる

「それよりも他に気づく事とかあるでしょう！！」

「え？他って何処に？」

「頭とか服とか・・・とにかくいろいろ」

父はそう言われて再び鏡を見た

「あり？そういえば何時の間にこんな角が生えたんだ？」

「そういえばお父さんってマント羽織ってたかしら？」

「服もきのせいか豪華になってるし」

「何と言うか・・・魔王みたいね」

「みたいじゃなくてそうなんだよ！」

やっと気づいてくれたのかとピッケルは証言する

「ああ！」

「成る程！」

それを聞いて二人は納得する

ピッケルは大きな溜息を吐いた

そんなこんなで親子三人食事をしながら緊急家族会議が開始された
因みに今日の朝食は食パンにサラダにスープに目玉焼きとまあ定番
といっちゃ定番である

「母さん、バターを取ってくれないか」

「はい、どうぞ」

父（魔王）が母にバターを要求する

母はそんな父（魔王）にバターを渡す

父（魔王）はパンに少量のバターを塗って大きな口で齧る

ザクリと気持ちの良い音を立てて父（魔王）の口の中でパンが砕けていく

「って、何家族団らんしてるの！会議でしょ会議！！」

机をバンと叩いてピッケルが怒鳴る

「そんなの分かってるさピッケル」

「そうよ、でも今はご飯の時間なんだからご飯にしてるだけよ」

「だからって和み過ぎじゃないの？まずはどうして父さんが魔王になっちゃったかを考えようよお」

ピッケルに言われ父（魔王）は考え込んだ
腕を組んで眉間に皺を寄せて深く考え込む
側から見ると怒ってるみたいでかなり怖い
そんな父（魔王）を母は頬を染めながら見つめている

（魔王になったお父さんも素敵ねえ／＼／＼）

と、考えていたのであった

ふと、父（魔王）がポンと手を叩いた

「そうだ！きつとあの時だ！」

「あの時って・・・一体何時の事？」

「うむ・・・あれは・・・」

【昨日】

その日、父は仕事を終え町から帰る途中で一人の老人と出会った
その老人は頭はツルツパゲで長い髭を結わえた背の小さな老人であ
った

その老人が道端で倒れていたのだ

「どうしたんですか？こんな道端で寝てたら風邪をひきますよ」

父は心配になって老人に語りかけた
すると、老人は

「うう・・・は、腹が・・・減って・・・力が・・・出ない・・・

」

「え！顔が汚れて力が出ない？」

「嫌、あんた耳腐ってない？」

父の素っ頓狂な返答に老人は呆れた

「実は・・・ワシ・・・此処数日・・・ロクな物を・・・食べてなくて・・・」

「ええ！！此処数日ロクに風呂に入っていないですってえ！そりや大変だ！」

「あんた本当に耳大丈夫？一辺耳鼻科行った方が良いと思うよワシ
(怒)」

額に血管を浮かべて老人が怒鳴る

そんな老人に父は優しく微笑む

「ハハハ、どうもすみませんね、私少し早とちりし易い所がありまして」

「いや、しまくりじゃん！ってか、もうそれ早とちりってレベルじゃ無いからね！」

「いやあ、それにしてもお爺さんと話してるととても楽しいですねえ」

「ワシは逆に頭に来るんじゃが(怒怒)」

老人の額に血管が増える

「どうです、この後お暇なら一緒に飲みますか？」

「え？良いの？」

「ええ、私としてもっとお爺さんとお話したいですし」

「ワシはあんたとは話したくないんじゃが・・・飯が食えるならOKじゃよ」

「えゝ、駄目なんですか？」

「あんた本当にムカつくなあ（怒怒怒）」

老人の額に血管が更に浮ぶ

まあ、そんなこんなで2人は居酒屋に向かった

居酒屋で2人はジョッキに並々と注がれたビールを飲む

そして真ん中に置かれたつまみを摘まんで二人は楽しく語り合った

「実はワシはこの世界の人間じゃないんじゃないよ」

「分かりますよ、私にも今年で9歳になる息子が居ますからね」

「あんた・・・一辺殴って良い？（怒怒怒怒）」

2人は夜通しで語りとおした

父は終始ご機嫌であり老人は終始怒りっぱなしであった

そしていよいよ店も閉店の時間になった時

「あんたはこんな薄汚いワシに飯を奢ってくれた、その礼に何か一つだけ願いを叶えてやろう」

「ええ！そんな幾ら始めて合った仲だと言うのに其処までなさらないくても」

「いやいや、お主は少々ムカつく所はあったがこんなワシに暖かい飯を奢ってくれたんじゃない、せめてもの礼をさせて欲しいんじゃない」

「そうですか・・・それじゃ」

そう言って父は両手を広げて老人を迎え入れる体制を取った

「な・・・何の真似じゃ？」

「え？だってお別れのハグがしたいんじゃないんですか？」

「お前・・・ほんとうにどんな頭してるんじゃない？一辺主の頭をかち割って中身を見てみたいもんじゃよ」

老人の額にこれでもかと血管が浮かび上がる

「願いじゃよ願い！お主の願いを一つだけ叶えてやるって言っ
んじゃよ」

「なあんだそうだったんですか！」

父はホッとする

老人は溜息を漏らす

「んで、願いは何じゃ？」

「んじゃ、魔王にして下さい」

「はいいい！？」

唐突に言われた事に老人は目を見張る

「ええ！何で魔王？普通勇者とか王様とか言うんじゃないの？」

「えー、だって勇者とか王様とかって在り来たりじゃん！だからち
よっと面白そうなんで魔王にしてって言おう事で」

「あんた・・・本当に頭大丈夫か？」

ぶつくさ言いながらも老人は懷から赤い玉を取り出した

大きさから飴玉位の大きさである

父は老人から赤い玉を受け取る

父はその赤い玉をじっと見る

「良いか？この赤い玉は主の願いを叶える為の物なんじゃ、これを
掴んで願いを念じるとその通りになるんじゃないぞ」

「ふえー（へー）」

「因みに言うが、くれぐれも食ってはいかんぞ」

「わふありましふあ（わかりました）」

「????・・・おい、お主何食っとるんじゃ」

「さっき貰った飴玉」

「嫌！話聞けよおおおおお！食うなってさっき言ったじゃん！言っただけじゃん！」

老人が思い切り怒鳴る

その怒鳴り声にビックリしたのか父は勢い余って赤い玉を飲み込んでしまった

「あ！」

「あ！」

老人は顔を真っ青にしてしまい、父は頬を赤らめて

「飲み込んだじゃった・・・テヘッ！」

と、惚けた顔で言う

そんな父に

「どあほおおおおおおおおおおおおお！」

と、怒鳴るのであった

「何食べちゃってるの！それ食べちゃったらあんた一生魔王のままだよ！」

「えー、マジですか？」

父は悪魔で惚けたままで言う

「それよりどうするのさ父さん」

「何が？」

「何がってその格好だよ！そんな姿じゃもう仕事にもいけないじゃん！町に出たら間違いない兵士と呼ばれてお父さんお城に引っ張られてそのまま牢屋にぶち込まれちゃうよお！」

「大丈夫だろ」

「何、その根拠の無い自信は？」

「だってお父さんまだ魔王になって何もしてないし」

「そういう問題じゃねえええええええ！」

ピッケルが額に血管を浮かべて叫ぶ

「怒りすぎだぞピッケル！最近カルシウムとってないからそうなるんだぞ」

「好き嫌いは駄目よピッケル」

「お母さんまで何言ってるの？お父さんが魔王になっちゃったんだよ！なんとも思わないの？」

ピッケルは母を見て叫ぶ

そんなピッケルに

「何言ってるの？例え魔王になろうとモンスターになろうとお父さんはお父さん・・・そう、私の惚れた世界にたった一人のお父さんよ／＼／＼」

「お母さん／＼／＼」

母と父（魔王）は互いに見詰め合い手を取り合う

何だかとても甘い雰囲気になっていた

ピッケルはその間で頭を抱えていた

その1（後書き）

突然の父の魔王発言

ピッケルの苦労はまだまだ続きそうである

その2

キャラクター紹介

ピッケル（9）

この物語の主人公っぽい少年

マイペースな両親に板ばさみされて日々苦勞が絶えない少し不幸な少年

ある日、父が魔王になってしまった事により彼の人生が大きく動き出すのであった

初期装備

布の服

ヒノキの棒

お鍋の蓋

父（29？）

ピッケルの父

普段は木こりをしている

偶々知り合った老人と飲み明かした後、老人から貰った謎の赤い玉を食べてしまい、翌日魔王になってしまった

しかし、本人は大して気にして折らず、むしろ楽しんでいるというかなりのマイペースっぷりを披露している

因みに母とはかなりラブラブであり、四六時中母の事を考えているのである

因みに結婚前は「鉄拳王」と呼ばれていたらしく、喧嘩では未だに

無敗を誇っている
だが、母には弱い

初期装備

魔王のマント

魔王の服

父の拳

魔王の角

母(27?)

ピッケルの母であり父の奥さんである

これまた父と同じでかなりのマイペースなお方である

しかし、結婚前は「韋駄天」と呼ばれていたらしく、1日で千里を
走るとさえ言われている

父と知り合ったのは後に話す事にする

噂話が大好きで事あるごとに村の奥様方に話しまわるのが日課である

初期装備

布の服

布のエプロン

母の拳

母の愛

老人(????)

父が知り合った謎の老人

父と飲み明かした後、謎の赤い玉を渡した
終始父のマイペースっぷりに振り回されると言う結構不幸な老人で
ある

その2（後書き）

次回は本編に入ります

その3 (前書き)

突然魔王宣言をする父

どうなるピッケル

どうなるこの物語

まあ、ぶっちゃけ普通の話にする気はさらさら無いけどね♪

その3

父の突然の発言にピッケルが驚く

そりゃ驚くよねえ

何せ突然父が魔王発言するのだからさあ

「いきなり何言い出すの？父さん！」

「えー、だって折角魔王になったんだしどうせなら魔王らしい事したいじゃん」

「魔王らしい事って・・・父さん具体的に何をするか考えがあるの？」

ピッケルが聞く

「何って・・・木を切って、それを町に持ってって売って・・・」

「その時点で既に魔王じゃなああああああああいいい！」

ピッケルが会心のツツコミを入れる

「普通魔王って言ったらデカイ城に住んで大勢の魔物を従えててお城を襲撃してお姫様を攫って世界を暗黒に包むとかそういうのをやるんでしょ？」

「えー、何か面倒臭いなー」

「それで魔王なんかやろうとしてるの？」

「良いじゃん、面白そうだし」

「だったら面倒臭がるなああああああああ！」

「へーい」

父（魔王）が顔を掻きながら返事をする
それを見てピッケルは大きく溜息を漏らす

「でも、お城と言っても、何処に建てるの？」

「そりゃ勿論、この家に建てようと思ってるけど」

「えええ！ま、マジ！？」

「まあ、素敵！！」

母が頬に手をやって微笑む

だが、ピッケルは苦い顔をしている

「ちょいまち！そしたらこの村はどうなるの？」

「え？別に変わりはないけど」

「嫌、変わるから！考えても見てよ！村の中に魔物が闊歩してるんだよ！普通の村人なら怖がって逃げ出すよ！」

「えー、案外仲良くなったたりしない？」

「する訳あるかあああああああああああ！」

ピッケルの渾身の叫びが響き渡る

「おいおい、今日のピッケルは少し怖いなあ（汗）」

「本当ねえ、一体どうしたのかしら？」

「あんたらのせいだよあんたらの！！（怒）」

ギロツとした目で二人をピッケルは睨む

「あ！でも魔王をやるにはまずは王様に会わないとなあ」

「はあ？何で？」

「だって、一応話しを通した方がいいじゃん？」

「いや、良くないから！そんな事したら真っ先にとっつかまってお

先真っ暗な人生を歩む事になるんだよ！」

「何で？」

「何でって、普通魔王が「こんにちは」ってやってきたら誰だってビックリするでしょ！」

「そうかなあ？」

父（魔王）は首を傾げる

その顔はそんなに気にする事なのかなあと言った感じの顔である

「駄目だ・・・この父（魔王）に常識を説いても無駄だ・・・」

ピッケルは頭を抱えて溜息をつく

「とりあえず早速王様の居そうなお城に向かうとしようか」

「夕飯には帰って来てね」

「勿論だよ、母さん」

父（魔王）と母はまた手を取り合う

「無事に帰ってこれたらね」

その横でピッケルが呟く

「何言ってるんだ？お前も一緒に行くんだぞ」

「ええええええええええ！な、何で僕も一緒に行くのおおお！」

信じられないと言った感じでピッケルが叫ぶ

「だって、考えてみろ、父さんが魔王なんだから当然お前は『勇者』にならないといけないんだぞ」

「何！その設定！？」

「だってそうだろう？父が悪の権化である魔王になったんだから、当然息子はそんな父を止める為に勇者になるのが普通じゃないか」

「嫌、普通じゃないから！そもそも何で僕が勇者になる必要があるの？」

「考えても見ろ、父と息子が運命の悪戯により戦うなんて・・・結構燃えるシチュエーションだと思わないか？」

【父の妄想】

其処は魔王城の奥にある玉座の間である

今、そこで父（魔王）と息子（勇者）が互いにぶつかりあっていた

「どうして僕達がぶつかりあわなくちゃならないの？」

「それはお前が勇者で私が魔王だからだ！魔王と勇者は本来会い逸れぬ運命、故にこうして我等は戦わねばならぬのだ」

「そんなの、そんなの間違ってる！」

息子（勇者）が叫ぶ

「昔の様に、家族3人で仲良く暮らす事だって出来る筈じゃないか！父さん！」

「息子よ・・・嫌！我が宿敵勇者よ！我は既に貴様の知る父ではない！我こそはこの世に破壊と混沌をもたらす悪の権化『魔王』なのだあ！」

父（魔王）が叫ぶ

息子（勇者）は手に持っていた剣『エクスカリバー』を構える

「さあ、来い！でなければこの世界を破壊と混沌に包んでしまうぞ！」

「うおおおおおおお！父さああああん！」

息子（勇者）の剣が父（魔王）の胸板に突き刺さる

「ぐはあああああ！」

「と・・・父さん・・・」

「見事だ・・・我が息子よ・・・」

と言って父（魔王）は息子（勇者）の腕の中で静かに息を引き取った

「父さん・・・父さああああああん！」

息子（勇者）は父（魔王）の亡骸を抱きながら叫ぶのであった

【妄想 終り】

「ぐううううおおおおお！感動だあああああ
ああああ（泣）」

「ううう・・・泣ける話よねえ」（泣）」

母と父（魔王）は2人して涙を流していた
んで、それを聞いていた我等が主人公ピッケルは

「ふざけんなあああああああああ！」

「何？」

「熱弁してるの悪いけど・・・母さんもう出てったぞ」
「へ？」

ピッケルが熱弁していたのは母・・・ではなく、母の格好をした案山子《かかし》、通称「身代わり君1号」であった

「し、しまったあああああああああああ！」

急いでピッケルは家を出て母を追った
すると

「あら、ピッケル！これから何処か出かけるの？」

「か、母さん！？」

目の前には出て行った筈の母が居た

「か、母さん・・・も、もしかして」

「フフ、安心しなさい！お父さんの事は誰にも言っていないから」

「ほ、本当！？」

「嘘だと思っなら見てきなさい」

「う、うん！」

ピッケルはそう言って町へ向かって駆け出していった

「本当に言っていないのかい？母さん」

その後ろから父（魔王）がやってきて聞いた

「口では言っていないわよ」

母が少し意地悪そうに笑う
それを聞いて父（魔王）が納得する

ピッケルが急ぎ村へ向かった
すると、ピッケルの元へ少年達がやってきた

「よう、ピッケル」

「あ、皆！」

「見たぜピッケル、お前の父ちゃん魔王になったんだってな」
「へ？」

「すげえよなあ、お前の父ちゃん魔王になったんだろう？」

「なあなあ、魔王ってカッコイイのか？それとも怖いのか？」

「魔王って何か魔法とか使えるのか？」

「角とか生えてるの？それとも牙が生えてるのか？」

少年達はそんな質問をしだした
ピッケルは慌てる

「ちょ、ちょっと待ってよ！一体何で皆そんな事知ってるの？」
「さっきお前のおっかさんが広場に何か張ってたぜ」
（まさか・・・）

ピッケルは嫌な予感がした
そして急いで広場に向かった
其処には多数の野次馬が屯していた

何だ何だ？へえ、そんな事があ、うわあ、マジかよ、こりゃ災難だなあ、いやあまいったねえ
等など口々にそう言い会っているのが聞こえた

「す、すみません！ちょっと通して下さい！」

ピッケルは人ごみを掻き分けて掲示板を見た
其処には、

『大事件！私の夫が魔王になっちゃいました！！』

と、デカデカと書かれたチラシが張ってあった
しかも、母と父（魔王）が仲良くピースサインを作っている映像も載っている

（ちゃっかり宣伝してるじゃんんんんんんん！！！！）

ピッケルは心の中で叫んだ！
一足、嫌、三足位遅かった

母は確かに誰かに公言する事はしなかった
だが、変わりに広場にチラシを張って堂々と宣伝してしまったのであった

甘かった！母の楽しみは家で起こるサプライズを常々村のお母様方に話すのが日課なのだ

そして、母は父（魔王）と出会う前は別名「韋駄天」と呼ばれてい

る程足が速いので有名だったのだ
何でも1日で千里を走るそうである
そんな母にとって村の広場にチラシを張って戻って来る事など朝飯
前の夜食後である
あの時、母が何か不気味な笑みを浮かべていたのが理解出来た
となると、既に家の方にはお城の兵隊が来ている筈である
ピッケルは急ぎ家に向かった

家に着くと、その前には数人の人が立っていた
どれも歴戦の冒険者を思わせる服装である
服装からして『戦士』と『魔法使い』と『僧侶』の3人のパーティ
ーである

「おい！さっさと魔王を出せ！」

戦士の服装をした男が叫ぶ

「この家に魔王が居るのは先刻承知なのよ！」

続いて魔法使いの女性が叫ぶ

「さっさと出て来い！」

僧侶の男が最後に怒鳴りつける

3人供かなりレベルの高そうな雰囲気を漂わせている

「な・・・何でこういう展開になるの（汗）」

幾ら何でも早すぎだ

普通あのチラシを見て2～3日経ったあたりからこういうのが来る筈なのにチラシを貼って僅か1時間足らずで嗅ぎつけてしまうなんてどんな奴等なんだよ！

と、ピッケルは思った

（どうしよう・・・あの家の者って分かったらきつととっ捕まってお先真っ暗な人生に直行になるに決まってる・・・でも、このまま放って置いたら父さんがあの冒険者達にケチヨンケチヨンにされちゃうし・・・どうしたら・・・）

ピッケルがそう悩んでいると

「は～い、どちら様ですか？」

と、扉を開けて出てきたのは母であった

冒険者3人組は出てきた母を見て仰天する

「な！」

「に！」

「ぬう！」

3人共開いた口が塞がらなかった
それもその筈である

1児の母とは言え、ピッケルの母は正に18歳のまま年を取らないで時を重ねたような物である

つまり、メツチャ美人なのだ

茶色の長い髪にこれまた同じ色の瞳をした美しい顔立ち

皮の服シリーズと言う薄い服装のせいかスタイルを把握しやすい

(出るところ出てて凹むところへこんでると言う奴)

そんな母が出てきたのだから3人は仰天してしまったのだ

「あら？もしかして勇者ご一行さんですか？」

母は頭に？マークを出しながら聞いた

「は、はい！俺・・・嫌、僕達はこの家に魔王が居ると聞いて駆けつけて来ました勇者ご一行で有ります！」

「お嬢さん！もう大丈夫ですよ！我々が来たからにはたちどころに魔王をやっつけて貴方を自由にして差し上げます」

「私達にお任せ下さい」

3人が自信ありげに答える

それを聞いて母がクスリと笑う

「あらそうなんですか！でしたらちょっと待ってて下さいね、今主人を呼んできますから」

「「「え、主人！？」」」

その言葉に3人の目が大きく見開かれた

「お父さあああん！勇者ご一行が来たわよおおお」

「ほおおおおおい！」

家の奥の方から男の声らしき物が聞こえてきた
戦士の男が恐る恐る尋ねる

「あ・・・あのう・・・もしかして魔王ってのは・・・」

「あら？見てなかったの？家の主人が魔王なのよ」

「「マジっすかあああああああああああ！」」

3人は見事にハモツた

それほどまでに仰天するサプライズだったのだろう
そうこうしていると

「いやー、お待たせしました」

と言って出てきたのは

黒い服にこれまた黒いマントを着こなした頭に2本の立派な角を生
やした巨漢の男

『魔王』であった

「どうも、私が魔王です」

と言って魔王がそっと手を差し伸べて来た

「な、何のつもりだ！」

3人は一斉に距離を開けてそれぞれ武器を構える

「何って・・・握手を求めたのですが」

「ふざけるな！何処の世界に魔王と握手する勇者が居るんだ！」

戦士が睨みつけながら怒鳴る

「大体！お前は今までどんな悪事を重ねて来たんだ？」

「いえ、今朝魔王になったばかりなのでまだ何もしてませんが」

「丁度良いわ！貴方が悪さをする前に懲らしめてやるわよ！」

そう言うのと3人は一斉に武器を構える

「わわわ！どうすんのさあ父さん！！」

「おゝ、我が息子よ！帰っていたのか」

父（魔王）がピッセルを見つめる

「帰ってきたのか？じゃないでしょ！どうすんのさ！3人も勇者ご一行が来ちゃったじゃん！しかもあの3人かなりレベル高そうだよ！」

ピッセルは3人を見た

確かにかなりの高レベルに見える

だが、父（魔王）は余裕の表情を浮かべている

「心配するな！父さんはお前以外の勇者に負けるつもりはこれっぽっちも無いぞ！」

と、胸を張って言う

それを聞いた3人はカチンと来る

「い・・・言ってくれるじゃねえか！こうなったらこの場で貴様を叩ききってやる！」

「掛かって来なさい！」

父（魔王）が家の外に出て構えた
3人はそれぞれ魔王を取り囲むように陣取る

「か、母さん！このままじゃ父さんがやられちゃうよ！」

ピッケルが母に言い寄る

だが、母もまた余裕の表情である

「大丈夫よ、父さんはそう簡単にやられはしないから」

「一体何を根拠にそんな事を言うの？」

「まあ見てなさい」

そう言って母は父（魔王）を指す

ピッケルは心配しながらも戦いの様を見つめた

勇者ご一行はジリジリと魔王との距離を詰めている

それとは対照的に魔王は腕を組んで余裕の表情を浮かべている

「どうしたのかな？何時でも掛かって来ると良い」

魔王は腕でクイクイと合図をしながら呟く

それを聞いた3人の額に血管が浮ぶ

『光の精霊達よ！戦士の剣に宿り悪しき魂を切り裂け』

と、唱える

すると、戦士の持っていた剣が眩い光を纏う

それを両手で構えて戦士は飛びあがる

「食らえ！ギガスラァァァッシュ！」

「おiiiiiiiiiiii！さりげにド〇ク〇の技パクってんじゃねえええ！」

どうやら技名が不味かったのかピッケルが思い切り叫ぶ

そんな事などお構いなく戦士は父（魔王）に向かって剣を振り下ろす
だが・・・

「よっと」

父（魔王）は何と人差し指と中指の二本の指だけで戦士の剣を抑えてしまったのだ

「な、なにiiiiiiii！」

「う、うそ！」

「ぎ、ギルのギガスラッシュをあんな簡単に・・・」

マリンとボブの2人も驚く

だが、一番驚いているのは技を放ったギル自身である

「う・・・嘘だろ・・・俺の・・・俺のギガスラッシュをそんな簡単に・・・」

ギルの顔が一気に青ざめる
今までこの技で何度も窮地を脱してきた技なのだ

（嘘だ！・・・あの時だって・・・あの時だって・・・俺はこの技で勝ち抜いて来たんだ！
そう、あの時だって・・・）

【ギル 回想】

それは今から数年前の事であった
ギル達のパーティーがとあるダンジョンに入った時である
最下層に辿り着き、ボスを倒してさて帰ろうと思った時である

「そろそろ疲れたから休もうか」
「賛成！」

「よし、俺は火をつけるよ」

そう言って目の前に薪を敷き詰めて
ギルは主室に剣を構える
そして

「ギガスラッシュ！」

薪に向かってギガスラッシュを放った
すると薪が一気に燃え出したのだ

「いやあ、ギルのギガスラッシュは便利だなあ」
「本当ねえ」

「いやあ、それほどでも無いよお、ハッハッハッハ」

3人は暗い洞窟の中で笑いあった

【回想 終り】

「あの時・・・あの技で俺達は窮地を脱してきたんだ！」

「戦闘で使ったんじゃないかよおおおおお！」

ギルの回想に思わずピッケルが突っ込む

まあ、確かにそうだよねえ

「確かに・・・お前の技は見事だ」

「なっ！」

父（魔王）がギルの技を褒め称えた

「だが、お前達には致命的に足りない物がある！」

「「「そ、それは？」」」

3人が一斉に聞く

ってか、良くハモるなあこいつら（汗）

「それは・・・」

「「「それは？」」」

父（魔王）の目がカッと見開く

「お前達には友情！思いやり！そして何より・・・愛が足りないああああああああああああああい！」

「イイイイイイイック！」

障壁ごとマリンを蹴り上げる

「ヒャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

マリンもまた上空約2000m位（予想だからね）まで吹き飛んだ後、真っ直ぐに地面に落下した

「最後は！お前だあああああああああああ！」

「来たあああああああああああ！」

僧侶ことボブは必死に魔王必須のアイテムを探したそして、ポーチからとあるアイテムを取り出す

「く、食らえ！聖なる十字架！」

ボブが取り出したのは『聖なる十字架』と呼ばれるレアアイテムである

このアイテムを使えばたちどころに魔物は滅びるといわれているだが、

「アイテムに頼ってては一人前にはなれんぞおお！『父さんの頭突きは固いぞヘッドバアアアアアアアアアアアアアアアアット！』」

父（魔王）の頭がボブにぶつかる

それと同時にボブは地底深くまで潜っていった

「ゲひょ大オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

こうして、父（魔王）は3人の勇者ご一行をやっつけたのであった
（しかもあっさりと）

その3 (後書き)

父つえええ
(汗)

その4（前書き）

今回はあっさりやられた勇者ご一行をご紹介します

その4

キャラクター紹介

戦士ギル(20)

伝説の勇者・・・の子孫っぽい戦士

外見はぶっちゃけド○ク○4の主人公っぽい格好をしている

かつて大魔王ザダンと死闘を演じた程であり、地元では伝説の勇者っぽい戦士と呼ばれている

(大魔王ザダンについては後ほど紹介します)

魔法使いマリン(19)

最強の魔法使い・・・を自称する魔法使い

外見はド○ク○2の王女っぽい格好をしている

全ての魔法の最上級魔法を習得しており、地元では最強の魔法使い・・・みたいな魔法使いと呼ばれている

僧侶ボブ(21)

補助のエキスパート・・・を目指している僧侶

外見はド○ク○4のお姫様の付き人の僧侶っぽい格好をしている

補助全般でありパーティーの中では一番の貧弱男

その為地元では貧弱僧侶・・・と呼ばれている

その4（後書き）

僧侶の扱い酷すぎ（汗）

その5

ギル達勇者ご一行は未だに信じられないと言った顔をしていた
何故なら歴戦の勇者と謳われた自分達をこうもあっさりと倒してしまっただからだ

因みに、今は母の元で看病を終えたらしく体中には至る所に包帯が巻かれている

んでもって、今は魔王の前で正座をさせられている

その前では、父（魔王）が腕を組んで立っていた

因みに何故正座をさせらりているかと言うと父（魔王）が勇者ご一行に説教をしているからだ

「何故だ・・・大魔王ザダンと引き分けた我等3人が何故こうもあっさりと負けてしまったんだ!？」

戦士ギルが愚痴る

それには他の2人も同意する

何故だ!何故なんだ!と口々に言い合う

それを聞いていた父（魔王）は

「そんじゃ皆のレベルを見てみるか」

と言って指をパチンと鳴らした

すると、目の前に黒いパネルが出現しだしたのだ
え?これが何だって?

それは突っ込まないお約束ですよ読者の皆様

黒いパネルから、まずは勇者ご一行の強さが表示された

ギル

[illegible]

これ位のレベルなら大魔王とも互角に戦える程である
そう3人も自負していた

だが、その後に表示された父（魔王）と母とピッケルの強さを見た
途端その考えが音を立てて崩れるのであった

テツ

職業…魔王

レベル5000

HP700000

MP100000

力60000

守59000

足30000

魔10000

ルー

職業…母

レベル4999

HP500000

MP90000

力40000

守39000

足100000

魔9000

ピッケル

職業…勇者？

レベル1

HP10

MP0

力5
守3
足4
魔1

と、表示されていた

その数値を見た勇者ご一行とピッケルは

「何だこの強さはあああああああああああああ！」

と、声を揃えて叫ぶのであった

確かに叫びたくなる筈である

父の強さが異常過ぎるのだ

レベルが5000もあり

HPが十万桁なのだから

しかも驚きなのが、それに少しだけ劣るが母も強すぎるのだ

此処まで違いがあるのかと正直愕然とする勇者ご一行

そして、我等がピッケルは

「ってか、父さんってテツって名前だったの！それで母さんがルって名前！？初めて知ったよ俺！？」

と、驚愕の声を上げる

ってか、あんた息子の癖に知らなかったのかい！

そんなピッケルは置いといて、勇者ご一行はお先真っ暗な顔をしていた

無理も無い

かつて大魔王ザダンと死闘を演じた勇者ご一行の前にはそれを遥かに凌駕する夫婦が立っているのだから

まさかこれ程力差があるとは、これでは勝てない筈である

ってか、もうこの強さはチート並じゃん
もう並みの人間じゃ勝てないってマジで

「何てレベルだ・・・強すぎる・・・」

ギルは大地に土下座するかの様な姿勢を取って絶望していた

「私達の世界は・・・永遠に暗黒に包まれてしまうのね・・・」

マリンも絶望し涙する

「俺・・・まだ彼女居ないのに・・・こんな風に死にたくねえよ」

ボブは自分に彼女が居ないのを嘆いていた

そんな光景を父（魔王）が見ていた
そして

「自惚れるなああああああああああああ！」

と、言って3人に必殺技『父さんの拳は痛いぞパンチ』をお見舞い
する

因みに、技名を叫ぶのはお約束である

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

父さんの拳は痛いぞパンチを食らった3人は再び上空2000m（
予想だってば）飛んだ後、そのまま地面に落下する

落下してきた3人に父（魔王）はビッと指差す

「お前達はまだレベル100にも行ってないのに最強を名乗ってる

云わば小山の大將だ！それじゃ上の敵には勝てんぞ！」

父（魔王）の言葉に3人は胸を打たれた

正にその通りだ

自分達は高レベルと言う事に胡坐あぐらを掻き最強だと思い込んでしまっ
たのだ

それではその上の敵には決して勝てる筈が無い
そんな基本中の基本を忘れてしまっていたのだ

「敗北は決して恥では無い！それを生かせず引きずっていく事が真
の恥なのだ！」

そう言って父（魔王）はそっとギルの肩に手をやる

「強くなれ！若者よ、お前はまだ強くなる・・・もっともっと精進
して最強の男になって見せろ」

その言葉に胸を打たれたのかギルの目には滝の様に涙があふれ出て
くる

そして顔がクシャクシャになっていく

「ま・・・魔王さん・・・」

何時の間にかさん付けになっていた

「ま、幾ら強くなっても俺には勝てないけどな」

それを聞いて勇者ご一行とピッケルは思い切りズッコケル
折角の良いシーンが台無しである

「何言ってるの！父さん！さっきのあれで締めておけばカッコよかったのに！」

ピッケルが大声で叫ぶ

そりゃそうだ

なのに父のその一言で折角の良い雰囲気がぶち壊しである
そんなピッケルに父（魔王）が振り向く

「さっきも言っただろう？父さんはお前以外の勇者に負ける気は無いって」

それを聞いたピッケルの額に血管が浮かび上がる

「だから僕は勇者になる気は無いって言ってるでしょう！それに僕まだレベル1だよ！父さんとレベル差が4000以上もあるんだよ！勝てる訳無いじゃん！」

ピッケルは熱弁する

まあ言ってしまうはその通りである

父（魔王）のレベルは5000

対してピッケルのレベルはたったの1

強さは歴然としていた

側から見たら勝てる筈が無いのだ

そう思っていると

「バックオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

父（魔王）が叫びながらピッケル・・・では無く僧侶のボブを殴り飛ばした

父（魔王）の情け容赦ない言葉にピッケルは青ざめた
この男・・・間違いなく魔王だ

と、ピッケルは幼いながらも確信したのであった

「さて、無駄な時間を費やしてしまったが、そろそろお城に向かう
としようか」

父（魔王）はそう言うのと強引にピッケルの腕を掴む

「や・・・やっぱり僕も行かないと駄目なの？」

「当たり前じゃないか！お前が行かないで誰が勇者になるんだ？」

「ママーーーーーー！ヘルプミーーーーー！
ーーーー！」

ピッケルは最後の頼みの綱『母』に望みを託そうと腕を伸ばす
だが、母は・・・

「体には気をつけてね～～」

と、言いながらハンカチで涙を吹いていた

因みに本泣きである

それを見たピッケルは

（さようなら・・・僕の淡い青春・・・）

と、将来味わえよう青春がマイペースな両親のお陰でとんでもない
事になると確信したのか遠い目で空を眺めていた
不思議と、彼の両目からは一筋の涙が流れていた

家を出た父（魔王）とピッケルはふもとの村でたちまち村人に囲まれていた

「すげえ！本物の魔王だぜ！、でかいなあ、力ありそうだなあ、家の亭主も魔王になってくれればねえ、頭に生えた角が立派だわあ、凛々しい顔立ちねえ、僕も魔王になれるかなあ？」

と、口々に呟き出す

ピッケルはもう突っ込む気力も無いのか真っ白になって立っている
口元が少し笑っている

「皆さん！此処に居るのが私の息子で、将来勇者になるであろうピッケルで~~~~す！」

父（魔王）が無気力なピッケルを紹介する

それを見た村人達は

『オオオオオオ~~~~~』

と声を出して驚いた

普通なら此処でピッケルが「ふざけんなあああああああ」とツッコミを入れる筈なのだが、生憎今のピッケルにはツッコミを入れる気力が欠片も無かった

「それで、これから私とピッケルはお城に行って王様と話をしてくれるのだ」

父（魔王）が胸を張って言う

それを聞いた村の衆がまた『オ〜』と声を上げた

父（魔王）は実に気分が良いのか終始ご満悦であった

だが、ピッケルは嬉しくない

正直勇者になんてなりたくなかった

只小さな村で父（魔王じゃない）の後を継いで木こりになるつもりだったのだ

それが突然父が魔王になってしまったばかりにこんな人生転換を迫られる事になるうとは思っても居なかった
しかも将来自分を倒すだって！

冗談も休み休みにして欲しい物だ

何が悲しくて実の父（魔王）を倒さなければならないのだ

例え魔王だとしても実の父を殺すのは絶対に嫌だ

ピッケルにとって父（魔王じゃない）は憧れの存在だったのだ

逞しい腕、引き締まった肉体、大きな体、太い眉毛、巨像ですら一撃で倒せそうな怪力（実際に倒した事がある）、そして何より家族を大事にする心にピッケルは憧れているのだ

そんな父が今では恐ろしい魔王となってしまったのだから相当なショックである

「こうなったら・・・僕が何としても父さん（魔王）を元の父さん（魔王じゃない）に戻さなきゃ！」

拳を握り締めてピッケルは深く決意する

そんなピッケルに父（魔王）が何かを持ってきた

「ピッケル、これを装備しなさい」

ピッケルと父（魔王）は村を出て『最初の原っぱ』を歩いていた
何故最初の原っぱと言うのかと言うと、いかした名前が決まらなかった
ので適当に名づけただけである

「良いかピッケル、お前も勇者になるにはモンスターを倒せるよう
にならないといけない」

お城への道を歩きながら父（魔王）がピッケルに熱弁していた
その隣ではピッケルが面倒臭そうに話を聞いている
腰にはさっき買って貰ったひのきの棒が差されていた

本当なら折って捨てたかったのだが、折角お金を出して買ったのを
使わずに捨てるのは勿体無いと判断して何時か父（魔王）をぶん殴
る為にとっておこうとこうして持っているのだ

すると、付近の草原から葉の揺れる音が聞こえた
それは風のせいの音では無い

明らかに何かの生き物の動いた証である

「な、何？」

「くるぞ！」

父（魔王）の言葉を聞いてピッケルは慌ててひのきの棒を装備する
すると、音の犯人が草むらから出てきた

出てきたのは、RPGの定番モンスター『スライム』であった

「な・・・なあんだ！こんなの簡単じゃん」

ピッケルは驚いた自分に苦笑してスライムを睨む
だが、反対に父（魔王）は難しい顔をしていた

「ピッケル、それならあのスライムを見事倒して見せよ」

「任せてよ！あんな雑魚モンスターなんか一撃でやっつけるよ」

そう言ってピッケルはスライムと向き合う

スライムもピッケルの方を睨む

「先手必勝！」

ピッケルは飛びあがり両手で持ったひのきの棒で思い切りスライムに殴りかかった

ひのきの棒が空を切って大地に向かって真っ直ぐに落ちていく
だが、大地にひのきの棒が刺さった時には、其処にスライムは居なかった

両の手の感触にも、スライムを切ったと言う実感は沸かなかった

「え？一体何が・・・」

ピッケルは右手に気配を感じて振り向いた

そして大量の冷や汗をかいていた

そう、何故なら・・・

其処には先ほどのスライムが既にこちらに攻撃を仕掛けている時だったのだからだ

「ギャポオオ！」

スライムの体当たりを食らいピッケルは吹き飛ばされる
その際にひのきの棒を落としてしまった

かなり吹き飛ばされた後、ピッケルは大地に背中から落ちる
全身に落下の衝撃が走る
結構痛い

「いつつ・・・一体どうなってんの？スライムがあんな動きをする
なんて聞いた事ないよ」

体当たりされて痛む頬を抑えながらピッケルは起き上がった
その後ろから父（魔王）が近づく

「油断したなピッケル」

父（魔王）が不機嫌そうな顔で言う

「だって！相手はあのスライムだよ！ド○ク○とかで最初に戦う雑
魚中の雑魚モンスターじゃん！」

「果たしてそうかな？」

そう言って父（魔王）は再び黒いモニターを呼び出した
そして、其処には

スライム

職業…モンスター

レベル100

HP1000

MP0

力100

守90

足70

「だから勇者になる気は無いんだよおおおおおおおおおお
おおおおお！」

つづく

その6（前書き）

今回はあのマイペース両親の出会いの話です
マイペースな父（魔王じゃない）にこれまたマイペースな母の出会い
は一体どんな感じだったのでしょうか？

その6

その日、ピッケルは真っ黒い空間の中を彷徨っていた
何故こんな所を歩いていたのか・・・

理由は前回最初に出合ったスライムが何とレベル100の強敵であった事に気づかず、攻撃を仕掛けてしまい反撃で倒されてしまったのだ

ってか、最初の原っぱって言うておきながら何でいきなりレベル100のモンスターが現れるのか不思議で仕方ないピッケルであった

「ていうか・・・此処・・・何処？」

ピッケルは率直な疑問を呟いた

歩いても歩いても真っ暗闇の世界は続いている
終りなき闇の世界

此処が死の世界なのだろうか

だとしたら自分は一生こんな何も無い世界で過ごさねばならないのだろうか？

だとしたら退屈の余り死んでしまいそうだし
そう思っていると、目の前に人影が現れた

「あ！誰か居る！・・・お～～い」

ピッケルは藁にも縋る思いでその人影に近づいた

「ん？おお！ピッケルじゃないか！」

何とその人影は父（魔王）であった

「て、あんたかああああああああああい！」

ピッケルは今日一発目のツツコミを放った

「はうああ！」

目を覚ますと、其処は自分の家のベットの上であった
そして、その隣には

「あら、やっと目を覚ましたのね」

「母さん！」

隣では椅子に座りながら必死に看病してくれていたのであろう母が
座っていた

「ずっと看病してくれてたの？」

「いいえ、ついさっき座ったばかりよ」

それを聞いてピッケルは思わずずっとこける

「あんた本当に母親かあ？」

「あら失礼ね、貴方はちゃんと私がおなかを痛めて生んだ私とお父

さんの子供よ」

母はそう言うのと頬を赤らめた
ふと、ピッケルは思った

そう言えば父さんと母さんはどうやって出会ってそして結婚にまで
行ったんだろう

母は息子の自分が言うのも何だがかなりの美人である

そして父（魔王じゃない）と出会う前は『韋駄天』と呼ばれており、
一日で千里を走ると言われていたようである
但し、それは自分が生まれる前なので真実なのかどうかは定かでは
無い

そして父（魔王じゃない）は『鉄拳王』と呼ばれており、喧嘩では
無敗を誇っていたようである

そんな2人がどういった経緯で出会ったのか
息子として気になる所である

「そう言えば、母さんと父さんはどうやって知り合ったのあ？」

「あら！気になる？」

母がニヤリとしながらピッケルを見る

その顔は言いたくて仕方ないと言った感じの顔である
息子であるが故に分かる事なのである

「うん、気になる！」

「そう、それじゃあお父さんと呼んで来なきゃね」

母の言葉にうんと頷くが少しして疑問に思う

「え？何で父さんと呼んで来る必要があるの？」

「だって・・・私とお父さんの出会いの話だもん♪」

そう言っ母は頬を赤らめる
相変わらず仲の良い夫婦である

ピッケルは息子であるが故にそう思えたのであった

その日、ピッケルと母と父（魔王）はリビングのテーブルに集まっていた

何故この面子で集まったのかと言うと、父（魔王じゃない）と母の出会いを聞く為である

「さて、それじゃ私とお父さんの出会いについて話しましょうか」

母が仕切る

「いやあ、遂に息子にこの話をする時が来たんだなあ」

息子の成長を嬉しがるように父が呟く

「本当ねえ・・・もうピッケルも立派な勇者ねえ（まだレベル1だけど」

「だから僕は勇者になる気は無いって何時も言ってるでしょう！それに僕にしては母さんの強さの方が異常だと思うよ」

ピッケルが大声で怒鳴る

「あら酷いわねえ、私が強いんじゃないくて他の人が弱すぎるんですよ？」

「うむ、全くその通りだ！母さんはこんなにもか弱い子羊なのにそれが強すぎるなんて可笑しいだろう？」

「レベルが4000もあってか弱いなんて言ったら他の人は半病人か死人だよ」

確かにレベル4000もあってか弱いなんて言ったら他の冒険者が浮ばれないであろう

と言うより、そんな事を言ってる場合じゃない筈である

「そ、それより早く教えてよ！父さんと母さんの出会いの話をさあ」
「おっと、そうだったな・・・あれはそう、今から9年前の事だった」

父（魔王）は懐かしむように語り出した

【9年前】

父は鉄拳王となるべく諸国を渡り歩き武者修行を行っていた

ある時は山で野熊を叩きのめし

ある時は麓の道場に殴りこんで焼き払い

ある時は謎の悪の集団の施設を瓦礫の山に変えたり

・・・と、まあとにかく、とんでもない事ばかりしていたのであった
既に父の名は諸国に知れ渡っており彼は鉄拳王の名を欲しいままに
していたのであった
だが、父は満足していなかった
むしろ胸にポツカリと大きな穴が開いてしまったようである
何かが足りなかったのだ
と、言うより

「腹減った〜」

そう、今父は胸と言うより腹にポツカリと穴が開いたような感じで
あったのだ

「此処数週間ロクな物食べてないからな〜、どっかに飯屋は無い
かな〜（汗）」

と、腹を摩りながら当たりを見回していた
すると、一軒の店が目にとまった

其処は飯屋と言うよりは飲み屋であった
だが、つまみ位なら何か置いてあるだろうと思い父は店に入った
カランカランと店の扉が音を立てて開く

店に入ってまず目に留まったのは

店の客の殆どがガラの悪いゴロツキ共であった
体つきのでかいゴロツキ

顔に大きな傷をつけたゴロツキ

刃物を舐めながら獲物を探すゴロツキ

酔っ払ってへべレケになってるゴロツキ

腕に点滴を刺して虫の息のゴロツキ

ベットに横たわり外を眺め「あの枯れ葉が落ちたら俺はもう死ぬん
だ」と遠い目で見つめるゴロツキ

とまあ、色々なゴロツキが屯していた
そのゴロツキ達が父を見る

そしてすぐに目を逸らす

喧嘩を売られたくないからだ

父の名は此処まで知れ渡っていた

今父に喧嘩を売る奴と言へば余程腕の立つ男か馬鹿位である

「おい、てめえ！」

丁度そんな馬鹿が父に啖呵を切ってきた

背丈は父の二倍位はある大男である

「てめえみたいなもやしが鉄拳王なんて名乗りやがってムカつくんだよ！ その名前俺に寄越しやがれ」

「あゝ、今俺腹減つてるからさあ、喧嘩なら後でしてやるからとりあえず飯食わしてくんない？」

父は手をヒラヒラさせて言う

その仕草に男はブチッとなったのか額に大量の血管が浮び内数箇所
が切れる

「ふざけんじやねええええええええええええええええええ！」

大男は父に向かって拳を振り下ろした

そのスピードはマッハにまで達している
しかし、

「いんち」

と言って父は手で払いのけるように大男を吹き飛ばした

「うじよおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお………」

大男はそんな風に叫びながら店の天井を突き破り星になった

その後、その大男は中古ショップの店長になつたらしい

父は大男を払いのけ周りを見回した

まだ他に俺に挑む馬鹿は居るか？と言いたげな目で見る

するとゴロツキ達は一斉に目を逸らす

そりゃそうだよねえ

皆死にたくないし（死んでないけど）

「いらっしやいませ」

すると、其処に店の人が訪れた

良くバーで見かけるような服装をした男だ

「お客様は1名様で？」

「そう、腹減ったからさ、とにかく何か食わしてよ」

「それは大変ですねえ……ですが、生憎今満席でして……相席
で宜しければすぐに座れますが」

「んじゃあそれで」

男は「かしこまりました」と言って一礼すると父をとある席に案内
した

そしてとある席に案内される

其処には一人の客が座っていた

栗色の長い髪をした客であった

父はその客のまん前の席に座りその客を見た

客もまた父を見た

綺麗な顔つきをした美しい女性である

こんなゴロツキの中では珍しい位の美人である

そんな女性に父は見入ってしまった

そして、父は女性を見て一時混乱しる思考のまま思った言葉を口にする

「あの・・・お名前は？」

父の言葉を聞いて女性は一時首を傾げるが、すぐに答える

「えっと・・・ルーって言います」

「お・・・俺・・・テツって言います・・・宜しく（汗）」

テツは顔を真っ赤にして言った

それを見て何故かルーも顔を真っ赤にする
2人の間に長い沈黙が続く

「ほ・・・・・・・・」

「ほ？」

ふと、父が最初に口を開く

そして言い放った言葉が・・・

「惚れました！！」

ダンと机を叩いて父は言った
それを聞いた母は

「は・・・・・・・・」

「は？」

「恥ずかしいイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

と、叫びながら店の壁をブチ破って外へ逃げていった
(マッハで)

「お、お客さああああああああああん！お勘定おおお
おおおおおおおおおおお！」

店の人が叫ぶ

っていうか、突っ込むトコは其処じゃ無い気がするのだが

結局、其処の店の感情は父が払うのであった

それで、感情を払った後、父は逃げ出していった女性を追いかけて
いった

女性と出会った店から約200km位走った辺りで父は目の前を高
速で走る女性を発見した

先ほど店で出会った女性である

「ま、待って下さあああい」

「恥ずかしいiiiiiiiiiiiiiiii」

「話だけでも聞いて下さあああああああああい」

「恥ずかしいiiiiiiiiiiiiiiii／」

「一目見て惚れましたあああああああああああ」

「恥ずかしいiiiiiiiiiiiiiiii／」

「付き合って下さあああああああああああい」

「恥ずかしいiiiiiiiiiiiiiiii／／」

と言った感じの追いかけっこをおよそ2～3日続けた
その間父は終始叫びまくり、女性は顔を赤く染め「恥ずかしい」を

連呼していた

しかし、その間2人は不思議と楽しい思いだったと言うそうだし、そして、暫く走りまくった後

「それで・・・一体何の用なんですか？」

女性は首を傾げながら聞いてきた

どうやら走りまくった為に何故父が追いかけてきたのか理由を忘れてしまっていたらしいのだ

父はその女性の余りのマイペースっぷりに苦笑いを浮かべる

荒く乱れる呼吸を深く深呼吸して整えて、その後真剣な眼差しで女性を見る

「惚れました！付き合ってください！」

「はい！喜んで！！！」

即答であった

【回想 終了】

「と、これが父さんと母さんの出会いの話だよ」

父（魔王）の回想を聞いていたピッケルは

「何じゃそりゃあああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

と、大声で叫ぶのであつた

「普通可笑しいだろう！普通なら酒場でゴロツキに絡まれてるのを助けてそれで惚れる筈なのに偶々相席してたのが母さんだっただけで一目惚れしてその後三日間位走りまくってその後改めて告白したら即答でOKなんて幾ら何でも出来すぎでしょうがああああああああああああ！」

長々とツッコミ、苦勞さま

「因みに、その後父さんと母さんは色々な国を2人きりで回っていったんだよ」

「へー、例えばどんな国？」

「え〜〜と、魔界だろう・・・それから冥界・・・地獄・・・鬼が島・・・魔王城・・・マクー空間・・・それから」

[illegible]

父（魔王）が指を折りながら数えている途中でピツケルが声を上げて叫んだ

確かに口クなところに行っていない

「そんなところに行って何してたの？」

「いやあ・・・只単に彼女が出来たのを自慢してただけなんだけどな」

「魔界のモンスターや鬼が島の鬼達に自慢しまくってたの（汗）」

「いや、案外あいつらも結構良い奴なんだぞお」

「しかも顔見知りいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

ピッケルが目を大きく見開いて叫んだ
この親父・・・何で地獄や魔界に知り合いが居るんだ？
と、そう思うのであった

「んで、母さんと出会って翌日に俺と母さんは結婚したんだ」
「さっきの地獄巡りは何時行ったのおおおおおおおおおお
おお！」

ピッケルのツツコミ再び炸裂

「あの時は盛大な結婚式だったなあ」

【回想】

其処はそれなりに大きな教会であった
屋根の上から鐘の音が響く

白いスーツに身を包んだ父の横には白いウェディングドレスを着た
母が居た

そして、その周りには父の知り合いの・・・魔界のモンスター
や地獄の鬼や等など人間以外の者も大勢来ていた

因みに神父もモンスターである

何故かは突っ込まないでくれ

「では、ページ数も少ないのでいきなり誓いの口付けに行っちゃっ
て下さい」

半ば投げやりの神父を無視して父と母は互いに口付けを交わす

それを見ていた観客は一斉に祝福の声を上げる
すると、母はいきなり赤面しだし・・・

[illegible]

と言つてこれまた教会の壁をブチ破つて走り去つてしまった

「ぬおおおお！ 愛の逃避行って奴だなあ！ 逃がすかあああああ
ああああああ！」

と言って父もその後を追いかける

「つてか……この教会の壁……誰が直すんだよ（汗）」

神父は教会にポツカリと開いた大きな穴を見てこれまた大きく溜息をついた

【回想 終了】

「いやあ、あの結婚式は良かったなあ」

「本当ねえ」

父（魔王）と母はこれまた懐かしむように呟く
それを聞いていたピツケルは

「いや、何処が良かったのとおおおおおおおおおおお
 おおおおお！」

本日……ええと何度目かのツツコミが炸裂した

「何あれ！ヤツツケ仕事にも程があるでしょう！それに何でモンスターや鬼とかが結婚式に来てるの？おかしいじゃん！それにまた母さん走り去っちゃったじゃん！」

これまた長いツッコミで苦労様です

「いやあ、あの頃は母さんはシャイな性格でなあ、すぐに恥ずかしくなって走り去っちゃうんだよ」

「気がついたら『韋駄天』なんて呼ばれてたものねえ」

「え？ あれって母さんが恥ずかしさの余り走りまくってたのが原因だったの（汗）」

母の以外な名前の由来に驚くピツケル

「それでもって、その翌日にお前が生まれたんだよ」

[illegible]

これまた盛大なかさのピツケルのツツコミが響き渡る

「何で結婚した翌日に僕が生まれたの？普通結婚した後暫くしてから子供って生まれるもんじゃん！何で翌日に生まれるの？」

「しょうがないじゃん。生まれちゃったんだから」

「人をポット出のキャラみたいに書かないでよ！それでも一応主人公なんだからさあ」

あ、そう言えばこいつが主人公だったんだ！

余りにも地味だからすっかり忘れてたよ

「何でナレーターも忘れてるの！ってか、何でナレーターが会話に参加してるの！ありえないでしょう！」

「誰と話してるんだ？ピッケル」

息を切らして壁に向かって怒鳴ってるピッケルを見て父（魔王）が首を傾げる

と、まあ・・・これがこの物語の一応主人公であるピッケルの両親の出会いと結婚の話である

かなり凄い出会いしてたんだなあこの2人（汗）

その6（後書き）

凄い両親だなあ（汗）

その7 (前書き)

今回遂に王と出会う

その7

ピッケルの両親の衝撃の出会いと結婚話を聞いたピッケルは、かなり動揺していた

無理も無い

自分の両親がこれ程までに凄まじい人生を送ってきたのだからだ
それなら自分を勇者に仕立て上げようとするのも頷ける

まあ父は魔王だし

母はマイペースだし

息子はツツコミだし

そんな家族であつたのだ

それで、今ピッケルと父（魔王）はと言うとさっきピッケルが一撃でKOされた始まりの草原に来ていた

だが、それは名ばかりで辺りにはレベル100のモンスターがぞろぞろと居る正に玄人向けの草原であつた

「のっけからこんなに強いモンスターが勢ぞろいしている草原って無いよねえ」

ピッケルが呆れながら呟く

確かにレベル1の勇者にいきなりレベル100のモンスターを倒せと言うのがそもそも無理な話なのだ

だが、良く考えてみたら何故レベル1の勇者の周りのモンスターは皆弱いと相場が決まっているのだろうか

そんな暗黙の決まりは一体誰が決めたのだろうか

もしかしたらレベル1の勇者のスタート地点のモンスターは鬼のように強い場所だってあるかも知れないのだ

「まだ冒険が始まったばかりなのに何弱気発言を連発してるんだ？勇者よ」

「連発してないし、そもそも僕はまだ勇者じゃないよ！それに冒険が始まって一発目に出会ったモンスターがレベル100ってどうい

う事？僕勝てないじゃん！」

ピッケルが怒鳴る

だが、父（魔王）は耳をホジホジして聞いていない

「いいか、ピッケル。世の中の勇者は何時も何時も、付近の弱いモンスターを虐めてレベルを上げてそれで魔王を倒すという王道を行っていたんだ」

「いきなり酷い発言だね父さん（汗）」

「だけど、そもそも何故勇者の周りの村は弱いモンスターしか居ないんだ？もしかしたら初めからレベル100の強敵ばかりしか居ない所から勇者が生まれるかもしれないじゃないか」

「そんなの知らないよ、良く言うご都合主義みたいな物なんじゃないの？」

ピッケルは面倒臭そうに呟く

すると、再び草原からモンスターが現れた

ピッケルは咄嗟にひのきの棒を構える

だが、出てきたモンスターは予想を反した物であった

大きな体に、両手は熊のように大きく鋭い爪が生えており足は馬の蹄を連想させる屈強な物であり顔はまるで牛のようであった

頭には2本の大きな角が生えており口からは絶えず涎が垂れていたまるで今にもピッケルをデイナーにしてしまおうと思っているようである

明らかに場違いなモンスターに出くわしてしまったピッケルは

「うわわわわあああああ！」

と、思わず腰を抜かして倒れてしまう

涙と鼻水の入り混じった液が顔からあふれ出す

それ程までに目の前に現れたモンスターは怖いのだ

だが、父（魔王）はと言うと

「ほほお・・・中々の強面だなあ」

と、関心していた

どっちかと言うと父（魔王）の方が怖いのだが

「よし、ピッケルよ！あのモンスターをやっつけるんだ！」

「いや、無理無理無理無理無理ムリ無理無理無理！絶対勝てないから！今度こそ食われるから！」

ピッケルは必死に両手を振って無理を主張した

「なら今此処で父さんの拳は痛いぞパンチをお見舞いされたいか？」

「・・・・・・やります（涙）」

正に前門の虎後門の狼であった

進む事も戻る事も出来ない

ならば男なら突き進むしかないのだ

そう思ったピッケルはひのきの棒を両手に持って猛然と飛びかかった

「てええええええやあああああああ！」

最早やけくそな状態でピッケルは思い切りひのきの棒をモンスターに叩きつけた

ゴキンと音がしてモンスターの頭にひのきの棒がヒットする

その後すぐに地面に降り立ちモンスターの攻撃に備えた

すると、目の前の巨大なモンスターはピッケルに殴られた箇所を抑えていた

「あ、あれ？」

そんなに痛かったのか
気のせいかモンスターの目には涙が浮んでいた
体もブルブル震えている
一体どうしたのか
手を伸ばそうとした時

『うわああああああああん！痛いよママアアアアアアア
ア！人間の子供が虐めたあああああああああ！』

と叫んで草原に逃げてしまった

「な、なんじゃそりゃあああああああああ！」

完全に拍子抜けである
図体に似合わずとてつもない弱さであった
そんなピッケルの元へ父（魔王）がやってくる

「弱い者虐めてお前って酷い奴だな」
「あんたが戦えて言ったんだろうがあああああああ！」

肩を上げて溜息をつく父（魔王）にピッケルが怒鳴る

「大体何あれ？何でひのきの棒の一撃で逃げたの？その上何あれ？
「痛いよママーーー」って言ってたよ！あんな強面のモンスターな
のに」

「んじゃ早速あのモンスターのデータを見てみるか」

そう言って父（魔王）は黒いボードを取り出した

モンスター名『キメラっぽい奴』

レベル..
1

$$\begin{matrix} \text{H} \\ \text{P} \\ \cdot\cdot \\ 2 \\ 0 \end{matrix}$$
$$\begin{matrix} \text{M} \\ \text{P} \\ \dots \\ 1 \\ 0 \end{matrix}$$

力
..
5

守
..
4

足
..
4

魔
..
3

性格

争いを嫌いとても泣き虫

その為良く虐められる

趣味は花の水遣りや動物の世話

近年飼っていたハムスターに子供が生まれて夢中らしい

と、書かれていた

それを見たピツケルは

[illegible]

と大声を出すのであつた

「何この弱さ！そしてモンスターなのに争いを嫌うてもうその時点でモンスター失格じゃん！そして趣味が花の水遣りや動物の世話って、どんだけ平和主義なの？それで最近飼ってたハムスターに子供が出来てそれに夢中って、他にも夢中になる事があるだろうがあ

あああああああ！」

これまた長々とツツコミご苦労様です

「まあ世の中には色々なモンスターが居るって事だろうね」

「世界って・・・広いんだね（汗）」

ピッケルはこの時、世界の広さを痛感したのであった

暫くしてピッケルと父（魔王）は「とある町」とこれまた適当な名前の町に付いた
因みにこの町には「とある城」と言う名のこれまた適当な名前の城がある

「やっと辿り着いたなピッケル！」

「ってか普通RPGでお城って言ったら第1話位から行く筈なのにこの小説だともう7話目だよ。どんだけ無駄な事してんだよこの作者は（汗）」

五月蠅い！あんまり変な事喋るとまたあのスライム出すぞ（怒）

「すみません」

わかれは宜しい

「何やってんだ？さっさと城に行くぞ」

「あ、はい」

そう言ってピッケルと父（魔王）は城を目指した
その道中では父（魔王）を見た町人が

「ママ、見て！魔王が居るよ」

「あら、本当！今時珍しいわね」

「よう其処の魔王さんよお！家で飯食っていきなよ！」

「あらあん、其処の魔王さくん、家で遊んでいかなあ？サービス
しちゃうからくん♪」

と、魔王を見ても大して驚く人は居なかった

「本当にどうなってんのこの小説（汗）」

そんな中、一人呆れるピッケルであった

とある城 城門

「き、貴様・・・この城に何の用だ!」

兵士の一人が震えながら聞く

「いやあ、ちよつとこの城の王様に会いたくて」

「ふ、ふざけるな! お前のような魔王を王に会わせられる訳が無いだろう!」

もう一人の兵士がこれまた震えながら言う

「まあまあそう言わずに」

父（魔王）は手をヒラヒラさせて言う

だが、兵士2人は一向に槍を納めようとはしない
むしろ今にも槍を刺そうとしている
そりゃそうである

普通いきなり魔王が現れたら普通はこんな対応をするのが当たり前である

やっ和普通のRPGになってきたなあ

「えー、じゃあどうしたら王様に会えるんですかあ?」

父（魔王）は碎けた感じで聞く

「そんな事!」

「出来る訳ないだろうがああああああ!」

そう叫んで兵士2人は槍を父（魔王）目掛けて放つ
だが、父（魔王）は

「あ、蚊だ！」

と言って兵士の額に止まった蚊を潰そうと手を突き出す

本人にしてみれば軽くやったつもりなのだが、兵士にとっては巨大な岩が飛んできたほどの衝撃が伝わりそのまま後方に吹き飛んだ
そして兵士はそのまま事切れた（気絶しただけです）

「じよ、ジョニイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

別の兵士が事切れた兵士（だから気絶しただけです）に向かって叫ぶ
すると、さっきの蚊が今度は別の兵士にくつつく

「あ、また！」

そう言って今度は軽く平手打ちを放つ

「おぎやあああああああああああああああああああ！」

兵士は諸に平手打ちを食らいそのまま錐揉み状に吹き飛んでいく

「あゝ、やっと蚊を仕留められましたよ。この時期蚊って鬱陶しい
ですよねえ・・・て、あれ？」

蚊を潰してホッとした父（魔王）は目の前で起こっている惨劇を見て首を傾げる

兵士の一人が門の前で倒れており、別の兵士は池の上で浮んでいる
それを見た父（魔王）は

「日頃激務で疲れたんだろう。そっとしておこう」

と言って城門を開けた

「ってか、あんたがやったんだろうがあああああああああ！」

そんな父（魔王）にピツケルが叫ぶ

一方、此処は玉座の間

其処には一人の王様が偉そうに座っていた
其処へ

「王様！大変です！」

「む、何事だ！」

王は威厳のある声で兵士に聞く

「実は……この城に………魔王が攻めてきました」
「え………」

王はその知らせを聞き立ち上がり、持っていたステッキを落とした
それ程の衝撃を受けたのだ
まあそりゃ魔王が攻めて来たって聞いたら普通そういう反応をする

よねえ

「目下城中の兵士を動員して魔王を撃退しようとかかっています、
思いのほか……って言うか強すぎて相手になりません（汗）」

「マジ？」

「はい……殆ど一撃で倒されます」

「……………」

王様はアングリと口を開いて固まっていた
そりゃそうだ

普通はそんな事言われたらそうなるわなあ

「あ……あのお……王？」

「嫌だあああああああああ！まだ死にたくないいいいいいい
いいいいいい！」

突如王様が大粒の涙を流して泣き出した

さっきまでの威厳さは微塵も無い

それどころか、返って情けなくなってきた

「お、王ううううううううううう！」

「助けてえええええええええええ！ママアアアアアアアアアアア
ア！」

「ってか、いい年してママって言う王が居るかあああああああ
あああああああ！」

兵士が泣き叫ぶ王に突っ込む

一方城内では

「魔王が攻めて来たぞおおおおお！」

「迎撃だあああああ！」

「一歩たりとも玉座に入れるなああああ！」

「この命に替えても魔王を倒すんだあああああ！」

「今日特番録画しなきゃあああああ！」

「ミーちゃんに餌やらないとおおおお！」

「まだ昼飯食ってねえええええええ！」

と、城内はパニックになっていた
そんな中を

「いやあ、皆忙しそうだねえ」

「そ・・・そうだね（汗）」

父（魔王）とピッケルは堂々と廊下を歩いていた
勿論途中兵士達が己の命を顧みず魔王（父）に飛びかかったが、その度に

「あ、蚊だ！」

と言って平手打ちを食らい一撃の元にの�れていくのであった
圧倒的な強さを持っていた

ってか、強すぎだよこの親父
もしこの親父を倒せる奴が居るとしたら出てきて欲しい位です

「いやあ、皆さん日頃の激務のせいでお疲れなのでしょねえ」

そう言って父（魔王）は気絶している兵士達を見て関心していた

「いや、だからこの人達を眠らしたのはあんただから（汗）」

そんな父（魔王）にピッケルが突っ込む

まあそんな気絶した兵士は放って置いて父（魔王）とピッケルは遂に玉座に辿り着いた（早いなあおい）

「き・・・来たな・・・」

王は震える足を必死に押さえながら玉座に座っていた

王は覚悟を決めていた

こうなったらせめて王らしく死のうと思っていたからだ
いざとなれば相打ち覚悟で飛びかかる準備も進めていた
隣には遺書も書いて残してある

最早悔いは無い

唯一あるとすれば、今夜やる予定だった「魔法少女ミリーちゃん」
の録画を忘れていた事であった

「さ・・・さあ来い！この王！最後の最後は王らしく散ってやるぞ
！」

クワツと目を見開いて王は剣を抜き放つ

「こんちは、魔王でーす」

だが、魔王の顔を見た途端王の考えは吹っ飛んでしまった

「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ！」

それ程までに父（魔王）の顔は怖いのだ

そりや魔王だもんねえ

[illegible]

そう連呼しながら王は魔王（父）に尻を向けて震えていた

「おやあ、あれが王なのかなあ？」

父（魔王）は目の前で震えている王を指差して言う

「そうなんじゃないの？」

ピツケルも半ばどうでも良いと言った感じで答えていた
それを聞いた王はとりあえず王の元へ歩み寄ると

「すみませ〜ん、話を聞いてくれませんか」

「非イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイ！」

目の前に現れた魔王（父）を見て王は飛びあがる
そして大地に降り立つと即座に土下座する

「おおおおおおお願いします！何でもいう事聞きますから命だけは・・・どうか命だけはお助けをおおおおおお！」

ガクガク震えながら王は言った

だが、父（魔王）はポリポリと頬を掻いていた

「んじゃあ話を聞いて欲しいんだけど」

「ええ、そりゃもう何でもいたしま・・・はい？」

王は素っ頓狂な声を上げて頭を上げた

「えーと、つまり貴方は魔王になる為にわざわざこちらにお越しになった・・・と言う訳なのですか？」

「いやあ、実はそうなんですよ。この忙しい時にどうもすみませんねえ」

父（魔王）はそう言ってニコリと笑う

だが、やはり顔が魔王なのでやっぱり笑っても怖い

王は未だに青ざめながらも話を聞く

ピッケルはその横で王に同情していた

「それでこっちに居るのが私の息子で将来勇者になる宿命を帯びた

ピッケルです」

「ほほう、君が勇者になる・・・ってか、魔王と勇者が一緒なのって可笑しくね？」

「はい、僕もそう思います（汗）」

実はピッケル自身もそう思っていた

本来敵同士である筈の勇者と魔王がこうして同じパーティーに居るのだから

どう見ても可笑しいコンビである

「まあ世の中にはそんな事も有りますからねえ」

「ねえええええよ！」

ハハハと笑う父（魔王）に王は突っ込んだ

「つと言う訳でこれから宜しくお願いしますね」

「は、はあ・・・こちらこそ・・・宜しく（汗）」

父（魔王）と王は互いに会釈を交わした

そして父（魔王）はスクッと立ち上がった

「んじゃ帰るぞピッケル」

「はゝい」

そう言って父（魔王）とピッケルは悠々と玉座を後にした

「た・・・助かったゝゝゝ」

王はヘナヘナと玉座に座り込んだ

そしてこうして生きてる事を心底神に感謝したそうだ

「よし、王に報告もしたし、明日から早速魔王らしくするぞお！」

城を出た父が天に拳を突き上げて言った

「つて言うけど、具体的にまず何やるの？」

「そりゃまずはお城を建てないとなあ」

「どうやって？」

「うーん……」

父（魔王）は腕を組んで考えこんだ
どうやら何も考えてなかったらしい
それを見てピッケルは溜息をついた

（先が思いやられるなあ・・・）

この時ピッケルは心底そう思ったそうである

その7（後書き）

父（魔王）

「次回はお城を建てないとなあ」

ピッケル

「お願いだからそろそろまともなRPGにさせてよ！僕未だにレベル1のままだよ」

父（魔王）

「何言ってるんだ！この小説がまともになる訳ないだろう」

ピッケル

「作者あああああああああ！このひのきの棒で殴ってやるから出て来いやあああああああ！」

その8 (前書き)

今回何とあのキャラがゲスト出演する事に!?

その8

父（魔王）は今、家の中で悩んでいた
その前には一枚の紙とペンがあった
因みに紙は真っ白であった

その前で父（魔王）は物凄い悩んでいた

「うゝゝむ、一体どうした物か・・・」

父（魔王）が腕を組んで只でさえ怖い顔が更に怖い顔になった
其処へお茶を持ってきた母がそっと隣に来て茶を置く

「随分難航してるみたいねえ」

「うん・・・こういうのって案外苦手だからねえ」

父（魔王）は前回王様との謁見の末魔王になれたので次は自分の城
を作ろうと思って設計図を描いていたのだ

だが、父（魔王）は元々木こりであって設計士では無い
従って、城の設計図と言ってもそう簡単に行かないのが現状なのだ

「うゝん・・・仕方ない・・・外に行ってアイディアを練って来る
か・・・」

「夕飯までには帰ってきてねえ」

母は眩しい笑顔で手を振って父（魔王）を見送った

父（魔王）は外に出て適当にブラブラしていた
特に目的がある訳では無い

只何となくである

ふと、父（魔王）はある事に気づく

「そうだ！自分で考えて駄目なら他の人に聞けばいいんだ！」

何でこんな簡単な事に気づかなかったのだろうか

そうだ、一人で悩むより皆で悩んだ方が数段マシになるでは無いか
そう思った父（魔王）は早速麓の村に下りた

その様子を息子ピッケルは学校の帰りに目撃していた

「また何かろくでもない事をやらかす気だな？」

そう思ったピッケルはすぐさま帰宅して荷物を置き、父（魔王）を
追いかけた

父（魔王）は麓の村に聞き込みをしていた

「実は今城を作ってましてねえ、中々アイディアが浮ばないんです
よお」

と言って付近のおばさん、叔父さん、お子様、子犬、子猫、モンス
ターに聞き込みをしていた

って、何モンスターに聞いてんのこの馬鹿親父は

「父さん！何やってんの！」

すると其処へ、我等が主人公であるピッケルが到着する
父（魔王）もピッケルの存在に気づく

「おお、ピッケルじゃないか！ひよつとしてこの哀れなパパの力になりに来てくれたのかい？」

「哀れって、その格好が既に哀れだよ！ってそうじゃないよ！今度は何をやらかそうとしてるの？」

「失敬な！まだ何もしてないぞ！」

「何かする気だったんだなこの馬鹿親父！！」

ピッケルは額に青筋を浮かべて怒鳴る

そんなピッケルに意を返さず父（魔王）は聞き込みを続ける

そんな時、父（魔王）の前に奇妙な格好をした3人組が現れた

「む！あの3人は・・・」

「誰だろう、この辺じゃ見かけないなあ」

父（魔王）とピッケルの前には、銀髪で白い服を着た死んだ魚の目をした腰に木刀を差した胡散臭そうな男と、

眼鏡を掛けた地味と地味と地味で出来た正に地味の王様と言った感じの地味男と、

赤いチャイナ服を着て古臭い傘を差してス昆布を齧る青い瞳の小娘が居た

「銀さん、本当に此処に魔王が居るんですか？どう見ても普通の村に見えるんですけど・・・（汗）」

地味王が銀髪の男に聞く

それに男が面倒臭そうに髪を掻いて言う

「バツカ、こういう所にこそ魔王ってもんは居るんだよ、案外シャイな性格でこんな場所では作れない魔王も居るだろう？きつと」
「いや、此処って明らかに勇者がスタートする地点に見えるんですけど・・・ってか、シャイな性格で人間のすぐ側に城を作る魔王なんて聞いたことないですよ！！」

地味大王が突っ込む
するとチャイナ娘がス昆布を離して口を開く

「うっさいネ、新八^{じみ}の癖にあれこれ気にしすぎね、だからお前は『ダメガネ』なんだよ」

「おい！それとこれとは関係ないだろう！ってか、この作者も僕の事を『地味の王様』とか『地味大王』とか好き勝手言わないで下さいよ」

「良かったじゃねえか新八。王様だぜ、しかも大王だなんて・・・出世したなあ、姉貴に胸を張って報告出来るじゃねえか」

銀髪の男が鼻を穿りながら言う
しかも、穿った指をチャイナ娘の頭にそっとつけた

「いや、よくねえって！何処の世の中に地味大王と呼ばれて嬉しがる男が居るんですか！幾ら大王って言っただって地味の大王なんて嬉しくないですよ！」

額に青筋を浮かべて地味地味地味が言う

「ってか、作者！さっきは地味大王って言ってたのに今度は地味三連発かよ！何？そんなに3が好きなのか？『ア○マ○ザー3』がそ

んなに好きか？」

何マニアにしか分からないツツコミしてんだ？

だからお前は何時まで経ってもダメガネなんだよ

その眼鏡叩き割って駄目にしてやろうか？ああ

「黒っ！何この作者！こんなに腹黒い人だったの？折角ゲスト出演出来たのに何？この扱い」

駄目男は空に向かって叫んでいた

その光景を2人はヒソヒソ語り合っていた

「銀ちゃん、あのダメガネ相当来てるアルよ。もう頭から意味不明な電波が飛びまくってるアルよ！ゲ○ゲの鬼○郎アルよ」

「ああ、ありゃ駄目だな。近いうちに目から涙を流して死ぬだろうよ」

と言うような会話をしていた

「一体誰なんだろうね、父さん」

「むむむ、私は分かってしまったぞお！」

「え？父さんあの人達は何者なのか分かったの？」

「ああ、彼等はきつと建築のスペシャリスト達だ！」

「あれがああああああああああ！何処をどう見たらそう見えるの？どう見ても只の胡散臭そうな人達にしか見えないけど？」

ピッケルさん、何気に酷い事言うねえ

「とにかく、あの3人が他の人にスカウトされる前にこっちがスカウトするんだ！」

「あ、父さん!!!!」

ピッケルの静止も聞かず父（魔王）は三人の元へ向かった
3人は未だに父（魔王）に気づかずに話し続ける

「すみません、其処の人達」

「あん？　一体何なん・・・だあああああああああああああ
あああああああああああああああ！！！」

銀髪の男が声のした方を見た途端青ざめた
そりやそうだ

何せ目の前にはこれでもかと言う程怖い顔をした魔王が居たのだから
後ろの地味大王とス昆布娘も同様に真つ青な顔になる

「でででで、出たアアアアアアアアアアアア！ 本当に出たアアアアアアアア！」

「おおおおおおおお落ちてくネ新八！ そそそそそそそそそんなだからお前は地味男って呼ばれるアルよよよよよよ」

いや、明らかにお前等動揺し過ぎだから
 ってか、あれ？　そういうえば銀髪の男は？

• • • • •

地味男とス昆布娘はすぐ其処にあつたゴミ箱に隠れようとする銀髪
の男を見つけた

そんな男に2人は冷ややかな視線を送る

「な！こ、これは違うぞ！きつと此処にムー大陸の入り口があると

思って入っただけだからな！」

「分かりましたよ、ムー大陸にでも何処にでも行って下さいよ」
「そして二度と帰って来んなヨ」

冷やかな視線を送りながら2人が言う

銀髪の男は冷や汗を流しながら必死に弁解する

「んだとお！てめえらムー大陸を信じてねえな！すげえんだぞムー大陸ってよお！」

銀髪の男は必死にムー大陸の凄さを説明しているが、二人は全く聞く耳持たずであった

「もしもし、もう話しは終わったのかい？」

ほっとかれた父（魔王）が3人に言った

それを聞かれて途端に3人供真っ青な顔になる

「すすす、すみません！とりあえず何かすみません！本当に何もしませんから！だから頭からパクリとか丸呑みとか舌を千切るとか勘弁してください！」

まるで地味な男略してマジオは土下座してこれでもかと言うほど地面に頭を下げた

その横ではチャイナ服の娘と銀髪の男が鼻を穿ってる
それにマジオが切れる

「てめえらも謝れバカヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

と言って思い切り二人の頭を地面に叩きつける

「あゝ、君たち、何もこんな往来で土下座なんてしたらみっともないよ」

「え？」

「それにそんな事したら服とかも汚れちゃうじゃないか！止めなさい」

「は、はい・・・」

予想外の言葉にマジオは一瞬戸惑う

そして、横の2人を叩き起こして数歩下がった所で3人は話し合う

（どう思います？銀さん）

（どうっておめえ、ありゃあれだよ、学生時代友達出来なかったせいでだれかれ構わず見境無く声掛けて無理矢理友達になろうとするあれだよ）

（人生真っ暗な奴のやる事は皆同じアルよ！新八の未来もきつとダークよ！真っ暗ヨ！一寸先は闇の世界ヨ！）

（そんな訳あるかあああああああ！ってか、絶対そんな暗い未来嫌ですからねええええええええ）

（黙れよマジオ！だからお前はマジオなんだよ！）

（そうネ、マジオはマジオらしくその辺で指咥えてガタガタ震えてるよろし）

（んだとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおとおおお！）

と、ヒソヒソ声で話し合っていた

（銀さんだって主役の座から卸して只の駄目人間にしてやるよ！神楽ちゃんも語尾のアルを取って只の大食い娘にしてやるよおお！）
（上等だコラアアアアアアアアアアアア）

(掛かって来いやアアアアアアアア糞がああああああ!)

ヒソヒソ話から一変して激しい殴り合いの喧嘩に発展していた

「いかん！このままでは3人が大怪我してしまう！此処は父さんである私が止めねば」

「って、どうやって止める気？」

「父さんが平和的に解決してみせよう！」

そう言って父（魔王）が喧嘩している3人の元へ駆け寄る
そして、

「喧嘩はいかんぞパアアアアアアアアアアアアンチ！」

「「ぎゃあああああああああああああああああああ……」

父（魔王）は思い切り3人を殴り飛ばした

それを見たピツケルは

「何処が平和のいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

と叫んだと言う

無論、3人は父（魔王）の鉄拳を諸に食らい上空2000 m位まで上昇した後、地面に頭から落下した

凄まじい轟音と砂煙を巻き上げて3人は目を回してしまった
それを見て父（魔王）は

「よし！平和的に解決出来たぞ！」

と云ってグツと拳を握る

それを見たピッケルは

「何処がじゃあああああああああああああああああああああ
あ」

と、盛大に叫ぶのであった

その8（後書き）

次回、魔王城を建設する・・・予感

その9 (前書き)

今回父(魔王)が魔法を使います

その9

「う・・・うう・・・」

ジミオは目を覚ました

其処は落ち着きのある小さな家の中であった

「大丈夫ですか？」

ジミオは自分に声を掛けてくる少年の姿を見つけた
恐らくこの少年が自分達を助けてくれたのだろう

「君は？」

「僕はピッケルと言います。先ほどはうちの父（魔王）がとんでもない事をして申し訳ありませんでした」

と言ってピッケルは頭を下げた

え？あの魔王の息子？どう見ても人間じゃん！一体どんなDNA構造をしたらあんな魔王からこんな無垢な少年が生まれるんだ？
そう思えた

「あ、僕は志村新八って言うんだ。ところで、さっき父（魔王）って言ったよねえ、まさか君のお父さんって・・・」

「はい・・・さっき貴方達をぶっ飛ばした魔王が僕の父です（魔王）」

「はあ、君も苦労してるんだね」

「いえ、貴方程ではありませんよ」

そう言って新八とピッケルの地味コンビは大きく溜息をついた

「誰が地味コンビじゃ!」

おお、流石地味コンビ! 見事にハモツたぞお!

「ピッケル君も大変だねえ、こんな感じの小説に出てたら」

「いや、新八さんには及びませんよ」

と言って慰めあう地味コンビ
すると、

「おお! 目を覚ましたのかい? ダメガネくん」

何の悪びれも無く父(魔王)がやってきた

「いや、僕新八って名前があるんですけど・・・」

「おや? だけど君の連れの人達がそう呼んでいたけど」

「あいっらあああああああああああああああああああああ
ああ!」

それを聞いた新八は飛びあがって部屋を出た
そして真っ先に向かった所はと言うと

銀髪の男とチャイナ娘はテーブルに座って食事にありついていた

「うんめえ! 何この手作りパフェ! 舌の上で蕩けるんだけど! もう
これ食ったらそこら辺のパフェなんて食えねえぞ!」

「この卵かけご飯も半端無いネ! トロリとした卵に熱々のご飯のマ

ツチングが殺人的ネ！もうコレ食ったら明日から私は何を食べて生きていけば良いネ！」

と、絶賛しながら食べていた

「あらあら、お世辞が上手なのねえ。お母さん張り切っちゃうわあ」

自分の出した料理を散々べた褒めされて嬉しいのか母は顔を紅く染めている

すると、其処へ

「ゴルア！この天然パーマ！そして酢昆布娘！よくも僕の名前を変な風にしやがったなあ！」

扉を蹴破って新八がやってきた
それを鬱陶しそうに2人が見る

「んだよ新八、今こっちは飯の最中なんだよ。空気読めよこのKY」

「そうね、お前はこれだから何時まで経ってもメガネになれず未だにダメガネなんネ！自覚しろよカスが！」

「いや、酷くない！2人して酷くない？僕の扱いって此処まで酷い物なの？」

新八は泣きながら聞く

だが、2人は面倒臭そうな顔をしている

「知らねえよ、この作者にでも聞けよ」

「そうネ、この作者はこれの他にも色々書いてるけどどれも中途半端な奴ばっかネ！ハッキリ言って素人丸出しネ」

この3人は実は建築家などでは無いのだ
そこで、この3人について簡単に説明するでしょう

まず、こうして甘い物を食べている銀髪の天然パーマのダルそうな男は『坂田 銀時』

江戸の歌舞伎町にある『万屋銀ちゃん』のオーナーである
常に甘い物を食べていないとイライラする体質らしく、絶えず甘い物を食べている糖尿病寸前の男

だが、腕前は凄まじく、かつては『白夜叉』と呼ばれ恐れられていたらしい

んで、此処に居る駄目で地味のミックスしたメガネしか取り得の無さそうなガキは『志村 新八』

見た目どおりメガネしか取り得の無い奴である
以上

最後にこのどんぶり飯を平らげている大食い娘の名は『神楽』
外宇宙から来た戦闘民族『夜兎族』の娘である

かなりの腕っ節を持ちその実力は凄まじいの一言
だが、かなりの毒舌家らしくその上大食感とまで来ており、万屋銀ちゃんの家計を追い込んでいるのは彼女が9割型そうである

「うし、自己紹介お疲れさんっと」

「いや、ちょっと待って下さいよ！何で僕のおんなに酷い内容なんですか？メガネしか取り得の無いってどんだけ僕存在感無いんですか？」

「うっせえよ！飯時にギャーギャー騒ぎやがって！発情期ですか？
コノヤロー」

「おい、神楽！それ俺の台詞だから、勝手に取るんじゃないやねえよコノヤロー」

「良いじゃん減る物じゃないし」

「減るんだよこれが！てめえがそんな風に連発するたんびにブームが過ぎ去って行くの！気がついたら『何、あの人まだあんな事言ってるの？古〜い』なんて言われるんだぞ！」

そんな感じで3人は騒ぎまくっていた

すると其処へ遅れながらも父（魔王）とピッケルがやってきた

「いやいや、仲の宜しい事で」

「これ・・・仲良いつて言えるの？」

父（魔王）は新八達の口論（鉄拳も入るよ♪）を楽しそうに見つめピッケルは青ざめながら見ていた

そんなこんなで食事を終えて母が台所で片づけをしている間、父（魔王）とピッケルは銀時達に依頼の話をしていた

「つと、言う訳でこの家を魔王城にリフォームして欲しいんですよ」

「オイイイイイ！それもウリフォームってレベルじゃないからあああ！既に増築の域すら通り越してるからあああああああ！」

銀時は額に血管を浮かべて怒鳴る

だが、このマイペース親父がそんなに引き下がる筈も無く

「そうですか！やってくれますか！それは有り難い」

と言って頭を振っていた

（（物で釣られたよこの駄目人間・・・））

と心の中で呟いていた

そんなこんなで万屋三人は母の手作り鯛焼きに釣られて魔王城作りに専念するのであった

父（魔王）曰く『足りない物があつたら言つて下さい！すぐ揃えますんで』と言っていた

銀時達は鳶職人がしているような服装をして木材を切っていた

「どうするんですか？銀さん。僕達あの魔王をやっつけるようお城から依頼受けてるんですよ！それなのに何で魔王城建設の手伝いをしなきゃならないんですか？」

「知るか！それより手え動かせ！少しでもサボってる所を魔王さんに見られてみろ！俺達あ今夜の晩御飯の主菜と副菜ざんときと余り物かぐらになるんだぞ」

「ちよっと待てええええええええええええ！何で僕が余り物？酷くない！幾らなんでも酷すぎない！？他の作者さんより僕の扱いが酷い気がするんですけどおおおおおおおおおお」

新八が叫ぶ

多分気のせいだろう

気にすんな

「いや、気にしますよ！何で僕ばかりこんな目に合うんですか！僕も一応レギュラーメンバーなんですよ！それなのにこの扱いって無いんじゃないですか？」

あれ？お前ってレギュラーメンバーだったっけ？

「そうだったけ？」

「嘘ネ！お前なんて二軍も良いとこネ！後少しで三軍落ちの崖っぷちキャラネ」

「ド畜生おおおおおおおおおおおお！見てろよ！何時か絶対主役になってやるからな！」

嫌、お前は無理だろう

「納得」

「当然ネ」

銀時と神楽も納得していた

「ひ・・・酷い・・・酷いよおおおおおおおおおおお
おおお！」

新八は泣きながら逃げ出していった

「あ！あんにやろう逃げやがった！」

「卑怯者ネ！男の風上にも置けん奴ネ！これだからアイドルオタクは」

「どっかの話したとあれの他にアニメオタクになっちまってるらしいからよ。もう手が付けられねえぜ」

2人が話していると

「やあやあ、お疲れさん差し入れを持ってきましたよ」

父（魔王）がそう言って人数分のお茶とお菓子を持ってきてくれた

「おや？あのダメガネ君は？」

「さっき仕事をボイコットして逃げ出しました」

「俺の青春は何処にあるんだああああああ！って叫びながら逃げていったネ」

「何と！新八君はそんなに悩んでいたのか！待っていてくれ！新八くうううううううううううん」

父（魔王）が猛ダッシュで新八の後を追う

それから数分後、新八の断末魔の叫びが木霊したのは言うまでも無い

それを聞いた銀時と神楽は真っ青になって作業に戻ったと言う

暫くして、ボロ雑巾のようになった新八を抱えて父（魔王）が戻ってきた

それを見てピッケルは目を大きく見開く

「し、新八さああああああああああああん！」

力なくその場に倒れた新八にピッケルが駆け寄る

「嫌、何処がああああああああああああああああああ！」

其処へまたピッケルが叫ぶ
って言うか、またかよ（呆）

「黙れ馬鹿作者！何で手術に漫画とかゲーム機を使うんだよ！しかもさり気にあの医者手術と書いて「こうさく」って呼んでたぞ！あれ明らかに手術舐めてるだろう！」

大丈夫だろう。元々がギャグ小説だから何とかなるだろう

「ならねえよ！（怒）」

おっと、そうこうしている内に手術が終わったみたいだな

「先生！新八君は・・・新八君はどうなったんですか？」

「安心し給えピッケル君、手術は成功だ！」

「ほ、本当ですか？」

「ああ、その証拠に・・・」

そう言って先生の後ろから姿を現したのは、新八・・・・・・・・の
掛けていた眼鏡であった

「おお！完全に直ってますね」

「うむ、手術は大成功だ！」

「本体はどうしたあああああああああああああああああああああ
あああ！」

父（魔王）と先生が納得する中、ピッケルが怒鳴る

「何言ってるんだピツケル！新八君の体の95%は眼鏡で出来ているんだぞ」

「それじゃ肉体は5%何ですか？」

「いや、残り3%が眼鏡拭きで出来ていて後の1.5%がツツコミで出来ているんだ」

「じゃあ新八さんの本体ってったの0.5%しか無いのおおおおおおお！おおおお！おおおお！おおおお！」

ピッケルは有り得ないと言った顔で怒鳴る
そして、ふとある事に気づく

「そ、そう言えば、新八さんの本体は？」

「ああ、余ったパーツならその辺に捨てておいたよ」

と言つて先生が指を指す先には、燃えるゴミの中に新八の本体が捨てられていた

「し、新八さあああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああん！」

ピッケルはこの日渾身の叫びを上げたと言う

その9（後書き）

ピッケル

「酷すぎる！一体新八君に何の恨みがあるんだ！（怒）」

父（魔王）

「まあそう言うな！ああ言うキャラは次回にはケロッとしてるのが当たり前なんだ」

ピッケル

「つくづくこれってギャグ小説なんだね（涙）」

その10（前書き）

今回は新八がメインの話です
新八ファンの方、そして新八ファンでは無い方
すんません！

その10

新八はうつすらと目蓋を開けた

目の前に広がるのは薄暗い手術室であった

そして、その自分の周りを白衣を身に纏った怪しげな医者達が立っていた

「な、何ですか？ 貴方達は！！」

新八は叫び逃げ出そうとした

だが、体が動かない

良く見ると、新八の両手と両足はガッチリと拘束されて大の字で寝かされていたのだ

『気がついたかい？ 志村 新八くん・・・嫌！ 仮面メガネーよ』

突如壁から声が聞こえた

新八は声のした方を向いた

其処には鳩をモチーフにした壁飾りがあり、その目の部分が赤く光っていた

まるで、某改造ヒーローの悪の幹部とかでありそうな感じの壁飾りである

「だ、誰だ！ あんたは！」

「私は悪の秘密結社『ロッカー』の幹部だ！ 志村 新八よ！ お前の優れたツツコミ能力を我がロッカーは買い、お前を改造人間にしたのだ」

「な、なんだって！」

新八が叫ぶが首領は聞く耳持たずである
そのまま話しを続ける

『今から貴様に100万Vの電気を流す』

「ええええ！」

『普通の人間なら物の数秒で黒こげとなるだろう・・・だが、お前は改造された事によりメガネパワーを発揮して100万Vの電気を自分のエネルギーに変える事が出来るのだ』

「ちよっとおとおおお！何ですか？そのメガネパワーって！
どんだけ人のメガネで遊べば気が済むんですか！！」

新八が額に青筋を浮かべて怒鳴る

だけどそれでも一向に振り向いてくれないのが首領のいい所なんだ
ねえ

「何処がだよ！完璧に悪い人じゃないか！」

うつせえよ！ダメガネ！改造人間にしてやっただけでも有り難いと
思いやがれこの糟が！
カス

「相変わらず黒いよこの作者！表では優しい人なのにどうして僕にはこんなに厳しいの？」

おや？それはお門違いだなあ。もしお前が嫌いならそもそも出さないし

「あ！そうか！」

って、な訳で戦闘員1号君！さっさと電気を流してくれたまえ

「ういゝゝっす……じゃなかった！イイイイイ！」

全身黒タイツでマスクを被り、死んだ魚の様な目をした銀髪がはみ出た戦闘員が片手を上げて叫んだ

「ってか！銀さああああああああああん！何してんですかあああああああああ！早くこれ解いて下さいよおおおおおとおお！」

新八がすぐに正体に気づき叫ぶ

だが、銀時……もとい戦闘員1号は鼻を穿っていた

「うっせえよ！何で俺が戦闘員でてめえがヒーローなんだよ！ムカつくんだよ！このメガネっ子が！ちっとも萌えねえんだよ！イイイイイイイ（怒）」

額に青筋を浮かべて戦闘員1号が怒鳴る

「い、嫌……そんな事僕に言われても……」

仕方なく新八は他に誰か居ないか視線を移した

すると、その隣に戦闘員1号より少し小柄な戦闘員が酔昆布を齧りながら新八をジト目で見ていた

「って、神楽ちゃああああああああああん！何で神楽ちゃんも此処に居るの？」

「神楽じゃねえよ！戦闘員2号アルよ！てめえは黙ってさっさと寝てろよ糞眼鏡が！イイイイイイイ（怒）」

なりしてくんねえかなあ・・・イイイイイ」

「そうね、こんなダメガネの悲鳴なんか聞いてたら耳が腐ってしま
うね・・・イイイイイイ」

と、不機嫌マックスな顔で話していた

『よし、もう止めていゝよ』

「イイイイイイ！・・・あらよつと」

やっとこさ命令が降りたので戦闘員1号は電流のスイッチを切った
新八はやっと電流から開放されたのか肩で息をしていた
かなり苦しそうであった

「な・・・なんとか・・・僕・・・生きてるみたい・・・」

自分が生きてる事に実感が沸いたのか新八の目からは自然と涙が溢
れていた

そんな新八に戦闘員1号と2号がやってくる

「何てこった！・・・こりゃ失敗だ」

「真っ黒こげネ・・・こりゃ使い物にならないネ」

2人は残念そうに首を振っていた

「え？何言ってるの二人とも・・・僕こうして生きてるじゃん！ピ
ンピンしてるじゃん！何で失敗なの？ねえ！」

新八が叫ぶ

首領もそんな新八を見る

『あゝりやりやゝゝ、こりや失敗だねゝゝ。やつぱダメガネはダメガネかゝ』

首領の残念そうなコメントと溜息が聞こえてくる

「待てええええええええええええええええ！僕こうして生きてるじやん！何で皆氣づかないの？ねえ見てよ！僕生きてるよ！耐え切つたんだよ！」

新八は両手両足の拘束具を力任せに引き千切り、必死にアピールしたが、2人は未だに愕然としたままであった

「ねえ、ほら！僕ちゃんと元気じゃん！何で失敗した何て言うの？」

新八が怒鳴ると、戦闘員1号が新八の顔に手をやる。そして、戦闘員1号が手に持っていたのは・・・・黒こげになっていた眼鏡であった。

「って、また眼鏡かいいいいいいいいいいいいいいいい
い！（怒）」

新八は再び青筋を浮かべて怒鳴る

「あゝあ、こりゃ駄目だな．．．使い物になんねえや。捨てちまおうぜ！ イイイイイイ」

「全くね、また新しい人間を拾って来ないといけないネ！この役立たずが！イイイイイイ」

そう言うとき、戦闘員と研究員達は互いの「お疲れ」とか「今日飲みに行かない」とか口々に言いながら去っていった。

「え？ちよつと待ってよ．．．僕はどうなるの？ねえ．．．このままほったらかし？ねえ！」

新八は助けを求めるように首領を見たが

『あゝ、もう君要らないから帰って良いよ』

そう言って瞳のランプが消えた

それを見た新八は

「ふざけんなあああああああああああああああああああああああああ！」

と、叫んだと言う

「はうああ！」

新八は目を覚ました

其処はさつき自分が目覚めた家の部屋であつた

「な、何だ……夢だったのか……」

ほっとする新八
其処へ

「大丈夫ですか？新八さん」

この家の長男ピッケルがやってきた
あの後ピッケルに怒鳴られてICUは渋々新八の治療をしたらしい
その為か今の新八は体力MAXの状態である

「あ、僕はもう大丈夫だよ。それより皆は？」

「ああ、それでしたら・・・」

ピッケルが言おうとした時

「くおおおおおおおおおらあああああああああああああ
あ！新八いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

「起きろごらあああああああああああああああああああああ
！！」

と怒鳴りながら駆け込んで来た銀時と神楽が新八に飛び蹴りをお見
舞いする

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ
あああ！！」

新八はそのまま放物線を描いて壁に激突する

「てつめ！何一人だけ寝てる訳！仕事ボイコットに続いて今度はサ
ボリですか？偉くなったなあコノヤロー！」

「人が汗水鼻水垂らしながら必死に働いてる時に、てめえは呑気に夢の中かよ！調子に乗ってるんじゃないぞこのダメガネがああ！」

2人共不機嫌MAXと言った感じで新八を睨む

そんな中、新八は眼鏡を掛けて2人を見る

そして、

「あ、戦闘員1号と戦闘員2号だ」

と言ったのであった

それを聞いた二人は

ブ
チ
ツ

「誰が戦闘員1号じゃあああああああごらあああああああ
あああああ！」

「人を戦闘員何かにするんじやねえええええええよおおおおお
おおごらあああああああ！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！」

戦闘員呼ばわりされた2人は思い切り新八をフルボッコにするのであった

そして、魔王城が完成したのは、それから約2週間後の事であった

とき

んで、一方、我等が魔王はと言うと

「んゝゝ、平和だねえ母さん」

「そうねえ、お父さん」

母とお茶を飲みながら平原でのんびりしていたらしい

その10（後書き）

ピッケル

「結局、夢落ちだったんですね（汗）」

作者

「まあ所詮ダメガネはこんなもんだろう」

ピッケル

「ヒドッ！其処まで言うなんて酷すぎるよ作者！新八さんがかわいそうだよ」

魔王

「何を言うか！男ならば必ず試練と言う物が降り注ぐものだぞ」
ピッケル

「あれは試練じゃなくて拷問だよお父さん（汗）」

その11（前書き）

魔王城かんせ〜い！

その11

「「「かんぱ〜〜〜い！」」」

魔王城が完成した事で城の中では父（魔王）とその家族と万屋一向が宴会をしていた

「いやあ、流石は一流建築士ですなあ、まさかたったの二週間で完成させてしまうとは」

「ま、まああれだ！一度頼まれたら死んでも遣り通すのが男であり、侍でもあるって言うのかな？・・・新八くん？」

「何で僕に振るんですか！・・・ま、まあ、そうなんでしょうねえ」

新八が照れながら言う

「何照れてんだよダメガネ！お前はさっさと御代わり持ってこいよ！どうせそれしか使い道無いくせに一丁前に照れてんじゃねえよこのダメガネが！」

「って、神楽ちゃん何か酷くない？何でそんなにボロクソに言われなきゃならないの？（涙）」

新八が目から涙を流しながら叫んだ

そりゃ泣きたくなるよねえ

因みにどんな城かというと、デ○ズ○ーラ○ドにあるシ○デ○ラ城を思い浮かべて欲しい

あれより二周り位小さいサイズの城である

その中は正に魔王が住んで居そうな禍々しさ等はまだ無く、新品その物であった

「あらあら、こんなに広いと家族3人じゃ少し寂しいわねえ」

母は頬に手を当てて少し寂しそうに呟いた

確かに、家の大きさは第1話に出てきた自宅のおよそ2〜30倍はあるのだ

そんなだっ広い家の中を家族3人だけと言うのは確かに寂しい物がある

「なあに、今度は一緒に暮らしてくれるモンスターを探せば良いのさ」

「あら！そうよね！じゃあ私はサイクロプスが良いわあ、きっと大きい荷物も持ってくれるだろうし」

「それなら私はやっぱりドラゴンだねえ、何せ飛べるんだし」

「へえ、んじゃ俺はパフェ魔人とかが良いなあ・・・きつとパフェ食い放題だろうぜえ（ジュルリ）」

「私は断然酔昆布魔人ネ！酔昆布地獄アルよ！夢心地アルよ！」

「いねえよ！酔昆布魔人もパフェ魔人もそんなモンスター居る訳無いだろうが！」

銀時と神楽のボケに今日も新八のツツコミが炸裂する

「そうだよ！第一どうやってこのお城にモンスターを集めるの？その前にどうやってモンスターを説得するの？」

そして、今日もピツケル君の下らないツツコミが入りました
おいおい、まだガキなんだから夢位見ろよ
でないとロクな大人になれねえぞ

「大きなお世話です！それよりどうやってモンスターを集めるの？」

「そんなの簡単だよ！手頃なモンスターとバトルして勝って勧誘するんだよ」

「強制勧誘！？酷い！正に魔王だよお父さん！」

ピッケルが怒鳴るも父（魔王）は聞く耳持たずである
そんな時、玄関を叩く音が聞こえた

「おや？誰か来たみたいだなあ」

「おい、新八メガネサルお前出て来いや」

「そうね、どうせお前暇だろ？さっさと出て来いよこの新八ジミオが」

「おいしいいいいいいい！2人して新八と書いて『メガネサル』とか『ジミオ』とか言ってるじゃねえよ！」

「まあまあ、とりあえず頼むよ新八君ダメガネ」

「ま・・・魔王さんまで・・・」

新八は目から大粒の涙を流しながら玄関に向かった
ジミのなかのジミ

「ってか！何で作者もさり気に僕の事虐めてんの？虐めカッコ悪いよ！」

うつせえなあ！さっさと開けろよ話し進まねえだろう（怒）

「う！・・・分かりましたよ」

渋々新八は玄関を開ける

「はーい、どちらさ・・・」

新八は玄関の扉を開けて客を見た途端凍りついた
何故なら、目の前には手に花を持った巨大な怪物が立っていたのだ

「おや？新八さんじゃ無いですか。此処で会うなんて奇遇ですねえ」
「な……なな何で屁怒紹さんが此処に……」

額から滝のように汗を流しながら新八は目の前に立つ怪物を見た
それこそ、銀時達が居る歌舞伎町の怪物と恐れられている屁怒紹で
ある

こんな外見をしているが実は中身は温厚でとても優しい人なのだ

「おや？屁怒紹さんじゃないか！」

「おお！テツさん！お久しぶりですねえ」

父（魔王）と屁怒紹は互いに手をガッチリ掴みあって再会を喜び合
った

「え？……ま、魔王さんって屁怒紹さんとお知り合いなんですか
？」

「ああ、昔私が修行中に会ったんだよ」

「懐かしいなあ……私にはあの頃がまるで昨日の様に思い出せま
すよお」

「いや本当に」

そう言って父（魔王）と屁怒紹が笑いあった

新八の目の前に2人の魔王が居る

そう見えた

それだけで新八の肝は握りつぶされる感覚に陥った

＊＊＊

父（魔王）はかつての旧友である屁怒紹を魔王城に招き入れた
家族3人に加えて万屋3人の上に屁怒紹が加わり食事は賑やかな
った

「お久しぶりですねルーさん。はい、これ・・・私の店で育てて
る花なんですけどね」

「あらあら、わざわざ有難う御座います」

母は屁怒紹から植木鉢で植えられた花を貰う
それも嬉しそうに

「な・・・何で魔王さんも奥さんも屁怒紹さんを見て何とも思わな
いんでしょう？」

「さ・・・さあ・・・僕にも分かりません・・・」

父（魔王）と母と屁怒紹が楽しく会話する中、銀時達とピッケルは
震え上がる思いをしていた

無理も無い、幾ら本人が優しいと言ってもやっぱり顔が怖いのだ
ギロリとした赤い目、のこぎりの歯のように並んだ鋭い歯、頭に生
えた2本の大きな角

どう見ても魔王と見間違える程の怖さである

そんな屁怒紹と比較にならない程ピッケルの父（魔王）は怖いのだ
にも関わらず、母はそんな2人に板ばさみの中平然としている
しかも笑っているのだ

「あ……ありゃあきつとあれだ……恐怖の余りパニックになつてんだよ……ききき、きつとそうだ……絶対そうに決まってるるる……」

「ぎぎ銀ちゃん！ここ声がふふ震えているあああアルよよよ。ひひひひよつとしてて、びびびビビツっちゃったあああアルかかか？」

「嫌、明らかに神楽ちゃんの方が震えまくってるから（汗）」

顔を真っ青にして4人は見ていた

そんな時、また玄関を叩く音がした

「あ、またお客さんだ！」

「よっし、今度は俺が出てやろう」

「ああ、銀ちゃんズルいネ！今度は私が出るアルよ！」

「イヤイヤ、此処は僕が出るしか無いでしょう！2人が出たらきつとお客さんに迷惑をかける事間違いないし」

「「んだとゴルアアアアアアアアアアア！」」

と、叫びながら2人の飛び蹴りがヒットする

「星になるうううううううううううううううううううううううう」

意味不明な言葉を発しながら新八は放物線を描きながら飛んでいったそして、地面に落下しそうになった時

「フン！」

「ゲブホォ！」

突如屁怒組の豪腕が新八のボディに決まり、新八はそのまま落下地点より数メートル離れた場所に落ちた

そして、屁怒紹はその場に腰を下ろして何かを拾う

「いやいや、危ない所でした・・・危うく蟻さんを潰す所でした・・・殺生はいけない（ギロリ）」

どうやら新八の落下地点に一匹の蟻が居たらしく、その蟻を庇う為に屁怒紹は新八を殴り飛ばしたようである

それを見てピツケルは真っ白になり、新八は泡を吹いて気を失ったそんな2人を放って置いて銀時と神楽は玄関に向かう

「へーい、何すかぁ？新聞なら取って・・・」

これまた言葉の途中で言葉が止まった

其処に居たのは

「む、これは銀時にリーダーでは無いか！」

『奇遇ですなあ』

其処には黒い長髪の和服を着こなした美形（多分）の男とぬいぐるみのような生き物がプラカードを持って立っていた

「ってツラアアアア！何でてめえがこんなところに居るんだよ！」

「ヅラじゃない！桂だ！嫌何、この村に魔王城が出来たと聞いてな、それで一目で良いから魔王城を見たくて来てしまったのだ」

何ともどうでも良い理由でやってきた攘夷志士のリーダー『桂 小太郎』とそのペットの『エリザベス』が玄関の前に居たのであった

「あらあら、またお客さんが入らしたのね」

「お初にお目に掛かる。俺は桂小太郎と申す。好物はソバだ」

「何で好物を言うんですか？ソバ出せって言う意味なんですか？」

何故自己紹介で好物を言ったのか理解に苦しむピツケル

だが、それとは対照的に母は残念そうな顔をした

「御免なさいねえ、今ソバは切らしてるのよ。そうめんならあるんだけど」

「じゃあそうめで」

「麺類なら何でも良いんじゃないかああああああああああ！」

と言つて銀時の蹴りがヅラの頭にヒットする

「ズラじゃない！桂グワアアアアアアアアアアアアアアアア」

悲鳴とツツコミを同時にやつてのけた器用な男であつた

「いやあ、賑やかですねえ」

「いや全く」

そんな光景を屁怒組と父（魔王）は微笑ましく眺めていた
すると、また玄関を叩く音がした

「んだよ、今日はやけに客が多いなあ」

「あ、今度は僕が出ますよ」

そう言ってピッケルが玄関に向かう

「はーい、どなたですかあ？」

ピッケルが扉を開けると、其処にはグラサンを掛けたオッサンが立っていた

「あ、僕この家の子？あのさあ、この家って召使いとかのバイト募集してない？」

と言ってオッサンは懷から履歴書を出してピッケルに渡した

「えっと・・・叔父さんの名前は・・・『長谷川 泰三』・・・さ
んですか？」

「そうそう、ねえ募集してない？」

そう言ってオッサン・・・もとい長谷川・・・もうオッサンで良い
やこんな奴。はピッケルの前で惨めにも膝を着いて頼み込んだ
そんなオッサンに困り果てたピッケルは仕方なくオッサンの中に入
れる事にした

「成程、長谷川さんも大変だったんですね」

「いやあ、俺なんかまだ人間なだけマシですよ。それよりお父さんなんか魔王じゃないですか」

「いやいや、この格好も慣れると結構過ごし易いんですよ」

そう言って自分の体を見せる

「何処がだよ（汗）」

そんな父にピッケルがツツコミを入れる
そして母はオッサンに熱いお茶を差し出す

「どうぞ、お茶は体に良いですよ」

「あ、有難う御座います」

母に礼を言ってオッサンは入れて貰ったお茶を啜る
かなりの美味であったそうだ

「折角なんですけど、うちは今召使いは募集してないですよねえ・
・モンスターなら募集してるんですけどねえ」

「ま、マジっすか!?!? ・ ・ ・それじゃ、モンスター希望ならOKで
すか?」

「ああ、それなら万事OKですよ」

「えええええええ! 良いんですかあ!」

「一応三食寝床付きでこのお値段でならOKなんですけどうせし
ょう?」

そう言って父（魔王）が手際良く羊皮紙に値段を書いた

そしてそれを見たオッサンは飛び上がった
何故なら、その値段は今まで何処のバイトの時よりも良い値段だったからだ

「えええ！こ、こんな破格の値段でしかも三食寝床付きなんですか！？」

「まあ今はまだ出来立てなんでそれ位の値段しか払えないんだけどね」

「嫌、充分ッスよ！こりゃ来て良かったです！早速お仕事に入ります」

「そう、それじゃ早速君にやって欲しい事は・・・」

その日、魔王城の玄関の前に真っ黒に焦げた何かが転がっていた
そして、その物体の前には粉々に砕けたサングラスが転がっていた
そう、このこんがり焼けた物体はさっきまで魔王と親しく話していた長谷川泰三のなれの果てであった

「うゝむ、やはりいきなりドラゴンを相手にするのは不味かったか」
「不味かったか・・・じゃなあああああああああい！何長谷川さんをこんがり焼いちゃってんの！それよりもあのドラゴンは一体何処から持ってきたの？」

久々にピツケルのツツコミが炸裂した

「いやあ、丁度その辺飛んでたんで首根っこ引っ掴んで連れてきたんだけどね。丁度良いから長谷川さんにドラゴンの身の回りの世話をお願いしたらそのドラゴンが長谷川さんを餌と間違えたみたいでこんがり焼いちゃったんだよ」

と言って父（魔王）はアツハツハと笑った

それを聞いてピツケルは青ざめる

そりゃそうだろう

見ず知らずの男にあの凶暴なドラゴンの世話などさせるのだからしかもそのドラゴンを首根っこ引っ掴んで連れてきたと言った父（魔王）もいよいよ人間離れしてきたなあと思えた（元々だけどね）

「それで、今そのドラゴンはどうしたの？」

「何か、『風が俺を呼んでるぜ』とか言って飛び立って行っちゃったよ」

「何カッコ良く言ってるの！要するに逃げられたんでしょうが！」

額に青筋を立ててピツケルが怒鳴る

まあ正確にはその通りなのだが・・・

「まあまあ、ピツケル君・・・そうカリカリしないでさあ」

「新八さんは黙ってて下さい！お父さんは甘やかすとロクな事しないんですから！」

新八が宥めるもピツケルは構わず父（魔王）を睨む

その横では銀時達が未だに飯をがついていた

「すみませ〜ん、そうめんまだですか〜？」

『麵固めでお願いしまゝす』

ヅラとエリザベスはその横でそうめんを待っていた

「つてか、何気に注文してんじゃねえええええええええええ」

「ごふうううううううううう！」

そんなヅラに向かって銀時のドロップキックが炸裂する
すると、また誰かが玄関をノックするのが聞こえた

「ん？今度は誰だろう」

首を傾げながら新八が扉を開ける

「あら！新ちゃんじゃない！こんな所で会うなんて奇遇ねえ」

「あ、姉上！」

何と其処には新八の姉である『志村 妙』が風呂敷を手にとって立っていた

「どうしたんですか？こんな所に」

「ええ、実はついさっき此処に魔王城が出来たって聞いて手土産を持ってきたのよ」

「て・・・手土産・・・ですか（汗）」

手土産の言葉を聞いて新八は青ざめた
何故かは本編をご覧下さい

「とりあえず中に入れてくれない？折角の手土産が冷めてしまうわ」
「は・・・はい・・・ど、どうぞ・・・」

新八は多少引き攣った顔で姉を招き入れる

「始めまして、此処に居る新ちゃんヘタレの姉の志村 妙です」

「どうも、私が此処の家の父こと魔王です」

「その母です、宜しくね妙さん」

「息子のピッケルです・・・ってか、何でお姉さんも新八さんの事酷い言い方するの？」

姉の妙と家族3人が自己紹介する

だが、さり気に妙が新八の事を酷く言うのにピッケルはツツコミを入れる

「ピッケル君・・・もう慣れた事だから気にしなくていいよ」

そう言う新八の目は涙で濡れていた

それを見てピッケルは同情の顔をする

「つうかよお、一体何しに来たんだ？てめえの出来の悪い弟のメガネを割りに来たのか？」

「出来ればそうしたいけど、お金が掛かるからそれはまた今度にするわ」

「今度って何！ってか！お金が掛かんかったらメガネ割るんかい！」

「うっさいネ！今姉御と話してんのに邪魔すんじゃねえよこのダメガネ」

「そうだぞ新八君、君はもう少し落ち着いて行動した方が良いぞ！そしてメガネを割るんだ」

『割くれ！割くれ！』

横ではヅラとエリザベスがさり気にメガネを割れと言っている

「うっさいわあああああああ！絶対に割ってたまるかあああああああああ！」

大声で叫んで新八は言う

だが、そんな新八の声に耳を傾けないのが銀魂組の運命と言った事なのだろう

「まあ喧しい弟は放って置いて・・・差し入れを持ってきたの、良ければ食べてね」

そう言って妙は机に風呂敷を置いた

銀時達はそれが何なのか理解し青ざめる

だが、父（魔王）と母とピッケルはそれが何なのか理解出来て無いので中身が何なのか気になる

そして、風呂敷が剥がされ中身を見た時・・・ピッケルは興味を持った自分を後悔した

中には真っ黒に焦げた可愛そうな何かが入っていた

「玉子焼きよ♪今回は少し甘めに作ってみたの」

（これが玉子焼きいいいいいい！絶対に玉子焼きじゃないよ！

可愛そうな卵だよ！これを料理って言ったら料理に対する冒瀆になるよ！）

ピッケルは心の中でツツコミを入れた

何故口に出さないかと言うと多分殴られるからだ

そんな中、妙はニコニコした顔をしているが、何故か怖い

その顔は「残したら只じゃ置かないわよ」と言いたげな顔であった

「ほほお、これはまた変わった形の卵焼きですなあ」

「それじゃ頂きますね」

そんな玉子焼きを特に恐れもせずに父（魔王）と母が手を伸ばして口に運ぶ

「駄目だあああああああああああああ！」

だが、母が卵焼きを食べる前にピッケルがそれを奪い口に放り込む口の中で玉子焼きとは思えない金属音とも言える音と熟したトマトの様に変に柔らかい音の二重奏が響いた

そして、かみ締めていく内にピッケルの顔が徐々に青ざめていき、飲み込んだ時には彼の顔は真っ白になってそのまま仰向けに倒れる

「ぴ、ピッケルくううううううううううううううううううううううううううううううん！」

新八は倒れたピッケルに駆け寄る

そして抱き起こして揺さぶる

だが、ピッケルは口から泡を吹いて白目を剥いている

そんなピッケルを他所に父（魔王）は手に取った玉子焼きを半分に割る

そして残った半分を母に差し出す

「まったくピッケルは食いしん坊だなあ・・・はい、母さん、あゝん♪」

「もお、お父さんったら／＼／＼・・・あゝん♪」

のろけながら2人して玉子焼き（可愛そうな卵）を食べた
ゴリゴリした歯ごたえが聞こえて来る

そして飲み込む

暫くの沈黙

・・・そして

「うむ、中々歯ごたえがあって良いねえ」

「本当ねえ、これって新食感ねえ」

何と好評化であった
それを聞いた新八は

「うそだあああああああああああああああ！」

と叫んだと言う

そして姉に鉄拳制裁を食らったと言う
けど泣かなかった

だって男の子だもん

「うーん、でも私としてはもう少し薄めの方が良いなあ」

「それだったら私的にはもう少し柔らかめの方が良いかも・・・お妙さん少し火を入れ過ぎじゃないかしら？」

「あら？実は私も少し考えていたのよねえ・・・でも、この焼き方が皆良いって言うてくれるからそれで良いかもって思ってるの」

何の悪びれた様子も無く妙が言う

それを聞いて母は納得する

「つつうかよお・・・あれを食べる奴がこの世に居たんだなあ（汗）」

「ホントアル、あれを食べたら本来見えない物が見える様になるアルから」

銀時と神楽がヒソヒソ声で話し合う

「何を言う！お妙さんの玉子焼きは世界一だ！お前達はお妙さんの味に何故気づかないんだ！」

そんな銀時と神楽の後ろに突如黒い制服を着たゴリラっぽい（つつうかもゴリラで良いよ）男が立っていた

「どっから沸いて出たああああああああ！この糞ゴリラアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「あれまあああああああああああああ！」

そんな男に妙が飛び蹴りを当てる

そして男は放物線を描いて飛んでいく
そして落ちる

ドスンと音がした

「だ・・・・・・・・誰・・・・・・・・ですか・・・・・・・・あの・・・・・・・・人・・・・・・・・・・・・・は？」

「び・・・・・・・・ピッケル君！無事だったんだね！」

「な・・・・・・・・なん・・・・・・・・とか・・・・・・・・」

とは言うが当のピッケルは虫の息である

「大丈夫かピッケル？今父さんの魔法で元気に・・・・・・・・」

「良い！すつごく元気になったから！ほら！」

突如ピッケルは起き上がってジャンプしまくってみせた
それを見て父（魔王）も安心する

「で、さっきのゴリラ・・・・・・・・ぽい人は誰何ですか？」

「あ、ああ・・・・・・・・あの人は僕達の世界にある『新撰組』の局長である『近藤 勲』って言う人なんだけど・・・・・・・・姉のストーカーなんだ」

「・・・・・・・・銀さんの世界って新八さん以外ロクな人居ないんですね」

さり氣にピッケル君も酷い事言うようになったねえ

流石は主人公だ

「五月蠅いですよ！僕だって好きでこんな事言いたくないんですよ！」

涙目で叫ぶピッケル

そんな時、ぶつとばされた近藤ゴリラが起き上がって来た

「いたたた・・・・・・・・お妙さん相変わらずキツイ一撃ですねえ・・・・・・・・こ

れも私の愛の表れですかねえ♪」

「あらあら、頭を打ったせいで脳に異常が出たのかしら？ すぐに業者を呼んで射殺して貰わないと♪・・・ええと、番号は『動物ニコニコ皆殺し・・・』」

と言いながら警戒に携帯のボタンを押していく

「ちょ、お妙さん！ それ冗談に聞こえないですから！ マジで！」

汗をダラダラと流して近藤ゴリライモが近づく

「ヤダ！ ゴリラが人語を話してか弱い私を誘拐しようとしてるわ！ 誰か助けて〜」

あくまでワザとらしくお妙が叫ぶ

「女性を虐めるとは！！！」

「弱い者虐めは駄目ですよ！！！」

そんなお妙を救おうと父（魔王）と屁怒組が近藤に向かってダブル鉄拳を叩き込む

「vはいおうwんをばヴお；h g内w@..g 永魚vな祖hんが9
うwhが押すヴ輪ohngwhgんヴあs 耳朵w；hgなwvあW
hw..（声にならない叫び）」

そんな声を挙げて近藤は屋根を突き抜けて飛んでいく
そして成層圏を突き抜けて遙か彼方にあると言われるゴリラ座の星になったといわれる（死んでないけどね）

その11（後書き）

次回は父（魔王）とピツケルが世界を股に掛けて冒険に出発するぞ！

やっただよ（呆）

その12（前書き）

今回父（魔王）と息子の2人旅
だが、どうせロクな旅にならないだろうなあ
まあお約束だし

その12

空は暗雲が覆っていた

辺りには不気味な雷が鳴り響いていた

大地には無数の兵士達の屍しかばねが転がっていた

中には骸骨むくろになってる者も居た

その骸むくろの中で一人肩膝を付きながらもその目に闘志を宿す者が居た

勇者である

勇者は決して消える事の無い不屈の闘志を燃やしながら目の前に聳そびえる者を見た

黒く、禍々しい気迫を持ち、その力は天変地異すらも自在に起こせる程の存在

見る者全てを震え上がらせる存在

魔王である

魔王と勇者が互いに睨みあっていた

「勇者よ・・・最早残すのは貴様一人だな」

魔王がニヤリとする

「だが、それは貴様も同じだろう！」

勇者はそう言い返す

見ると、魔王の足元には無数のモンスターの屍の山が築かれていた

「フン、所詮雑魚よ！貴様を弱らせる事が出来ただけでも上出来だ」
「貴様・・・それが今までお前につき従ってきた者に対する言葉か！」

勇者は怒った

例え敵だったとしても

例えモンスターだったとしても

それは生きている者なのだ

その生きている者を蔑ろにする魔王が勇者は許せなかった

「お前だけは・・・お前だけは絶対に許さない」

勇者はゆっくりと立ち上がり、聖剣『エクスカリバー』を両手で握みその切っ先を魔王に向ける

魔王も両手を合わせて、間に眩い光を発生させる
そして、其処から巨大な剣が現れる

「ならばこの魔王を倒して見せよ！」

「当然だ！行くぞ！」

魔王と勇者が風の如く翔ける

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「はああああああああああああああああ！」

勇者は飛び上がり、エクスカリバーを振り下ろす

魔王はその勇者を迎え撃つかのように巨大な剣を振り上げる

2人の剣が空中で激しくぶつかり合い、凄まじい衝撃波が辺りを襲った

そして、眩しい閃光が2人を包み込んでいったのだった

ピッケルは大声で叫んだ
因みに今2人は魔王城を出て、タダの村を離れて早1時間経った所で……

迷っていた

今現在ピッケルと父（魔王）が居るのは通称『迷わずの森』と呼ばれる小さな森である

普通に歩けば5分で抜けられる森なのだが、父（魔王）が「偶には回り道も必要さ」と言って適当に歩いている内に迷ってしまったのだ
今では辺りが全て同じ風景の大きい木ばかりしか見えない深い樹海となってしまうた

そんな中で父（魔王）が懷に暖めていた紙芝居を実演していたのであった

と言う話である

「大体此処何処なのお！辺りを見回しても四方八方樹海だらけじゃん！此処って本来普通に歩けば5分位で抜けられる森の筈じゃん！それが父さんが回り道したいって言う事で回り道した結果がコレじゃん！」

ピッケルが額に青筋を沢山浮かべて怒鳴る
そんな中、父（魔王）は余裕の顔をしている

「心配ないってピッケルウ、いざとなったら野宿すれば良いんだしさあ」

「さらりと恐ろしい事言わないでよ！こんな深くて薄暗い森の中でどうやって野宿する気？」

「普通に横になって」

「……もうあんたの意見は聞かん」

プイと父（魔王）に背中を向けてピッケルは歩き出す
そんな時コツンと足元に何かが当たった

「ん？何だ」

ピッケルは自分が蹴った物を見た
白い何かだ

そして、目の前を見ると、その正体は……

白骨化した骸骨であった
それを見たピッケルは

「ぎゃあああああああああああああああ！」

と叫んだ

まあお約束だよねえ
sonでピッケルの喧しい声を聞いて父（魔王）が面倒臭そうにやってくる

「どうしたんだあ？ピッケル」

スケルトンはそれを元の場所にくつつける

「いやあ、それにしても久しぶりだねえ。でも何でそんなところに居たの？」

「いやあ、此処が余りにも寝心地が良いんで昼寝してたんだよねえ。そしたら其処の子が俺の肋骨を蹴飛ばすもんだから少し脅かしてやったのさ」

ケタケタと笑うスケルトン

それを見て青ざめるピッケル

そりゃそうだ

幾ら親しみそうに言っただって目の前に居るのは骸骨なのだから

「そう言えば我々は今迷子になってるんだよ。スケルトン君出口を知らないかい？」

「うーん、知らないなあ・・・実は言うところ此処は自殺の名所だからなあ・・・最近自殺ブームだし・・・ほら、あそこに一杯あるだろう？」

「え？あそこって・・・」

ピッケルはスケルトンの指す方向を見た

其処には山積みになされたスケルトンの山が積まれていた

「困るんだよねえ。自殺するのは勝手だけどちゃんと後始末してくれないと」

「出来るかあああああああああああああああああああ！」

ピッケルが叫ぶ

そりゃ無理だろう

だって骸骨になってるんだもん

すると、山積みになった骸骨達が動き出した

バラバラになったパーツを組み上げて完成すると真っ直ぐにこっちにやってきた

ピッケルは一目散に逃げ出そうとするがそれを父（魔王）が阻止する

「何やってるんだ！良い経験地稼ぎじゃないか！思いっきりやつつけちゃえ！」

「でも、僕の武器ってこのひのきの棒だけだよ！そんなので倒せる訳ないじゃん！」

ピッケルの手には以前スライムにコテンパンにされ、キメラっぽい物をやつつけた際に使ったひのきの棒が握られていた

「大丈夫だ！自分を信じろ！お前なら出来る！」

「そ・・・そうかなあ（汗）」

半ば自信無さげにピッケルはスケルトンの群れに近づいていく
そこでハッとした

「そう言えば父さん！このスケルトン達のパラメーター教えてよ」

「えゝ、知りたいのゝ」

「いいじゃん！知らないと不安になるの！だから早く」

「へいへい」

ブツブツ言いながら父（魔王）は黒いパネルを取り出す
何度も言うがこれが何なのかは教えないぞ絶対

そして其処に書かれていたのは

スケルトン
LV…100
HP…1000
MP…0
力…500
守り…50
足…10
魔…0

と、書かれていた

「ってまたしても高レベルじゃあああああああああん
ん」

額に滅茶苦茶青筋を浮かべて怒鳴るピッケル

そんなピッケルに父（魔王）は知らん振りと言った顔をしてその隣
のスケルトンはケタケタ笑っている

100%助ける気無い顔である

ピッケルは青ざめた

目の前にはLV100を持つメチャ強スケルトンが実に100体位
居た

どうするピッケル

どうなるピッケル

彼は無事にこのスケルトン地獄を脱出出来るのか？

「あ、そう言えば俺達の声やっと思ったみただな」
「マジで！？良いなく、俺も声優決めて欲しいなく」

父（魔王）とスケルトンが喋っていた

「喋ってる暇があるなら助けてよおおおおおおおおお！」

涙目で叫ぶピッケルの声が森中に響き渡った

その12（後書き）

ピッケル大ピンチ！

この窮地をどう切り抜ける？

そして、2人は無事に森を抜けられるのか？

その13（前書き）

今回はメンバーの声を発表します

その13

ピッケル

CV…井上麻里奈

母

CV…田村ゆかり

父（魔王じゃない）

CV…小西克幸

父（魔王）

CV…銀河万丈

と、まあこんな感じです

父は完全に趣味で書きました

母とピッケルはその声優がやってるキャラクターをイメージして書いてたのでそうしました

誰かというと、ヒントは現在作者が書いてるある小説の中に出てくるキャラクターです
分かるかな？

「よう、最近どうよ調子は」

左手

「ぼちぼちかな。最近中指辺りが凝っててさあ」

右手

「そりゃ大変だなあ」

左手

「まあ、そのうち直るから心配してないどさ」

父（魔王）

「ってな具合に」

母

「それなら私にも出来るわよ」

と言って母も両手を近づける

右手

「今日の晩御飯何にしましょうかしら？」

左手

「昨日はウシガエルのスープだったから、今夜は野鼠と狼のシチュ
ーなんてどう？」

右手

「あら！良いわねえ」

左手

「それじゃ早速狩りに行かないとね」

母

「どう？中々上手いでしょ」
ピッケル

「なんじゃそりゃあああああああああああああああああああああ

「あああ！」

「以上です」

その13（後書き）

こいつら、そんな食生活送ってたのか（汗）

その14（前書き）

今回読者のアイデアを採用してピツケルに新しい武器が備わります

その14

ピッケルの目の前には100体の骸骨が迫っていた
その迫力は凄まじく、さながら犬が沢山出てくる映画に匹敵する程であった

「嫌、そっちの方が良いから！こっちは骸骨だよ！背筋が凍る思いがするよ」

青ざめて突っ込むピッケル君
流石この小説のツツコミ人

「五月蠅いよ！ナレーターしてる暇があるなら作者さんも手伝ってよ！」

やだ！面倒くさい！ダルイ！動きたくない！

「この糞作者あああああああああああああ！」

お空に向かって叫ぶピッケル
その様は余りにも痛々しかった

「大きなお世話だよ！（怒）」

「頑張れ〜ピッケル〜♪」

相手はたった100体だぞ〜♪」

歌を歌う感じに父（魔王）が言う

「ってか、相手は全部レベル100じゃん！絶対勝てないよ！」

「やらないや分かんないよお」

父（魔王）の隣に居たスケルトンが軽口っぽく言う
ピッケルは涙を拭う

「ああ、もう分かったよ！こうなったらやけくそだああああああ
あああああああああああ！」

ひのきの棒を持ってピッケルは正にやけくその如く目の前に居る骸
骨に向かって振り下ろす

グシャアツ

鈍い音と共に骸骨の頭が粉々に碎け散る
そしてそれと共に骨がバラバラになる
それを見てピッケルは驚く
何故なら・・・

「え・・・よ、弱ああああああああああああああああああ
ああ！何これ！一撃で終りって・・・幾ら骸骨でも弱すぎでしょう
！何で？」

頭に無数の？マークを浮かべて混乱するピッケル
しょうがないのでまた黒いボードを取り出して再びスケルトンのデ
ータを見せた
其処には

『追伸…骸骨は殴りにメツチャ弱いよ♪』

と、書かれていた

「あれは『グングニル様』その昔神様の王『オーディン』が愛用していた武器であり、その力は山を裂き、海を砕くとさえ言われている」

「そ・・・そんな凄い武器なの・・・コレ・・・」

ピッケルは思わずグングニル様を見た
見かけによらずかなり軽い

まるで棒切れでも持つてゐるかのようだ

しかもこの切れ味が凄い

試しに付近の大木を軽く切ろうとしたら、まるで豆腐でも切るかの
ように簡単に切ってしまったのだ

「凄い・・・凄いよこれ・・・これならあの骸骨達に勝てる・・・
いくぞお！」

ピッケルはグングニル様を片手に勇猛果敢に挑んだ
読者の皆様はあのピッケルが押し入る骸骨達を千切っては投げ千切
っては投げと言うシーンをご想像の事だろう

しかし！

現実はあるに甘くない

「う・・・・・・・・・・うう・・・・・・・・・・」

地面には骸骨達にボツコボツにされて虫の息のピッケルが居た
因みにステータスは

ピッケル

LV..21

HP0.5/120

MP..30/30

力..60

守..55

足..50

魔..30

であった

「全く骸骨如きに負けるとは情けない・・・だが、レベルが上がっただけでも良しとするか」

「よ・・・・・・・・・・よし・・・・・・・・・・じゃ・・・・・・・・・・ない・・・・・・・・・・でしょ・・・・・・・・・・」

ピクピクしながらピッケルは父（魔王）に突っ込みを入れた

「とりあえず、回復魔法（ICU）使うか？」

「良い！回復アイテムくれれば良いから！」

ピッケルは父（魔王）の優しさを無下にし、父（魔王）が持ってた薬草（本当は雑草）を食べてHPが回復した気分になった

[illegible]

訳でもなかった

「ざ・・・ざぐじゃあああああああ！」

口から雑草を出しながら涙目でピツケルは空に訴えた
きったねえ（汗）

「お・・・鬼だ・・・鬼が居る・・・」

そう言い残してガクンとピツケルは力尽きた

「オオピツケルよ、力尽きてしまうとは情けない」

父（魔王）はこれまた棒読みで言った

ピッケルはまた暗い闇の中に居た

「ま・・・またですか（汗）」

これで二度目である

「もしかして……これからこの調子で死にまくるのかなあ（汗）」

ピクセルが不安がっていると、目の前に人が現れる

「ま・・・またお父さんかなあ（汗）」

以前ピッケルがこの空間に来た時は父（魔王）であった
きつと今回もそうなのだろうと思い近づいてみた
だが、其処に居たのは父（魔王）では無く、白髪のしわだらけの老
人であった

老人はピツケルの方を見ると

「婆さんや・・・飯はまだかう？」

と、言ってきた

「嫌、僕御婆さんじゃないですから……それと此処何処ですか？」

老人はピツケルに向かって「もう一回言え」と言いたげな仕草をする
それに少しムツとするもピツケルは再び言う

「此処は何処ですか？」

「トイレは何処ですか？ そんなもん自分で探せい馬鹿モン！」

[illegible]

額に青筋を浮かべて怒鳴る

「何じゃ婆さん、そんなに怒ると早死にするぞい。カシルウムをとれいカシルウムを」

「だから僕は貴方の御婆さんじゃありません！それにカシルウムじやなくて「カルシウム」です！」

「は？ カシスオレンジ？ 何じやそりや？」

「二辺耳鼻科行けええええええええええええええええ（激怒）」

額に血管を浮かべまくってピツケルは怒鳴る

其処でピツケルの意識は飛びれる

「はうああ！」

ピッケルが飛び起きた時、辺りは夜になっていた。相変わらず回りは木ばかりである。

その横では父（魔王）が焚き火をして肉を焼いていた

「お！目を覚ましたかピッケル」

「と、父さん……僕は一体……そうだ！ グングニル様は！」

ピッケルは横に置いてある物を見た

其処には、以前と同じひのきの棒が置いてあった

「あ・・・あれ?・・・何でまたひのきの棒に戻ったの?」

ピッケルはひのきの棒を手にとってみた

「それにしても・・・さっきのお爺さんは一体誰だったんだろう?」

『ワシを呼んだかのお?』

「うわぁ!」

突如ひのきの棒から声が聞こえて来て思わずピッケルはひのきの棒を地面に叩き付けた

『いでっ!何するんじゃ!年寄りはおっと労わらんかい!（怒）』

叩きつけられたひのきの棒が不機嫌そうに怒鳴った

それを見てピッケルがそっと手に持ってパツパと泥を取り謝る

「ご・・・御免なさい・・・」

『分かれば良いんじゃないか分かれば』

ひのきの棒は満足したのか機嫌を直した

「そう言えば、お前確かオーデインの愛武器だった筈だろう?」

『オオ!誰かと思えばテツじゃないか!久しぶりじゃのお』

「そうだな。んで何でお前が武器屋に売ってたんだ?」

『うむ・・・それはもう聞くも涙語るも涙の話なんじゃ』

ピッケルはひのきの棒が悲しい話をするんだなぁと思ってじとした

『最近オーデインの奴がキャバクラにはまっておるから財政難でのお。その資金を稼ぐ為にワシを売り払ったんじゃないよ』

「何処が聞くも涙語るも涙なのとおおおおおおおおお！」

「何て悲しい話なんだ（涙）」

「泣けるかあああああああああああああ！」

ピッケルがこれまた額に青筋を浮かべて怒鳴る

って言うか今回ピッケルの奴怒ってばかりだなあ

短気は損気だぞお！カルシウムを取れカルシウムを！

「うっさいよ馬鹿作者！何時かグングニル様で切り倒してやるからね！」

と言ってひのきの棒を天に向かって振り翳す

「そう言えば、何でグングニル様は元のひのきの棒に戻っちゃったんだろう？」

『それはお主が特殊な状況に陥った時にだけワシが力を貸してやるって事になつとるんじゃないよ』

「何でそうなるの？」

『当たり前じゃろう！四六時中ワシがおったらそれこそ俗に言うチートじゃろうが！じゃからワシは普段はひのきの棒になつとるんじゃない！有り難く思えよ』

「あ・・・有り難迷惑だよコン畜生（泣）」

ピッケルは涙を流しながら言った

「成る程、それじゃこれからピッケルには頼もしい武器になるんだ

な。そのひのきの棒は」

「ねえ・・・何処のRPGの世界にひのきの棒で戦う勇者が居るの？」

「そんな勇者も居るだろうきっと」

「居ないよ絶対に（怒）」

ピッケルは怒る

まあ普通そうだよねえ

ひのきの棒で魔王に挑む勇者なんて古今東西居た試しがないだろうねえ

「だったらせめてもっとマシな武器を頂戴よ！」

『何じゃ！ワシじゃ不満なんか？』

グングニル様（ひのきの棒）は不満そうに言う

「じゃあ何時でもグングニル様になるにはどうしたら良いの？」

『一重に経験を積むしか無かろうのお・・・ところで婆さんや。飯はまだかのお？』

「急にボケないで下さい！」

突然ボケたのにピッケルは頭を抱える

かくして、ピッケルに新しい武器「グングニル様」が備わったのであった

（普段はひのきの棒だけどね♪）

その14（後書き）

グングニルをご提供して下さった「天使」さん
有難う御座いました

その15（前書き）

グングニル様を手に入れたピツケル
これにより快進撃が始まる

・・・訳でもなかった

その15

グングニル様を手に入れたピッケルと父（魔王）は無事に森を抜け出してやっそこさ次の町について・・・え？・・・居ない！？

【迷いの森】

失礼しました！

ピッケルと父（魔王）は未だに森の中に居ました

「よし、どうにか完成したぞ！」

木製の家の完成を見て父（魔王）が額の汗を拭う仕草をする

「喜んでる場合じゃないでしょうが！あれから僕達1週間も森の中を迷ってるんだよ！いい加減森を抜け出そうよお」

其処には手一杯に木の実を取ってきたピッケルの姿があった

団栗、栗、胡桃、蛇莓、木莓等である

父（魔王）

パイナップル、林檎、葡萄、パイヤ、西瓜、桃、メロン、マスカット、ニジマス、サケ、ブリ、マグロ、野兎、熊、オオトカゲ等であつた

明らかに差が有りすぎた

ピッケルは仕方なくその日手に入れた食料で飢えを凌いだ

父（魔王）はその日手に入れた食料で満腹になつた

作者はその日の夕飯を考えている最中であつた

翌日

ピッケルは木の棒を加工して木のモリを作つて川に来ていた

目的は魚である

何としても魚を取つてその日の飢えを凌がなければならないのだが、

「えい！」

ピッケルは水面に向かってモリを投げつける

だが、モリは何も捕らえず水面に突き刺さる

その周囲をあざ笑うかのように魚達が回遊している

「うう・・・何で獲れないの？・・・このままじゃ餓死しちゃうよ（涙）」

ピッケルの頬は少し扱けていた

此処数日ピッケルは小さな木の実しか食べていない

それに比べて父（魔王）はと言うと

「はい！はい！はい！ほーい！」

ピッケルとは対照的に軽々と魚を捕まえる

（しかも素手で）

父（魔王）の獲った魚はどれも脂の乗っていて美味そうな魚ばかりであった

一方、ピッケルの収穫はゼロであった

『情けないのお。それでも未来の勇者かあ？』

グングニル様（ひのきの棒）がせせら笑っていた

「笑う暇があったら手を貸してよ・・・もう此処3日位小さな木の
実しか食べてないんだよ」

『嫌じゃ、面倒臭いし、ワシ別にどうでも良いもん』

「鬼iiiiiiiiiiiiiiii！」

ピッケルは滝のように涙を流して叫んだ

「おいおい、ピッケル。そんな物に頼ってるから駄目なんだよ。魚
位素手で捕まえれ方が楽だぞお」

「そりゃあんただから出来る事でしようが！・・・あ・・・もう・・・
・駄目・・・」

急に目の前が真っ暗になりピッケルは倒れた

「おおピッケルよ。餓死してしまうとは情けない」

これまたお決まりの台詞を吐いて父（魔王）はやれやれと言った顔

をした

ピッケルはまた真っ暗な空間に居た
これで3度目である
一体何回死ねば気が済むんだ？
このヘッポコ勇者

「幾らなんでも酷いよ作者さん
僕だって好きで死ぬんじゃないんだからね！」

うつせえなあ

この空間書くのだって結構面倒臭いんだから勘弁してくれよ

「言っちゃったよ！作者が面倒臭いってはっきり言っちゃったよ！
良いの？作者が面倒臭がったらこの小説終了だよ！」

と、これまた一人で何も無い空間に突っ込みを入れている悲しいピッケル君であった

「酷い・・・虐めだ・・・何で僕はこんなに虐められるんだろう・・・
つくづく新八君の気持ちが分かる気がするよ」

新八の事を考え涙するピツケル
すると

「まったく、うっせえなあ、折角人が気持ち良く寝てたつてのによお」
「全くアル！何処の馬鹿アルか？」

「嫌、この状況で寝ている場合じゃ無いでしょう二人とも（汗）」

其処には、見覚えのある顔ぶれが居た

そう、タダノ村で別れた坂田さんファミリーである

「し、新八さん！一体どうして皆此処に来てるんですか？」

「んなもんこっちが知りてえよ！人が折角超特大パフェを食べてる夢を見て立つてのにこんな真っ暗でだだっ広い空間に押し込まれてよお」

「私も同じネ！後ちよつとで特盛り卵かけご飯が食べれる所だったのに・・・誰だよ私の安眠を妨害しやがる不屈き者は？少しと言わずかなり頭冷やさせてやるアルよ！」

「いや、神楽ちゃん、その台詞は不味いから・・・あの白い魔王さんに頭冷やされるから（汗）」

と、何気ない会話をしていた

「んでよお、何でピツケルが俺達と同じ空間にいるんだ？」

「僕がこの空間に居るつてのは大概がHPが0（ゼロ）になって死んでしまった時なんです」

「うわ・・・何それ・・・何でそんな暗い演出なの？普通なら宿屋の前で目を覚ます筈なのに」

「黙れよダメガネ！世の中のゲームは皆ユーザーに媚び過ぎネ！甘でやる気が起きないアルよ！」

「酔昆布娘の言う通りだな、最近のゲームは無駄に演出ばかりに

「ねえ……この作者って僕の事嫌いなのか？（涙）」

『目覚めよ．．．選ばれし勇者よ．．．時は来たのだ』

「うっせええええええええええよ！さっきから変な語呂合わせしやがって！何でもどつかの仙人っぽく言えば食いついてくると思ったたら大間違いなんだよお！」

『いや、私は仙人とかそんなじゃなくて（汗）』

「んなことどうでも良いからさっさと私達を解放するアル！息苦し
くて溜まらねえよ」

『いや、その私に言われても困るのだけど』

「とにかく、早く僕達を解放してくれませんか？ 今日帰ってお通ちやんライブを見ないといけないのに」

「誰です？ お通ちゃんって」

「新八が心酔してる歌手アルよ。下品な歌ばっか歌っててあんま人氣無い低脳アイドルアルよ」

[illegible]

お通ちゃんの事となると某メガヒット漫画に出てくる測定器がぶつ壊れる位の戦闘力を発揮する新八でもすぐやられるけどね

『あー、こっちにも話題振ってくれませんか？』

「うっせえなあ、適当にやっててくれよ。もう相手すんのもメンド

「いんだよ」

『いや、メンドイって言わなくてもその・・・』

「あのなあ、人を呼ぶんだったらせめて茶菓子とか出せよ！こんな何にもない空間に呼び出しという話聞けとか図々しいにも程があるだろう畜生め」

『いや、あの……その何て言ったら良いか』

「やめましょうよ皆さん。この声の人だって何か訳があるんですし、話位聞いてあげましょうよ」

「ほー、流石この小説の主人公だなあ、格が違うねえ、どっかのツッコミしかねえダメガネとは大違いだぜ」

「おいテンパアアアアアアアアアア！人をツッコミしか脳の無い駄目やろうっぽく言うんじゃねえええええええええ！」

銀時の言葉に新八が切れる

『あああああああああもう！てめえら人の話を聞けよおおお
おおおおお！』

声の主はブチ切れながら姿を現した
それはあの人気漫画『ブ○○チ』に出てくる『○月』のオッサンの
パチモンっぽい格好をした人だった

「何だまたお前かよ．．．今度は何だ？」
『洞爺湖仙人』

『フッフ、残念だが私はその洞爺湖仙人では無い……私の名は』

と言った男の横には見覚えのある武器が現れた
それは・・・『ひのきの棒』であった

「・・・ひのきの棒の仙人？」

『フッフ、まあそう呼びたければ呼ぶが良い・・・さて、ピッケル
よ』

「は、はい！」

『お前はまだまだ強くなれる・・・そして、私ならお前をもっと強
くする事が出来る・・・強くなりたいか？』

「はい、強くなりたいです」

暫くの沈黙
そして

『え？何？もう一回言って！』

「え？だから強くなりたいです」

『え？マジ、本当に強くなりたいの？』

「何ですか？貴方が言ったんでしょうが」

『・・・』

ひのきの棒の仙人（洞爺湖仙人）は黙り込んでしまった
視線を逸らして何処か遠いところを眺めている

気のせいか目から雫が零れ落ちている

『よし、分かった、お前を強くして「やめておけピッセル」あう・・
・』

話を途中で折られてしまいガクツとする仙人

「どうしてですか？銀さん」

「あのなあ、こいつ散々人を呼び出す癖にロクな技教えてくんねえんだよ」

「その通りね、今までだって教えてくれたのは『腿パーン』と『DOG E Z A』だけね。ハッキリ言って使い物になんねえ屑の技ばかりよ」

「確かに、そんなもってこの空間はこの仙人の部屋なんですよね」

そう言って新八は視線を向けた

その先には、仙人の私室と思わしき空間があった

『え？ちょっと、待って！今度はちゃんとした技を教えるからさあ』

「ああ、もう良いよ。どうせ断ったら此処から出られねえって言うオチだろう。だったらこっちはこっちで好き勝手させてもらうからよお」

そう言いながら早速冷蔵庫を漁る銀時

「うっわ、お前この前カビ生やした味噌そのままかよ・・・もうカビが大繁殖してカビ帝国築いちゃってるじゃねえかよ」

『いや、それは今度捨てに行こうと思ってた奴でその・・・』

「全く相変わらず汚い部屋アルなあ・・・ちゃんと掃除位しろよこの駄目仙人」

と言いながらアイスを頬張る神楽

『ああ、それは私が風呂上りに食べようと思ったアイスなのに・・・』

「うっわ・・・何か以前より如何わしい本が増してる、もうベットの隙間からはみ出てますよこれ」

『いやあの・・・ほら、最近そんなブームが来るかなあと思って纏めて買っちゃって』

「んなブーム来るかよ。来てるのはてめえの頭位だよ駄目仙人」

『嫌もう！ってかお前等3人は帰れよ！今回はてめえら呼んでねえんだよ！そちに居るピッケルだけを呼んだんだよ俺は！』

「ええ！僕だけ？」

『そうだよ！なにに何でお前等がオマケで出てくるんだよ！良いからさっさと帰れよ！もう帰れよ！お前等何かにもう技も教えてやらねえあからよお・・・グズ』

言うだけ言ったあとひのきの棒仙人（洞爺湖仙人）は泣き出した

「ぎ・・・銀さん・・・ちょっと言い過ぎましたかねえ」

「ったく、泣きべそばっか掻きやがって」

バツの悪い顔をしながら頭を搔く銀時

「おゝい、ひのきの棒の仙人よゝ、俺達が悪かったからよお、いい加減泣き止んで技教えてくれねえかなあ」

銀時がそう言うも

『良いよ、良いよもう！知らないよお前等なんか！お前等なんかどうせその辺のモンスターにやられて『おお〇〇よ、死んでしまうとは情けない』とか言われれば良いんだ』

完全にいじけてしまったのか床に座り「の」の字を書き出す仙人

「おゝい、私達が悪かったよゝ、お前は凄い仙人だよゝ、だからその凄い技を私達に教えてよゝ」

神楽もそれに参加する

『え？本当？・・・本当にそう思う？』

「ああ、思うよ、てめえは凄すぎて他に類を見ないすげえ仙人だよお、だから早く技を教えてくれよお」

『で、でも・・・良いの？俺なんかの技を教わって』

「大丈夫ですよ、きっと貴方の技は僕達に役に立つはずですし」

『い、嫌・・・でも』

「僕は貴方から技を教わりたいんです。お願いします」

『・・・・・・・・』

銀時達が一斉に仙人にお願いする

すると仙人が立ち上がり、銀時達の方を向く

『そうか・・・やっと分かってくれたか・・・だが、もう既にお前達には私の最大級の必殺技を伝授させた』

「はぁ？ まだ何にも教わってねえぞ。一体何だよ」

『教えてやろう・・・それは・・・』

「「それは？」」「」」

『それは・・・・・・・・』

『嘘泣きだ』

仙人が自信を持って言う

その瞬間、仙人の顔に銀時、神楽、新八のとび蹴りが炸裂した

「てんめえええええええええ！ やっぱ口クな技じやねえじやねえ
えええええかあああああ！」

「散々引つ張つといて結局それかよ！だからてめえは駄目仙人なんだよおおおおおおお！」

[illegible]

ドカバキドカバキドカバキ・・・（以下千行略）

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア!』

何も無い空間からひのきの棒仙人（洞爺湖仙人）の悲鳴が木霊して
いた

そして、その光景をピツケルが眺めていた

「はうああ！」

目を覚ますと、其処は父（魔王）が建てた家であつた

「おお、目を覚ましたかピツケル」

その横で父（魔王）が巨大な魚を齧っていた

「父さん……あれ？新八さん達は？」

「新八君？……彼等は来てないけど」

「あれ？……じゃあ僕が夢で出会った人は一体誰何だろう」

ピッケルは首を傾げた

一方、銀時達はと言うと

「どうすんですか銀さん！結局出られないじゃないですか！」

「ヘルスミー！ヘルスミーシー！」

「うっせえよ！何でも人のせいにすれば良いってもんじゃねえだろうが、あと神楽！ヘルスミーじゃなくて『ヘルプミー』だろうが！何遍言ったら分かるんだよ！てめえは」

と、彼等も同じく森で迷子になっていたとき

めでたしめでたし

その15（後書き）

ピッケル君

合計3回死亡

その16（前書き）

今回は父（魔王）の強さのほんの一部をご紹介しますぞ！

その16

やあ、私はこの小説「父が魔王で息子が勇者で!？」の主人公である「勇者（見習い）ピッケル」の父である魔王だよえ？何で魔王と勇者が一緒に度をしてるのかだって？

それは当然さ、だってこうして私が見てないとピッケルはその辺をうろついているスライム如きにさえ負けてしまう程の虚弱なんだしねこうして私が影から見守ってあげてるのさ

ところで、読者の中には「魔王ってどの位強いのかなあ」とか「本気出したらどれ位強いのかなあ」とか「あの白い魔王より強いのかなあ」

とか言う素朴な疑問が出るであろう

そこで今回は急遽この場をお借りして私の強さの一部をお教えしよう・・・題して！

『実録!! 魔王はこんなに強かった!!』

ジャジャジャン！ジャ〜ジャ〜ン！

・・・っと、まあ火サスっぽいBGMから始まったのだが、とりあえず私の外見をもう一度お浚いしておこう

これが、私、「魔王」の外見である

身長250cm
体重200kgくらゐ

顔…銀魂に出てくる屁怒紹さんと同じ

頭…二本の立派な角が生えてる（時価数百万円）因みに切ってもまた生える

服…豪華そうな服にマントをつけてる

性格…かなりのマイペース

と、こんな感じだな

それでは次に私の能力について説明しよう

まずは、私の必殺技の代名詞とも言える『父さんの〇〇は〇〇だぞ攻撃』だ

これは私の体に流れる『父さんパワー』を消費して使う必殺技なのだが、これは私の体に凄まじいダメージを与える為、一日に約1億回しか使えないと言う正に諸刃の剣なのだ

では、その一部を少しだけ紹介しよう

『父さんの拳は痛いぞパンチ』

父さんパワーを拳に集中させて放つ熱い鉄拳
これを食らった者は文字通り星になり熱い父の心を知る事になる

『父さんの蹴りは痛いぞキック』

父さんパワーを足に集中させて放つ熱い蹴り
これを使えば巨大な岩盤だって一撃で粉末に出来るぞ

『父さんの頭突きは固いぞヘッドバッド』

父さんパワーを頭に集中させて放つ熱い頭突き

これを食べらった者は余りの熱さに目から熱い涙が零れるだろう（決して痛いからじゃないぞ！）

そして、此処からはこれから父が使うであろう技の一部である

『父さんの息は生暖かいぞハリケーン』

父さんパワーを使って口から竜巻を起こす

それは台風11号の約100万倍の威力を誇るぞ
しかも生暖かい

『父さんの眼差しは熱いぞビーム』

父さんパワーを使って目から熱いビームを放つ

これを浴びると物の数秒でこんがり小麦色に焼ける事が出来るのだ
但し、やりすぎると本当に黒漕げになってしまうから注意が必要だぞ

『父さんは飛べるんだぞジャンプ』

父さんパワーを使って空を飛べるのだ

飛行速度は何とマッハ200
ウルトラマンだって目じゃないぜ！

他にも色々あるぞお！

続いて家族を紹介しよう

ピッケル

こいつは私と母さんの愛の結晶であり一人息子であり将来私を倒す勇者でもある

しかし、今は激弱でその辺に歩いているスライムですら倒せないという虚弱っぷりを発揮してるんだ

武器は私とその辺で売ってたひのきの棒を未だに大事に持っている
余程気に入ってくれたのだろう

買った甲斐があった

そのひのきの棒が何と突然変異を起こして、何とあの伝説の武器「グングニル様」になったのだ

これは神々の王「オーディン」が使ってたのだが、どうやらアイツは最近キャバクラにはまっているらしく、そこのお目当ての女の子を落とす為にグングニル様を売ったらしい

そういえばアイツ昔から女癖悪かったしなあ

それが原因で嫁さんとも別れたんだし

全く、奥さんは大事にしなればいかんぞお全く

母

ピッケルの母であり私の愛すべき妻

言い方を変えると『愛しのマイハニー』である

かつては『韋駄天』と言われる程足が速く、その速度は何と時速1000km

一日千里を走るとさえ言われていたんだ

しかし、その原因が恥ずかしさから来る衝動であり、口説かれる度に赤面して走り去ってしまったらしい

しかし、私の熱烈なアタックに遂にOKして、念願の結婚まで行ったのだ

因みに言うとな腕っ節も中々の物だぞお

この間家に強盗が200人位押し寄せてきたんだが、母さん一人で全員畑の土にしてしまったからなあ

流石母さん

続いて、私の覚えた魔法を紹介しよう

光魔法『ICU』

これは列記とした回復魔法だぞ

魔方陣を展開させて、その中から数人の医者呼び出し、治療して貰うのだ

彼等の腕前はかなりの物で信頼性は抜群なのさ

ただ、偶にやる気が無いとか言う理由でとんでもない事をしでかす事もあるが、まあ笑って許してやってくれ

続いては、これから私が使うかなあ？という魔法を紹介しよう

『あゝした天気になくれ！光線』

お空に向かって光線を放ち、天候を自在に操る魔法だ

これで毎日快晴の空に出来るぞお

『え〜と、なんたらかんたらボール』

火の玉っぽい物を出して（直径200km）それをぶつける魔法

以上だ

どうかな？

これが私の強さのほんの一部なのだ

これからもっともっと私は強くなるかもしれないのでご期待してほしい

「と言う話を先日動物達にしたんだ」

「何話してんのおおおおおおおおおおおお！」

今日も今日とで父とピツケルの楽しい会話は続いていた

[illegible]

つてか、いい加減お前等森抜けろよ（汗）

その16（後書き）

次回はイヨイヨ森を抜けて欲しいもんだなあ（汗）

ピッケル

「ってか、マジで抜けてよ頼むから！」

その17（前書き）

今回特別ゲストとしてあの超人気ゲームが参戦！
今回も滅茶苦茶やらかします！

その17

「う~~~~む・・・どうやら完全に迷子になってしまったよう
だぞおこれは」

父（魔王）が森の中を歩きながら呟いていた
それを聞いて隣に居た文字通り貧弱勇者であるピッケルは額に青筋
を大量に浮かべる

「どうやら・・・じゃないでしょうがあああああああああ！一
体何時になったら次の町に着けるのおおおおおおおお！」

と、大声で怒鳴った

それを聞いて父（魔王）がフウと溜息を吐きながら肩を上げる
そして遠い目で空を見上げる

「ピッケル、旅は楽しまなきゃ損だぞお」

「どうやったらこんな森の中を歩いて楽しめるのさあああああああ
ああああああ！」

ピッケルは今の周りの森を指差して怒鳴った

その周りは何処か不気味な雰囲気漂わせた森であった

以前の森も自殺の名所と言われていただけに不気味であったが、此
処はそれ以上だ

何か今にもオバケとかオバケとかオバケとか出そうな雰囲気マックス
であった

「まったくもお、どうすんのさあ今夜は！もうすっかり日が沈んじゃ
ったんだよお！」

「しょうがないなあ・・・何処かで寝泊り出来る場所を探すとするかあ・・・ん？」

ふと、父（魔王）は目の前に人を発見する

それは2人の男女であった

1人は分厚いジャケットを着ており頭には赤いバンダナを巻いているもう1人は青い服にこれまた分厚そうな肩パットを嵌めて頭には青いベレー帽を被っている

そして、何故か2人とも鋭い目線であたりを見回していた

「うむ、丁度良い！あの人達に何処か寝泊り出来る場所を聞いて来よう」

「あ、待ってよ父さん！」

父（魔王）とピッケルは早速その2人の元へと急いだ

此処ラクーンフォレスト郊外にあるアークレイ山地では、最近十人前後のグループによる民家襲撃事件が多発していた

その手口は余りにも非人道的であり、襲われた住人達はそれは酷い有様であった

その事件を解決しようとラクーンシティー警察内で組織された特殊部隊「スターズ」のブラヴォーチームがまず調査に訪れたのだが、その音信が途絶えてしまったのだ

原因を探ろうと今度は俺達アルファチームがやってきたって訳だ

「解説ご苦労、クリス」

その横で俺に劳いの言葉を送ってるのはアルファチームの隊長である「アルバート・ウェスカー」と言う男だ
金髪のオールバックにグラサンを掛けたいかにもな感じの男だ

「クリス、解説はその位にしてさっさと調査しろ」
「了解、隊長」

因みに俺はアルファチームのポイントマンである「クリス・レッドフィールド」だ
射撃の腕前は超一流
おまけに顔もイカすナイスガイとは俺の事を・・・

「いい加減にしろクリス」
「いてっ！」

後ろからウェスカーがハンドガンの腹で殴って来た
多分俺の頭には大きなタンコブが出来てる筈だ
跡が残ったらどうするんだ

「良いからさっさと調査しろ！」
「へーい」

俺はとりあえず生返事して調査にあたった
当たりは夏である故かなり蒸し暑い
正に蒸し風呂状態である
この間近くに出来たサロンでサウナと言うのがあったので試しに入
って見たが5分でギブアップしてしまった

まったく、あんな物を好んで入る奴の気がしれないぜ

「そうか？私は好きだぞ」

え？そうなの？ってかあんた！隊長！俺の心の声に一々反応しないでくれない？俺のたった一人での楽しい空想の時間を邪魔しないで欲しいなあ

「そうは言ってもお前声出てるから丸聞こえだぞ」

「え？マジ？」

驚く俺を他所にウエスカーが調査を続ける

畜生！あのムツリグラサンめえ！

きつとアイツの机には新人警官女性の写真とかある筈だ！今度隙を見てアイツの机の中を物色してやる

等とこれ以上やるとクリスの像が崩れる危険性があるので視点を移す事にした

こっちではベレー帽を被った女性「ジル・バレンタイン」とバンダナを被った男「ジョゼフ・フロスト」が辺りを探っていた

ふと、ジョゼフが後ろの気配に気づき銃口を向ける

しかし其処にはジルしか居なかった

（何だ、ジルか・・・）

ホッとして銃口を下ろすジョゼフ

そんな彼の後方に突如何者が現れた！

「な！」

突然の反応についていけなかった
万事休すと思いながら振り返ると其処には

「こんばんわ」

「・・・・・・」

ジョゼフは己の目を疑った

何と、目の前には自分より遥かに大きい西洋のお話で言うような「魔王」が立っていたのだ

っていうか何で此処に魔王が居るの？

此処って何かのファンタジー世界？

え？俺って夢でも見てるの？

目を覚ませ俺！

ジョゼフは必死に自分の顔を叩くそして数回首を振ってもう一度見た
しかし、目の前に居るのはどう見ても魔王である

（母さん・・・俺もう駄目かもしれない）

ジョゼフは目の前に魔王が居るのを見て涙目になって遠い彼方に居るであろう（多分実家ね）母に向かってそう宣言した

其処へ、

「待ってよおおおおお父さああああああん！」

ジョゼフは声のした方を見た

何と其処にはまだ10歳にも満たない小さな子供が居たのだ
おいおい、これは何のジョークだ？

ジョゼフはそう思えた

そんなジョゼフを他所に子供は魔王に近づく

「父さん！また何かこの人に迷惑を掛けたの？」

「失礼な！只父さんはこの人に挨拶しただけだぞ！」

目の前で子供と魔王が何気ない会話をしていた

これは一体何の話なのだろうか

おとぎ話とかで出そうな魔王と子供が会話しているのだ
一体何を間違えたらこんな風景が出来上がるのだろうか
ジョゼフはそう思えた

その時、何かが父（魔王）の元へ掛けていくのが見えた
そして、何かの影が突如父（魔王）に襲い掛かる

「ん？」

父（魔王）は自分の腕を見た

其処には一匹の犬が父（魔王）の腕に噛み付いていたのだ
ガジガジと必死にしがみ付いて噛んでいるのだが、全然牙が突き刺
さらない

それどころか徐々に犬の歯がボロボロになっていった

「と、父さん・・・その犬・・・（汗）」

ピッケルは父（魔王）にしがみついている犬を見て震える指で指した
その犬は所々肉が剥けており目が濁っていた
明らかに死んだ犬のようであった

「うん？多分じゃれているのだろうか？安心しなさい。犬ってのは心
と心で触れ合えばすぐに・・・」

そう言いかける父（魔王）に更に数匹の犬が噛み付いてきた

ある者は首筋に

ある者は手に

ある者は角に

ある者は足に

それぞれ噛み付いていた

……だが、結果は同じであり全く傷がつかない
それどころか逆に犬の方が参っていた

「お、おい！その犬不味いぞ！」

ジョゼフは犬を見て思わずそう言った

「ジョゼフ！どうしたの？」

其処へ別の方を調査していたジルが駆けつける

「ジル！この犬はかなりやばいぞ！」

「犬って……な！」

ジルは驚いた

勿論犬に驚いたのだが……なにより驚いたのはその犬が噛み付いている者である

噛み付かれている者は何処かのファンタジーで出てくる「魔王」そのものであった

しかもその魔王は数匹の犬に噛まれていると言うのにまるで涼しい顔をしている

効いていないのか？

その証拠に彼には血どころか傷すら出ていない

「ええい！鬱陶しい！」

流石に鬱陶しかったのか自分に噛み付いている犬を片手で振り払う犬達がギャワンと可愛い（？）声を上げて吹き飛ぶ其処へ他のメンバーが駆けつける

「ジル！」

「クリス！」

クリスがジルの名を呼ぶ

「クリス！此処はヤバイ！早く場所を変えよう！」

「おう・・・って、何でジョゼフが居るの？」

クリスは疑問の籠った目でジョゼフを見る

「え？俺居ちゃ不味い？」

「嫌・・・俺の頭の中だとお前はこの辺で死ぬと思ったんだけど・・・」

「何それ？酷くない？俺まだこうして生きてるじゃん！一緒に戦った仲間じゃん！なのにこの扱いって酷すぎない（涙）」

ジョゼフは涙目になって言った

「泣いてる暇は無いぞジョゼフ、とりあえずさっきの犬がまた来る前にとりあえず急いで逃げるぞ！」

「言われなくてもスタコラサッサだぜえ！」

クリスは1人意味不明な言葉を発して犬共から逃げ出す犬達はそんなクリス達を追いかける

「ととと父さん！何今度はああああああ！骸骨の次はゾゾゾ
ンビイイイイイイイイイイ！」

「うゝむそうらしいなあゝ、とりあえずこの場はあの人達に着いて
行こうじゃないか！そうすればもしかしたら雨風を凌げる場所に辿
り着けるかも知れないぞお？」

「そう言う問題じゃないいいいいいいいいいい！（涙）」

目から大粒の涙を流してピッケルは怒鳴る

確かに誰もがこんな場面に遭遇したらそりゃ悲しいよねえ

そんな事を言い合っていると、突如上空を何かが飛行してきた

それは何か黒い機械の物体であった

「おい！待て！ブラッドオオオオオオオオオオ！戻れえええええええ
えええええ！カムバアアアアアアアアアアアック！」

クリスは大声で叫ぶ

そんなクリスに一匹の犬が飛び掛る

「クリス！」

「うおおおおおおおおおおおおお！」

クリスは思わず腕でガードする

刹那、飛び掛ろうとした犬が吹き飛ばされた

何故と思ひ後ろを振り向くと、其処には銃を構えたウェスカーが居た

「クリス！急げ！」

「サンキュー、隊長！」

クリスは片腕を上げて礼を言って走り出す

「うゝむ、流石はあのグラサンのお兄さんは中々上手い射撃の腕をお持ちのようだねえ」

「関心してる場合じゃないでしょうがお父さん！とにかく早く逃げないと！」

「其処の少年！しっかり突いて来いよ！」

「は、はい！」

ピッケルを心配するかのようにクリスが言う

それにピッケルは頷く

そんなピッケルを見てクリスはニツと微笑む

すると、目の前に大きな館が現れた

「よし、あの館に逃げ込もう！」

「おお！あの館でなら寝泊りが出来そうだねえ！」

「んな事言ってる場合かあああああああああああ！」

ピッケルが青筋を浮べながら怒鳴る

そんなこんなでクリス、ジル、バリー、ウエスカー、ジョゼフ、父

(魔王)、ピッケルは館に入って行った

館に辿り着いたのは隊長のウエスカー、ジル、そして俺・・・おまけのジョゼフ・・・あと何故か居た魔王っぽい奴と小さな子供・・・だが、其処にはバリーの姿は無かった

その17（後書き）

やっちゃいました・・・

今回かなりやばい事になっちゃいました

本当に大丈夫か？

この小説（汗）

その18（前書き）

とうとう物語の舞台となる館に来てしまったクリスマス達バイオ組（1人余計）とピツケル達

果たして彼等は無事に脱出できるのだろうか？

って言うか、こいつら頼むからまともな話にしてくれよ！

その18

バリーを除く一行は無事に洋館内に入り込めた

「皆！無事か？」

「ああ、俺は無事だぜ」

クリスの問いにジョゼフが答えた
だがクリスはスルーした

「ジル、無事か？」

「ええ、私は無事よ」

「俺も無事だぜ」

ジルは返し、ジョゼフも返すがクリスは軽くスルー

「隊長！無事ですかい？」

「当たり前だ！この通りピンピンしてるぞ」

「あのお・・・俺も無事なんですけど・・・」

隊長は余裕の顔でサングラスを上げ、またもジョゼフをスルー

「魔王さんとお子様は無事かい？」

「ハッハッハ！良い運動になったよ！」

「死ぬかと思いました」

「俺も居るんだけど・・・」

父（魔王）は余裕の笑みを浮かべてピッケルは安心して涙を拭いていた

「何それ？此処はアークレイ山中よ！」

「アークレイ？・・・聞いた事ない地名だね父さん」

「うむ、聞いた事無いなあ」

初めて聞くフレーズに父（魔王）とピッケルは頭に「？」を浮かべる

「そーいやあよお、何でお前の父ちゃんは魔王なんだ？」

「実は・・・」

ピッケルは事の経緯を大体で説明した

それをクリスとジルとウェスカー・・・後ジョゼフは聞いていた

「つてか、何で俺の扱いってこんなに酷いのおおおおおお！」

「ちよつと黙っててよジョゼフ！聞こえないでしょう！」

「グスン・・・」

ジルに怒鳴られてしまいジョゼフは部屋の隅っこに体育座りをして
いた

そんなジョゼフは放って置いて話は進むのが常なのだ

「つまり、謎の老人から貰った赤い玉を食べてしまったのが原因で
魔王になってしまったのね？」

「はい、そうなります」

「信じ難い話だなあ」

ウェスカーは顎に手をやって呟く

まあ普通の人なら信じられない話だよなあ

「最初は僕も信じられないと言った感じでしたねえ」

「でも今日の前に居るのが事実なのよね（汗）」

ジルとピッケルはそう言って父（魔王）を見る
父（魔王）はと言うと入ってすぐ左側の二枚扉に入ろうとしていた

「あ、ちょっと待って下さい！」

「平気平気！ちょっと寝られる所を探して来るから待っててね」

と言って父（魔王）は扉の奥に消えていった

そんな父（魔王）を見てジルは溜息をつく

全く、ブラッドと良いあの魔王と良い彼等は自分勝手に行動してチームを危険に導いているという自覚があるのだろうか
2人に子一時間問い詰めたいと思っていた

「すみませんジルさん・・・僕の父さんのせいでジルさん達に迷惑を掛けてしまっ」

「良いのよ気にしないで」

謝罪するピッケルにジルは笑ってそう言う
それを見てピッケルは少し明るい顔をする

「そう言えば散々走ったせいお腹減ったなあ（汗）」

「あんたは少しはこの子を見習いなさいよね（怒）」

こんな時でも呑気な事を言うクリスにジルは怒りMAXであった
そんな時、突如銃声が響き渡る

「何！」

「父さんが行った方からだ！」

ピッケルは父（魔王）が消えていった扉を見る

もしかしたら父（魔王）に何か危険な事でも起こったのだろうか
ピッケルの顔に一抹の不安が過ぎった

「俺が見に行こう！」

流石主人公！

ここぞとばかりにクリスが頼もしい発言をする
だが、ジルは思った

こいつ1人で行かせて大丈夫なのだろうか？

答えは『NO』である

もし行かせると大変な事になりそうだ
そう思うとジルの行動は早かった

「1人じゃ危険よ！私も行くわ」

「え？良いの？頼もしいねえ」

クリスが嬉しそうな顔をする

そんな事を言うクリスにジルは顔を少し赤く染めて

「べ、別にあんたの為に行くんじゃないんだからね」

と言う

それを聞いてクリスが「ツンデレ来たあああああ！」と叫んだの
で眉間に発砲した

クリスは10のダメージを負った

とりあえずクリスの額に絆創膏を張って事なきを得た

「酷いやジルさん！いきなり発砲するなんて！泣くほど痛かったよ」

「御免さない、ついカツとなっちゃってね」

ジルは茶目っ気の籠った目でそう言う
そんなジルを見てクリスもしようがないなあ
と言った顔で許してあげた
男は女のこう言った顔に弱いのだ
それが美人なら尚更である

「んじゃ此処の確保はウエスカーとジョゼフの2人に任せるから頼むぜ」

「任しておけ」

「・・・・・・・・」

クリスの発言にウエスカーは頷きジョゼフは未だに体育座りのまま
暗いオーラを纏っていた
だがクリスはスルーした
そしてクリスとジルとピツケルの3人は父（魔王）の入っていった
扉を開ける

すると、目の前には巨大な食堂が映った
その広さは凄まじく、何十人食事が出来るんだ？と言いたげなほど
広い食堂であった
クリスはテーブルクロスを軽くなぞった
手には誇りがビッチリついた

「うわぁ！ばっちい！」

思わず手を払う

それを見てジルが推測する

「この部屋・・・使われなくなって随分経つのね」

「え〜、折角食堂に来たつてのに料理の一つも無いのかよお〜」
「あんた一辺頭ヘッドショットで射抜かれたい？（怒）」

ジルがそう言いながらクリスの眉間に銃口を押し付ける
冷たい銃口がクリスの眉間に伝わって少しひんやりした
だけどあんまり長く感じたくないひんやりさだった
そんな2人を尻目にピッケルは暖炉の方へ向かう
すると

「く、クリスさん！ジルさん！来て下さい！」

ピッケルが2人を大声で呼んだ
その声を聞いて二人が駆け寄る
ピッケルの足元には赤い液体がべつとりと床についていた
それを見てクリスが

「何だピッケル、鼻血でも出したのか？」

と笑いながら言う
それを聞いて

「違いますよ！最初からあったんです！これってもしかして・・・」

ジルは一抹の不安を胸に赤い液体を指で軽くなぞって匂いを嗅ぐ
それは少し甘酸っぱくて嗅ぎ憶えのある匂いであった
それは正しく

「・・・これ、トマトケチャップよ」

であった

「何だよ紛らわしいなあ」

クリスがつくりと肩を落とす

隣ではピッケルが血じゃなかったと知ってホツとする

「とりあえず此処には何も無いみたいね、次の部屋を探しましょう」

と言って3人はすぐ横にあった扉を開いた

其処は狭い廊下であった

廊下に入ると通路の先でグチャグチャと何かを食べる音が聞こえてきた

「な、何かを食べているの？」

「腹減ったな、俺も何か食べたいな」

「クリス……いい加減黙らないと本当に眉間を撃ち抜くわよ（怒怒怒）」

ジルが眉間に大量の青筋を立てて言う

そんな会話をしながら通路を歩いていると……其処には……！！

父（魔王）と焼けたような肌をした黒人の髭を結わえた男性が立っていた

「やあピッケルじゃないか」

「あ、クリス！ジルも居るのか！」

「え？ケネス！？」

クリスは己が目を疑った

其処には本来なら冒頭でゾンビのディナーにされる筈のケネスが元
気な姿で魔王の横に居たのであった
そして、その足元には

「……何コレ？」

足元にはK○Tのパーティーセットが豪華に並べられていた
そして、其処には薄汚い服を着た所々腐敗した生き物がフライドチ
キンにがついていた

「な……何でゾンビが……居るんですか？」

ピッケルは美味そうに鶏肉を齧るゾンビを見てそう言う
そんなピッケルをジロリとゾンビが睨みつけて

「ゾンビが肉食ったら悪いんかいわれい！（怒）」

と言葉を発した

それを聞いてピッケルは

「ゾンビが喋ったあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ！」

と大声で叫んでしまった

一方、ホールの中では……

「皆……遅いなあ……」

ジョゼフが1人ホールの隅っここで体育座りをしていた

その19（前書き）

ピッケル対ゾンビ
果たして勝敗は如何に！！！

その19

「えーっと、とりあえず事情を整理しようか」

ピッケルがその場を仕切ってそう言う

それにクリスは異を唱えるもすぐさまジルに眉間を撃ち抜かれて痛そうに蹲った

「とりあえず・・・貴方誰？」

ピッケルは目の前に居た黒人っぽい髭面でハゲの髭面のオッサンを見た

「おい！誰がハゲだ！俺はハゲテ無くて剃ってるだけだ！」「スキンヘッド」って言え！」

つとまあうっさいオッサンは放っておいてさっさと自己紹介をすませると、このオッサンの名前は「ケネス・J・サリバン」です。はいお仕舞い

「おい！そんだけ！？そんだけで終りなの？もつと捻ろうよお！俺のチームの位置とか普段の生活とか色々とさあ！」

うっせえなあ！生かして貰ってるだけでも有難いと思いやがれ！原作みたいにゾンビにディナーになって貰おうか？ああ？

「ひ・・・ひでえ・・・（涙）」

涙目になってケネスはその場に座り込んで「の」の字を書き出す

「いやあ、最近ハバネロチキンってのが流行ってるよなあ！あれ辛くて美味しいよなあ」

「ああ、それ言ってる、作者はまだ食べてないみたいだけど美味しいなあ」

隣でクリスも食事に参加していた

「おいおい、それ俺が買ったんだから俺にも食わせろよなあ」

更にその横でケネスも食べ始める

「腹が減っては良い作品が出来ん……と言う訳で私も食べるか」

と言って父（魔王）も食べ出す

「食つてる場合かあああああああああああああ！」「

そんな光景を見てジルとピツケルが力一杯怒鳴る

それを聞いたゾンビが額に青筋を浮かべて立ち上がる

「うっせえぞこの野郎！人が折角食事を楽しんでるつてのに邪魔しやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

こうしてピツケル対ゾンビの戦いは始まったのであった

「ちよ、ええええええええええ！ そんな簡単に始めちゃって良いのおおおおおお！ もうちょつとストーリーとか考えてやろうよおおおお！」

そんなピッケルを庇うようにジルが前に出る
それを見て3人が一斉に口を尖らせる
一瞬こいつら撃ち抜いてやろうかと思ったが止めた
弾がもったいないからだ

そんなこんながあつてクリス達はホールに戻ってきた

「ただいま、お風呂沸いてる？」

「んな訳ないでしょうが！」

そう言つてジルの鉄拳がクリスを襲う

クリスは涙を流してその場に蹲る

そしてホールに来た時、ピッケルはある事に気づく

「あれ？ウエスカーさんが居ないよ」

「ムム！本当だ！これは一体どうしたのか？」

そう、ホールには本来其処に居る筈のウエスカーが居らず、変わり
に入り口付近でジョゼフが変な落書きを書いていたのであった

「おいジョゼフ！隊長は何処へ行つたんだ？」

「ぶくぶく、僕知らないでちゅく」

「大変だああああああああ！ジョゼフがぶっ壊れたあああああ
あああああああ！」

「喧しい！」

ジルはそう言ってクリスの首を180度回転させる

「ゲヒヤツ！」

変な声を上げてクリスは倒れる

そしてジルはジョゼフに駆け寄る

「ジョゼフ！ しっかりして！ 隊長は何処へ行ったの？」

ジルが必死に聞こうとするもジョゼフは未だにラリッていた

「しっかりせんかいこの阿呆があああああああああああああ
あああああ！」

ジルが渾身の鉄拳をお見舞いする

「あらぶわああああああああああああああああああああ！」

ジヨゼフは上空に舞い上がり、そのまま地面に激突する

そしてそのまま氣を失つた

それを見てジルは「あ！」と声をあげてしまった

一体隊長は何処へ消えたのか？

そしてジョゼフの運命は如何に！

そして彼等は無事に館から出られるのだろうか！

それはまた次回で

「あゝ、今回は何か私は暇だったな」
「だったら戦ってよね父さんは（怒）」

その19（後書き）

次回、本格的に館の探索になるかもしれない予感がしないでもない気分になるっぽいと良いよね

ピッケル

「しっかりしてよ！」

その20（前書き）

今回はクリスに対するジルの制裁が目立ちますよお
そして相変わらず空気を読まない父（魔王）にピツケルのツツコミ
が炸裂

え？ケネスとジョゼフ？
居たっけそんな奴等？

その20

とんでもない事が起こっていた

今全員はホールに集まっているのだ

だが、其処は正にとんでもない事の連発であった

隊長のウェスカーは突然居なくなってしまったし、ジョゼフは壊れてしまうし、ケネスは剥げてるし、クリスは馬鹿だし、ジルは凶暴だし、ピッケルは虚弱だし、父（魔王）はチートだし、もうとんでもないと言う言葉しか思いつかなかった

「誰がハゲじゃあああああああああああああああああああ！」

ケネスが何も無い空間に向かって叫んでいるがとりあえず虫……もとい無視しておこう

「ひ、ひでえ……」

そう言って今度はケネスがホールの隅っこで体育座りをしだした
これまた暗いオーラを纏っている

「とりあえず、ぶっ壊れたジョゼフと鬱陶しいケネスは此処に置いておくとして、これからどうする？」

「はい、早く家に帰りたいです」

ダン！

挙手して答えたクリスの眉間にジルのハンドガンが火を噴いた
クリスは眉間に拳位の瘤を作って涙目になる

「それを見つける為に今必死になってるんでしようが！この馬鹿クリス！」

ジルの眉間にはこれ以上出来ない位の血管が浮んでいた
それを見ていたピツケルと父（魔王）は蚊帳の外と言った具合であった

「と、とりあえずこれから何処を調べましょうか？」

「そうね、さっきは食堂を調べたから今度は逆を調べて見ましょう」と言
ってジルは食堂とは反対側の扉を指差す

「ふうむ、そうと決まったらさっさと探検を始めよう！ところで、おやつは1人300円までで良いのかい？」

「魔王さん・・・遠足じゃないんですから（汗）」

「はいはい、バナナはおやつに入るんですか？」

ダンダン！

連続してハンドガンがクリスの眉間にヒットする
クリスの瘤が3段重ねになった

「いい加減黙りなさい！弾が勿体無いわ」

「俺は良いのかよ（涙）」

涙目になってクリスはじっと睨む
だが、ジルは鼻にも掛けない
そんな感じで一向は扉を開ける
其処は一面絵画の山であった薄暗い部屋にへんちくりんな絵が掛け
られている

「此処は美術室だったんですね」

「そうみたいね」

ジルとピッケルが冷静に分析する
その横では

「ぷくくくく、何だこの絵？下手だなあ！これなら俺の方が上手い
ぜえ！」

「ほほお、それなら私はもっと上手い絵を描けるぞお！」

クリスと父（魔王）が展示されていた絵を見て笑っていた

「何やっとなじやあああああああああああああああああああ！」

「あれまああああああああああああああああああああああ！」

ジルが叫びながらクリスにドロップキックをかます

父（魔王）にもかまそうと思ったのだが、止めた

反撃が怖いからである

それに、多分効かないだろうし

「あれ？ジルさん！あっちの方通路になってますよ！」

「あら、本当ね」

ピッケルが指差す方には奥に続く通路があった
ひよっとしたら何かある筈である

「とりあえず行ってみましょう」

「いってらっしゃい」

クリスが後ろでハンカチを振る
そんなクリスの首をガッと掴む

「あんたも来るのよ（怒）」

「へーい」

首根っこを引っ掴んでジルが奥に進む
その後ろをピッケルと父（魔王）が続く
通路の奥に行くと、其処は展示しきれなかった美術品を置いてある
場所に着いた

どうやら物置だったらしい
何か使える物は無いか物色するが、クリスが見つけた展示用のナイフ
くらいしか見つからなかった

「クリスさん、そのナイフはどうするんですか？」

「ん？これはなあ、壁にこうして点数ボードを張るだろう！んで高い
点数目掛けてナイフを投げろ」『そりゃダーツじゃろうがああああ
ああああああああ！』あれまあああああああああ！」

クリスのボケをジルのアップカットが遮る
クリスに更に50のダメージが加算された

「さ、馬鹿やってないで次行くわよ！」

手をパンパンと叩きながら言う
その下でクリスが殴られた頬を抑える

「殴ったね！親父にもぶたれた事無いのに！」

「ええい！一々うっさいわねあんたは！何なら意識失うまで殴った
ろうかあ！（怒怒）」

最も近くに居たジルは思わず尻餅を付く
そんなジルに向かってゾンビが歩み寄る
ジルさん絶対絶命！

そんな時颯爽とこの人が駆け抜けて着た

「この野郎！」

それはご存知タフガイのクリスであった

クリスは飛び上がってゾンビの顔にキックを当てる・・・寸前にゾンビがクリスの蹴りを片手で払いのける
そしてカウンターにバックナックルをクリスの顔に当てる

「ゲギョッ！」

ヘンな声をあげてクリスが落ちる
かっこ悪いぞ主人公！

「いてて・・・良い拳を持ってるじゃねえか！ゾンビの癖に」

クリスがペツと口の中にあつた血を吐き出す
するとゾンビがクリスを指差す

「君はまだ自分の未熟さに気づいていない、もっと自分を見なさい。
そうすれば自ずと自分が如何にちっぽけであつたかが分かる筈ですよ」

「はうああ！」

何と言う事だ！目の前に居る所々肉の剥げたゾンビ君に為になる話を聞かされるとは
これは正にクリスの心にジャストミートであつた

「あんたはあああああああ、危機感ってモンが無いんかい
いいいいいいいいいいいいいい！」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアア！」

ジルのヘッドロックが完全に決まりクリスはガクンとうな垂れた
動かなくなつたのを確認してジルはぽつと手を離れた
そんなクリスにピッケルは駆け寄る

「だ、大丈夫ですか？ クリスさん！」

「お、おう……危うく悶絶する所だったぜ」

「はい？」

言葉の意味が分からずピツケルは首を傾げる

「子供にやまだ分からん話さ」

そう言ってそつと立ち上がる

そのまま何事も無くL字廊下を歩いていると

「むっ！これは！」

ふと、父（魔王）が戸棚からある物を取り出したそれは紛れもなくハンドガンのマガジンであった

「あら！丁度良かったわ、もうすぐ弾が切れる所だったから」

「何だ？ お前敵に発砲したのか？」

「身近な馬鹿にしか発砲してないわよ（怒怒怒）」

ジルが顔中に血管を浮かべてクリスを見ていた

それを見てクリスの顔が青ざめる
すると、突如後方から窓ガラスの割れる音が聞こえた

「な、何？」

見ると、其処には数匹のゾンビ犬が猛スピードで向かって来た

「俺に任せろ！」

クリスは此処はカッコよく決めようと数匹のゾンビ犬に向かっていく
そして取り付けていたナイフを取り出し切り付けようとした・・・
が、ゾンビ犬は全部クリスをスルーしていった

ズテーーーーー！

突然の行動にクリスはずっこける
かっこ悪い

「ちょ、ちょっと待って！何で俺を無視するの？」

クリスは打ち付けた鼻を押さえてゾンビ犬を見る
すると振り返ったゾンビ犬はお互いに話し合う
そして結果が

「何か痛い奴だから無視した」

であった

「んのおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お！」

とりあえず叫ぶがこれ以上父（魔王）の暴走を許すと多分作者から苦情が来そうなので仕方なくピッケルは犬達に向かう
腰に挿してあったひのきの棒を取り出す
そして

「グングニル様！頼みます！」

『ふぁ！もう朝か？まだ眠いんじゃないが』

「相変わらずボケてますねえ（汗）とりあえず力を貸して下さい」

『ヤダ！』

予想外の返答であった
その為

「え？何で？」

『面倒だから』

「何ですとおおおおおおおおおおおおおお！」

ピッケルが叫ぶ

何と言う事だろうか

此処に来て、ここ一番と言う所で

グングニル様がストライキを起こしてしまったのであった

どうなるピッケル！

どうなるこの話！

それは・・・多分作者も知らない！

「つて、またこのオチですかあああああああああああああああ
ああああい！」

その20（後書き）

まさかのグングニル様のストライキ

そして目の前には数匹のゾンビ犬が！

負けるなピツケル！

お前が負けたら誰が父（魔王）にツツコミを入れるんだ！

その21（前書き）

今回またあの魔法が炸裂
そして、あれの使い道が何と公開されます！

その21

ピッケルは今最大のピンチに立たされていた

目の前には突然現れた3匹の犬

その後ろでいじけて『の』の字を書き始めるクリス

そして後ろではジルがハンドガンを構えて父（魔王）がエールを送ってる

要するにお前が戦えと言う意味である

ジルもハンドガンを構えてはいるが、多分援護はしてくれないだろう。弾が勿体無いし

ってな訳でピッケル！さあさっさと逃げ！

「ちよっと！字が違うよ！何『逝け』 って！普通は『行け』でしょ？」

うっせえなあ！あんまりうっさいと主人公から通行人Aに変えちまうぞコラ？

「やっぱり作者ギャグだとD Sになるよ・・・そして何で何時も僕が虐められるの? (涙)」

それはお前が主人公だからです

「酷い！」

天に向かって絶叫するピツケル

そんなピツケルに3匹は猛然と襲い掛かつて来る

鋭い牙がギラリと輝き今にもピツケルを今夜のディナーにしようとする。

ズシリとした重さが伝わってきた
こりゃ本物だな

そう思いながらマジマジとショットガンを見た
すると、ショットガンの掛けられていたフックがガコンと音を立て
てせりあがった

それを見てクリスは疑問に思ったが、とりあえず放っておく事にした

「へえ、此処って結構綺麗なんだね、父さん」

「うむ、まるでお客様を招き入れる時に使いそうで使わない部屋
みたいだね」

「いや、其処は普通に使うで良いと思うよ（汗）」

相変わらず父（魔王）の言動は理解し難い物がある

ジルはとりあえず部屋の中を物色した

とりあえず他に使える物は無いらしく外へ出る事にした
扉を開けて何も無い部屋に出る

すると天井から埃のような物がパラパラ振ってきた

「何だ？」

疑問に思い一同が上を見た

そして、青ざめた

何と天井が真っ直ぐ迫って着ているのだ

「うぞおおおおおおおおおおおおおおお！」 っとピッケル

「いやあああああああああああああああ！」 っとジル

「えーっと、やっほおおおおおおおおおおお！」 っとクリス

「他の小説も宜しく！」 っと父（魔王）

とりあえずどうしようか考える事にした

「と、父さん！この場合どうしたら良いの？」

「よし！明日のお昼ご飯の後じっくりこっそり教えてやろう！」

腕を組んで自信まんまんに答える
だけど、

「後数分で僕達はぺちゃんこになるの！今すぐ教えてよ！」

滝のように涙を流して怒鳴るピッケル

そんなピッケルを見て父（魔王）が肩を上げる

「やれやれ、最近の若い者は短気でいかなあ・・・もっと心に余裕を持たないと」

「だから後数分で天井が僕達を潰すって言うてるでしょうがああああああああああああああああああああ！」

大声で叫ぶ

だが、その間も刻一刻と天井が迫ってきていた

「とりあえず！部屋に戻りましょう！」

そう言ってジルは元来た部屋への扉のノブに手を掛ける

ガチガチと嫌な音がした

鍵が掛かっていたのだ

「うぞっ！」

ジルは真っ青になった

「く、クリスマス！そっちの扉はどう？」

ジルはクリスの方を見た

クリスはと言うと

「行け！ ヒトカゲ！ 火炎放射だ！」

「何の！ゼニガメの水鉄砲だ！」

父（魔王）と昔懐かしのポケモンをのほほんとプレイしていた
そんなクリスにジルは額に青筋を幾つも浮かべる
そして

「何やっとなじや己はあああああああああああああ
あああああああ！」

「あれまああああああああああああああ
あああああああ！」

思い切りドロップキックをかます
食らったクリスはそのまま壁に激突する
やがて天井は扉の半分にまで差し掛かってきた
最早ドアのノブすら天井に押し潰されてしまいもう立っている事も
出来ない状態であつた

「もう駄目よ！このまま私達サンドイッチになるのね（涙）」
「いやだああああああ！まだ死にたくないよおおおおおおお！」

ジルとピッケルは大粒の涙を流して悲しんでいた
そんな時

それを見て悲しむジルとクリス
だが、其処へ父（魔王）が近づき、

「光魔法「ICU」」

と唱えた

すると目の前に5人の医者が現れた

「出た！しょうもない魔法！」

ピッケルは出てきた医者達に向かって指差して叫ぶ
それに中心に居た医者が怒る

「何言うんだこのガキ！お前をのっぺらぼうにしてやろうか？」

額に青筋を浮かべて医者が言う

それを聞いてピッケルが真っ青になって下がる

「先生！この人の治療をお願いします」

「任せなさい！」

そう言って今度は手術台を出し、其処にフォレストを寝かす

「では、これより工作^{オペ}を始める」

「はい！」

「メス！」

「はい」

「のり！」

「はい」

「携帯電話！」

「はい」

「ニンテンドーDS」

「先生！DSは近々新型が出るみたいです」

「え？マジ！」

「マジです」

「よし、買おう！・・・んじゃ、ドーナツ」

「はい」

「週間少年マガジン」

「先生！今週に「は〇め〇一〇」が載ってますん」

「マジで！んじゃ良いや」

「はい」

「ブラパッド」

「はい」

「食パン」

「はい」

「その辺の雑草」

「はい」

・・・

とまあそんなこんなで手術は難航した

「うゝゝむ、かなりの難しい手術のようだなあ」

「どこがあああああああああああああああああああ！」

場違いな発言にピッケルが怒鳴る

「何処が難しい手術なの？あれ明らかに間違えてるよ！何で手術に
関係無い物ばかり出てくるの？あれで治るの？」

とりあえずゴリラになったフォレストは邪魔なのでホールに置いていき、一向は探索を続けた

今度は妙に薄暗い部屋であった

すると、其処には一組の男女が座っていた

女は年から言うとは18歳位のピチピチのヤングであり

男の方は何か毛髪がやばそうな兄ちゃんであり、腕を負傷していた

「貴方達は？」

少女がクリス達を見て尋ねた

「クリス・レッドフィールド！多分アルファチームだ」

「ジル・バレンタイン！多分じゃなく絶対アルファチームよ」

「僕はピッケル！只の通りすぎりです」

「私はテツと言うよ！只の通りすぎりの魔王だよ」

「え？え？え？・・・な、何で子供と・・・魔王？が居るんですか？」

意味不明のパーティーに少女は目を丸くする

するとクリスは横たわる青年を見た

「リチャード！一体どうしたんだ！」

「く・・・クリス・・・この館は・・・やばい・・・とんでも無い

化け物が居るんだ……」

「何だって！とんでもない履物があるだって？」

「い……嫌……履物じゃなくて……化け物なんだけど……」

クリスの横でボケた父（魔王）にリチャードがやんわりと突っ込む

「毒蛇に噛まれたみたいなんです……でも、その割には傷口が大きくて」

少女はそう言って噛まれていた辺りを見せる

確かに普通の蛇の約10倍位の跡がついていた

「あ……あれは……毒蛇なんかじゃない……もっとヤバイ奴だ……」

「え？毒蛇よりもっとナウい奴！ちよっと見てみたいなあ」

「あんたは一辺……耳鼻科へ行ってくれよ……」

突っ込む気力が無いのか弱弱しく言う

「血清を見つけたのですが……置き忘れてしまっ」

「血清？それならあるぞ」

「え？何処にですか？」

少女が輝く目で父（魔王）を見た

すると父（魔王）は頭に生えていた角を折ると主室にリチャードの腕に突き刺した

すると、その角の色素が徐々にリチャードの腕に入っていく

すると、何と言う事だろうか！

彼の腕の傷がみるみる消えうせてしまったのだ

そして

ジルの脅しを受けて渋々クリスは部屋の探索を始めた
すると、突如クリス達の前に全長10m（位かな？）の巨大な蛇が
現れたのだ

「な、何！」

「凄く・・・大きいです！」

「んな事言っとる場合かおのれは！」

ジルがボケるクリスにビシッとツツコミを入れる

「と、父さん！あれって・・・」

「ううむ！遂にボスキャラ登場か！こりゃ燃えるぜい！」

「ちつがああああああああああああああああう！」

これまた場違いな事を口走る父（魔王）にピッケルのツツコミが炸
裂する

その横で

「あのお・・・皆さん蛇を見ましようよ」

明らかに蚊帳の外にされた蛇がじっとこっちを見てくれるのを待っ
ていた

その中で1人空気を読んだ少女「レベッカ・チェンバース」が苦笑
いを浮かべながら言うのであった

その21（後書き）

次回！蛇と激闘？

次はまともに戦って欲しい物だ・・・全く（汗）

その22（前書き）

蛇とのバトルスタート！

その22

クリス、ジル、ピッケル、父（魔王）、レベッカの前には全長約10m（位）はある巨大な蛇が居た

蛇は威嚇の姿勢で下を震わせ特有の鳴き声を上げて牙を出す
牙から毒液が滴り落ちる

普通ならこれを見たら失神物だろう
しかしこいつらは・・・

「本当に薄汚い部屋だなあ、掃除しないのか？この人達は」

クリスは如何にも不快そうに壁に出来た蜘蛛の巣を見ていた

蜘蛛の巣は相当時間が経ったせいか埃まみれになっており、家主は居ない

恐らく引越したか何者かのディナーになってしまったのだろう

「そうね、にしても誇りっぽいわねえ・・・あんまり長居したくないわね」

その隣ではジルが口元を押さえて言っている

蛇はこれまた盛大に鳴き声を上げる

その泣き声は部屋中に響き渡り壁や床を振るわせた
だが、

「父さん、こんな部屋に何かあるの？」

ピッケルがベコベコになった床を踏みながら聞く

「ピッケルよ、こう言う部屋にこそ重大なアイテムがある物なんだ」
そう言って父（魔王）は部屋の中に何か無いか目を光らせている

「あのお・・・目の前にすっごく大きい蛇が居るんですけど・・・
（汗）」

レベッカは震える指で目の前を指差す

それを聞いて皆が「え？」と一斉に指された方を見た

其処には誰も気づいてくれないせいか壁の隅っこで丸くなって暗い
オーラを漂わせている巨大な蛇が居た

何だか背中がとても悲しそうだ

それを見てジルは

「ぎゃあああああああああ！蛇いいいいいいいいいい！
と絶叫し、クリスは

「ぎゃあああああああああ！鰻いいいいいいいいいい！
と、相変わらず馬鹿発言をしており、我等がピッケルは

「って、何で誰も気づかなかったのおおおおおおおお！
と、大声で叫んでおり、父（魔王）は

「あ、居たの？」

とマイペースにも程がある発言をしていた

やっと自分に気づいてくれたのかと思いい蛇が踵を返して口を大きく
開いて舌を震わせて不気味な鳴き声を上げた
そして鋭い牙を見せて其処から毒液を垂らす

・・・が、

「やっぱりあれは蒲焼にして食うべきだよ！」

「いやいや、此処は鍋にして鱗ごと食べるに限るぞお！」

クリスと父（魔王）が何やら言い争っていた
それも結構激しい口論である

「ちよっと！二人して何やってんの！（怒）
額にミミズを浮かべてジルが怒鳴る

それに二人は答える

「「あの蛇をどうやって食べるかだよ！」」

それを聞いたジルとピッケルとレベッカは呆れてしまい、蛇は真っ
青になった

このまま此処に居たら自分は食われるのでは無いか？

そんな不安が蛇の脳裏を過ぎった

その時、後ろの扉が閉まる音がした

音に気づき皆は振り返る

すると其処には

「y e e e e e e e e e e e h a a a a a a a a a a a a a a a a ! 皆ノツてるかあああああああああああああ
い?」

マ○ケ○・ジ○ク○ンのコスプレをしたりリチャードが激しく踊っていた

しかも何処からか英語の歌が響いてくる

その上リチャードを中心にして何故かスポットライトまで出てくる

「アオッ! 皆の熱い視線が俺に釘付けだぜい!」

クリス達の冷めた視線が熱い視線と勘違いしたりリチャードが更に激しく踊る

音楽もいよいよ盛り上がりを見せた所で

バクッ!

溜まりかねた蛇がリチャードを頭からかぶりついてそのまま飲み込んでしまった

ゴクンと喉を鳴らしてリチャードが蛇のお腹の中へ入っていく

暫し沈黙した後

「り、リチャアアアアアアアアアアアアアド」

空気を読んだジルがリチャードの名を叫ぶ

すると、蛇の腹の中からまだ音楽が聞こえてきた

それに蛇が驚き音のする自分の腹を見る

蛇の頭には無数の?マークが浮ぶ

だが、とりあえず音楽はあるがまあ其処は戦闘BGMと考えて割り切るかっと言う事で蛇はピッケル達を見て再び威嚇を始める

「くっ・・・リチャードの吊い合戦だ! 皆行くぞ!」

クリスが涙目になって言う

だが、蛇の腹の中では一向に音楽が鳴り響いており、スポットライトで空けた腹の中では未だにリチャードが激しく踊っていた

半ば諦めた顔でピツケルはひのきの棒を構える

「よし、今回は俺も参加するぜ！」

その隣でクリスが腕を鳴らしていた

- ・
- ・
- ・
- ・ パンツ一丁で

「つて、何でパンツ一丁なんですかあああああああああああああ
あああああああ！」

突然目の前で無防備過ぎる格好をしたクリスにピッケルが怒鳴る
それにクリスは

「いやあ、そう言えば今日カ〇コ〇から「デ〇ド〇イ〇ン〇2」が出るじゃん！それにあやかって俺もパンツ一丁で頑張ってみようと思ってるさ」

グッと親指を立てて言うクリスにピツケルは滝のように涙を流す

（この人……正真正銘の馬鹿だ！）

とりあえず口に出すと失礼なので心の中で呟く事にした。ピッケル
その二人の後ろでは

「頑張りなさいよ！ クリス」

「頑張って下さい！先輩！」

「頑張れ！勇者！」

ジルとレベツカが銃を構えており、父（魔王）はポテチを食べながら応援していた

それを見て

「戦ってくれないのおおおおおお！」「

と二人は叫んだ

それに皆は

「弾が勿体無いでしょ！」

と、
ジルさんが言う

「遠くから援護はしますから……頑張ってください！」と、レベツカが言う

『やれやれ、相変わらず情けないのお』

「あ、グングニル様！」

ひのきの棒になっていたグングニル様の声が聞こえてきた
ピッケルはひのきの棒を見る

『どうやら今回はワシの出番のようじゃなあ！』

「んじゃ手を貸してくれるの？」

『任せイ！このワシに任せればあんな泥鰌どじょうなどチョチョイのパー ज्या！』

何気にまた間違えていたがとりあえず深く突っ込まないで置く事にした

それよりもグングニル様を使えばあの巨大な蛇を倒せると言うのだ
それを聞いたピッケルの顔がパツと明るくなる

「それじゃ！僕に力を貸して！グングニル様！」

『任せろ！んじゃ行くぞお！』

グングニル様がそう言うのと、突如ひのきの棒が眩い閃光を放つ
その閃光はすぐにピッケルを包んだ

「うわっ！眩しい！」

思わずピッケルは目を瞑った

そして、閃光が晴れた時、其処には

その頃、クリス（パンツ一丁）は巨大な蛇と格闘していた

「とりゃあ！クリスパアンチ！」

説明しよう！クリスパンチとはクリスの中に流れる真っ赤な魂を1
00万パワーで燃やして放つ必殺拳・・・だったら良いなと言う感

じで言っただけである

「次はこれだ！クリスキック！」

クリスキックとは、クリスの超人的な筋肉を駆使して相手の骨を簡単に打ち砕く・・・事がありそうな蹴りである

「トドメだ！クリスボンバー！」

クリスボンバーとは・・・おならである

そんな感じの連続攻撃を浴びせる

だが、蛇はクリスボンバー以外大して効いた顔はしていなかった
そしてそのまま蛇は尻尾でクリスを弾き飛ばす

「アウチ！」

クリスは尻尾の攻撃を横っ腹に食らいそのまま倒れる

「ワーン、ツー、スリー・・・」

横に立った父（魔王）がカウントを取る

その前では蛇がニユートラルコーナーで待機していた

その顔はとても勝ち誇ったような顔である

そんな中、クリスがヨロヨロと立ち上がる

「へへ、カウント止めなよレフェリー・・・まだまだ勝負はこれからだぜ」

口から流れる血を手の甲で拭って再びファイティングポーズを取る
それを見た蛇が再びファイティングポーズを取る

お互いを見合った父（魔王）は腕をクロスして「ファイト」と叫ぶ
「うおおおおおおおおお！」

再会されたと同時にクリスは猛然と殴りかかる

だが、蛇がそんなクリスの横腹に噛み付く

幸い牙は生えていないのだが、そのまま地面に叩き付けられてペツと吐き出される

クリスの頭には無数のタンコブが出来ていた

そして倒れたクリスに父（魔王）が近づくと、その場で腕を交差するとゴングが鳴り試合は終了したかに見えたが

「まだだ！」

そのまま放物線を描いてクリスは部屋の奥に落ちる

凄まじい埃が舞い散る

「いてて・・・相変わらずジルさんの鉄拳は厳しいなあ・・・ん？」
額を摩りながら起き上がるとクリスはある物を見つける

そしてそれを拾い上げる

それは、不気味な形をしたマスクであった

それが一体この先どうなるのか

それはまた・・・別の話しで

その22（後書き）

次回も館の中を楽しく探検しますよ

その23（前書き）

今回父（魔王）ですら恐れる強敵出現
大ピンチの予感・・・でもないか（汗）

その23

クリスは奇妙な仮面を発見した

それは人の顔を模した仮面であったが、何故か目だけが無かった

「変な仮面だなあ」

その仮面を見たクリスの第一の感想がそれであった

「でも、それって一体何に使うんでしょうね？」

レベッカが仮面を摘まむように持って尋ねる

「肝試しに使うんじゃないの？」

クリスが思いついたかのように言う

それにジルのツツコミが炸裂する

「そんな訳ないでしょうが！きっと何かの鍵なのよこれは」

ジルは箸で摘まむように仮面を持つ

「ってかお前等！それゴミじゃ無いんだからもう少し気を利かせて持てよ！」

「それじゃこんな不気味な仮面が後何個もあるんですか？」

「多分そうなんじゃないの？」

それを聞いたピッケルは何処か嫌そうな顔をした

「あのお・・・とりあえず此処から出ませんか？」

「うむ、そうだな・・・折角の晩御飯にも逃げられてしまった事だし」

「って、食う気だったの父さん！」

父（魔王）の以外な告白にピッケルは思わず青ざめた

それから、あんまりにも鬱陶しかったので今度はリチャードを麻袋に押し込んで鎖でグルグル巻きにしてホールに蹴り込んでおき、早速残りの仮面を探す事にした

一向はとある観葉植物を育ててるような場所に辿り着いた

「あ、皆さん！あそこに仮面がありますよ」

ピッケルが指差す

それは噴水を間にして壁の奥に仮面が掛かっていたのだ

「ラッキー！そんな早速とりに行こうぜ！」

クリスが鼻息混じりに仮面をとりに行く

その時、噴水の中から無数の極太うどんを思わせる植物のツルが現れる

そして、それで思い切りクリスの頬を引っ叩く

「ゲボオッ！」

引っ叩かれたクリスは数歩下がってその場に女座りをしだす

そして目を潤ませる

「な・・・殴ったね・・・妹にもぶたれた事無いのに」

「ウツサイ！キモイ！」

吐き捨てるように言ってジルはクリスの後頭部にハンドガンを3発発射した

弾が当たった箇所には数個の大きなタンコブが出来上がっていた

「でもどうしよう・・・あれじゃとりにいけないですよ」

「そうね、レベッカ、どうにか出来ない？」

「うーん、除草剤とかあればもしかしたらですけど・・・そんな上手い具合にある訳」

「おう、それってコレの事か」

そんな時、クリスが自身気に除草剤を持ってきた

ジルとレベッカはナイスクリス！と言ったが、何とクリスはその場でずっこけて床に盛大に除草剤を撒き散らしてしまった

袋の中には除草剤は最早一滴も残っていなかった

「いやあ・・・やっちゃった♪」

可愛げに言うが、そんな事で許される筈も無くクリスはジルとレベツカにこれでもかと言う程足蹴にされた

「あれ？そういえば父さんはどうしたんだろう・・・って！」

ピッケルは父（魔王）を探して周りを見ていた

すると、父（魔王）は先ほどクリスを吹っ飛ばしたつるを食べていたのだ

「うーん、最近野菜を取ってなかったら丁度良かった。味はそんなに美味しくないがまあ良いか」

と言ってモンスタープラントを次々と平らげていく

つるがそんな父（魔王）に攻撃を仕掛けるも父（魔王）には全く効いておらず、むしろその一撃をガシッと掴まれてムシャムシャと動く口の中に持っていかれる

やがてモンスタープラントは全て父（魔王）の口の中に消えてしまった

「プフ、ご馳走様・・・さて、これが例の仮面なのかなあ？」

父（魔王）は部屋の奥にあった仮面を取って見た

それを見たジルはついでにクリスにトドメの一撃を加えると仮面の元へ行く

「確かにそうね、これで二つ揃ったわ」

「へえ、ジルさんはこんな不気味な仮面を集める趣味でもあるのかい？」

「んな訳あるかあああああああああああああ！」

父（魔王）の明らかに場違いな誤解にジルが額に青筋を浮かべる

その中、クリスは1人床で悶絶していた

良い忘れたが、クリスは未だにパンツ一丁である

次にピッケル達がやってきたのは狭いコの字の廊下であった
そして壁にはガラス張りの綺麗な絵が掛けられていた

「へえ、ガラスの絵なんだ、綺麗だなあ」
ピッケルが絵に近づく

その時突如「カーッ、カーッ」と鳴き声が響いた
驚いた一同は上を見上げる

すると、其処には数羽のカラスが壁に付けられた棒の上で屯していた
「何だカラスか」

流石にカラスなら問題ないだろうと思いホッとするピッケル
だが、父（魔王）は驚愕の顔をしていた

「うむむ・・・これは強敵だぞおピッケル」

「ええ、何処が？ 只のカラスじゃん」

「嘘だと思ふならこれを見ろ」

そう言って父（魔王）は黒いパネルを取り出す
其処に映っていたのは

カラス

L V .. 2 0

H P .. 3 0

M P .. 0

力 .. 3 0

守 .. 3 0

足 .. 1 0 0

魔 .. 0

その23（後書き）

更新が遅れて申し訳ない（反省）

その24（前書き）

新キャラの予感

その24

父（魔王）とピッケル一行の手には3つ目の仮面が握られていた
先ほどのカラス地獄の廊下で手に入れたのだ
え？どうやって手に入れたかだって？

クリスを傘代わりにしてカラスの糞攻撃を防いだのだ
その間クリスは終始「ぎゃ〜」とか「人殺し〜」とか「くせ〜」と
かほざいていたが一行はスルーしていた
そんなこんなでどうにかこうにか仮面を手に入れたのであった

「いやあ、無事に手に入って良かった良かった」

「良くねえ！」

一行の後ろで全身糞まみれで相変わらずパンツ一丁のクリスが涙目
になって怒鳴っていた

「うわ、ちよっとクリスなによその格好！臭いから近づかないでね」

「酷いやジルさん（涙）」

クリスは滝のように涙を流した

「ど・・・どんまいですクリスさん（汗）」

レベルカはなるでくクリスに触れない距離でクリスを励ました
それは逆にクリスには痛い思いにしかならなかった

「まあ、何にせよこれで仮面は3つ揃ったな、これで後一つと言う
わけだ」

「え？どうして分かるの？父さん」

「それはこの『父さんリーダー』のお陰さ」

そう言って父（魔王）は自分の角を指差した
それにピッケルは首を傾げる

「えっと・・・それ只の角ですよね？」

「うん、そうだよ・・・でもこの角には実に1300通りの使い方
があるのだよ」

「一体どんな使い道があるのおおおおおおおおおおおお

おおおおお！」

余りに多種多様な使い道がある角にピッケルは驚く

「せ、1300通りって……一体その角はどんな材質で出来てるんですか？」

レベッカが興味を持ち角に触ると、

ズボッ

音を立てて父（魔王）の頭から角がポロリと抜けてしまった
それを見たレベッカは青ざめる

「ご、ごごご御免なさい！魔王さんの角取っちゃいましたあああああああああああああ！（号泣）」

一瞬殺されると思ったのだろうか大粒の涙を流して必死に謝るレベッカ

だが、父（魔王）は笑顔であった

「ははは、心配しなくてもすぐ生えるよ」

「え？」

その言葉に首を傾げていたレベッカではあったが、すぐに抜けた箇所から角が生えてきた

それを見たピッケルは驚く

「な、何ですぐ生えるのおおおおおおおおおお！」

「ほら、鯨の歯だってすぐ抜けるけどすぐ新しいのが生えてくるだろう！あれと同じだよ」

「あんたは鯨じゃないだろうがあああああああああ！」

「え？私のかまぼこは好きだぞ！」

「またそのボケかい！久々だなあおい！そんじゃこっちも久々のツコミ言うけど！一辺耳鼻科行けエエエエエエエエエエ！」

父（魔王）とピッケルの微笑ましい会話が狭い廊下で展開していた
「何処が微笑ましい会話なの！全然微笑ましくないよ！むしろ腹が

立ってくるよ！」

うっせえよ！このヘッポコ勇者！てめえの主人公の地位を剥ぎ取って只のツツコミ少年にしたるぞ！

「相変わらず此処の作者は厳しいよ・・・何で僕ばかりこんな目に遭うの（涙）」

涙を流しながら俯くピッケルをレベツカが慰める

「ところでさあ、この体何処で洗えば良い？」

「知らないわよ！その辺で洗って来なさいよ（怒）」

横で糞まみれのクリスに額に青筋を浮かべてジルが突っ込む

その後、ピッケル達とはある書斎に来ていた

其処で一行はとある紙切れを発見する

「あれ？何だろうこれ？」

ピッケルは置かれた紙切れを取る

・・・だが、全部英語で読めなかった

「うう・・・難しい字ばかりで読めない・・・クリスさん呼んで下さい」

「おう！任しておけい！」

ドンと胸を叩いてクリスが紙切れを取る

そして

「ああ、奥さん・・・私の体がもう熱くて耐えられません

ああ、駄目よ！まだお昼よ！旦那が帰ってくるわ

そんなの関係ない！僕はもう我慢できないんだ！今此処で

ああ、そんな大胆な・・・止めて！私の体はあの人だけの物なのお

おおおおおおおお！」

「んな内容書いてある訳無いだろうがあああああああああああああああ
あああ！」

何とも卑猥な事を口走ったクリスにジルが眉間にショットガンを連射する

クリスの顔は散弾を浴びて豆パンのような状態になった

「な・・・何すんの・・・ジルさん・・・」

「うっさい！あんたに読ませるとロクな内容にはならんわ！貸しなさい！」

ジルはクリスの持っていた紙切れを筆り取って読む
すると其処には

「生きる意志のある者達に言うておく

この館に生息しているゾンビ達は倒してもすぐに起き上がる

しかもメツチャパワーアップしてしまうのだ

現に俺も一辺死にかけた・・・そしてちびった（涙）

だが、奴等をパワーアップさせない方法がある

それは以下の二つだ

・頭を吹き飛ばす

・燃やす

この二つだ、

だが、知っての通りこの小説は「ギャグ小説」なのでこの二つは使えない

よってパワーアップしまくりなのだ

残念だったな

ガッハッハッハ！」

と、書いてあった

それをジルはビリビリに破り捨てる

「ガッハッハッハじゃないわあああああああああああああああ

あ！どうすんのよ！これじゃ私達パワーアップしたゾンビと戦うしか道無いじゃないの！」

「お、落ち着いて下さいジルさん！幸い私達ゾンビと戦ってないですし大丈夫ですよ！」

怒り来るって暴れまくるジルにレベッカが後ろから抑えつけて必死に宥める

すると、ジルが蹴った机から一個の笛みたいな物が出てきた

「ん？何だろうこれ？」

ピッケルは笛を持って見る

そして主室に吹いて見た

が、音は出ない

「あれ？壊れてるのかなあ？」

「ん？それはひょっとして『犬笛』じゃないのか？」

「犬笛？何それ？」

「犬にしか聞こえない音を発する笛だ、因みに父さんにはバッチリ聞こえたけどね」

「あんた本当に人間じゃないよね」

何を今更言ってるんだこの勇者は

とそんな事を言っているとまた紙切れが落ちて来た

今度は写真と一緒に

「あら？今度は何かしら？」

レベッカは紙切れを掴み上げて内容を読んだ

「今日スペンサー卿からある大事な物を隠せといわれた

面倒なので君が飼ってる犬の首輪にでも隠しておいてくれない？

後で君の欲しがってた『リ○カ○な○は』のDVD全巻をあげるからそれで手を打ってくれ

んじゃ宜しくって事で

マーチン・プラットホーム

追伸、追伸って書いてあって何でも有力な情報があると思ったら大間違いだぞコン畜生！」

と、書いてあった

それを見てレベッカは顎に手をやる

「大事な物・・・一体何でしょうね？」

「さあね、でもきっと大事な物だとは思うわ」

「よっしゃあ！んじゃさっさとその大事な物を取りにその写真の場所に行こうぜ！」

クリスが持っていた写真を見て言う

其処はテラスらしき場所が移っていた

一行は写真のあったテラスに来ていた

外はすっかり夜になっており不気味さを増していた

そんな中一行はと言うと

「いやあ、こんな月が良く見える日は月見団子に限るなあ」

「へえ、これが月見団子って言うのか、結構美味いなあ」

父（魔王）とクリスが月見団子を頬張っていた

「いや、くつろぎ過ぎでしょう！って言うか、もう笛吹きますよ」

待ったなしでピッケルは笛を吹いた

無音の音波があたりに木霊する

ジルとレベッカは暫く待っていた

そして、来るであろう敵に備えていた

丁度その頃、館の外では数匹のゾンビ犬が1人の少女によってコテンパンにのされていた

「フッフ、この私に挑むなんて貴方達ロマンがるわね・・・でもまだまだロマンが足りないわ!」

少女は目を回してのびている犬達に向かってフンと鼻を鳴らしていたすると、ある一匹の犬の首輪からコインのような物を発見する

「あら?何かしらこれ?」

少女はコインのような物を拾い上げてみる

弄くってみると、それは瞬く間に鍵のような形に変わった

「何だか分からないけどこれからロマンの匂いがするわ!きつとこれを巡って何かロマンティックな事が起こる筈ね」

1人そう呟いて鍵を懐のポケットに仕舞う

すると、館の方から犬笛の音が聞こえる

「この音色は・・・きつとロマンが私を呼んでいるのねえ!」

1人でそう勝手に決め付けた少女がダッシュで館を目指した

果たして、彼女は何者なのか?

そして、彼女が此処に来た理由とは・・・

それは、また次回って事で

その頃、ホールで屯していた2軍メンバーはと言うと

「ロン！」

ケネスがマージャン台の上で叫んでいた

その周りにはジョゼフ、フロスト、リチャードが囲んでいた

「またケネスの1人勝ちかよ！」

「うほうほうほ！（相変わらず強いなお前）」

「意ヤッホー！ー！また負けちまったぜい！」

退屈しのぎにマージャンをする4人

ってか、てめえら他にやる事ねえのかよ（怒）

その24（後書き）

次回新キャラが出ます

その25（前書き）

新キャラ登場

多分この話のヒロインです

その25

ピッケルが犬笛を吹いてから実に30分が経過していたが、その間起こった事と言えば・・・

「いよっしやあ！こうなったら脱ぎ巻くってやるう！」

「つてえ！あんたは既に脱ぐ物ないでしょうが！」

酔っ払ったクリスが最後の砦^{バンッ}を脱ごうとしてジルにとび蹴りを食らったり

「わあ、こんな所にハーブが栽培されてますよお」

「あ、本当ですね」

レベルカとピッケルがプランターに生えてたハーブを発見したり

「むむう・・・もうお団子がなくなってしまった（汗）」

持ってきた団子を全部食べてしまいがっくりする父（魔王）であったりと様々であった

そんな時、ふと通路の向こうでガサガサと何かが草木を掻き分けて来る音がした

「むっ！来たな！」

クリスはそう思い構える

だが、未だに服は無い

何故なら最初にパンツ一丁になった際に服を一式全部蛇に飲み込まれた為着る物が無いのだ

そうこうしていると突如通路を抜けて現れてきたのは

数匹の犬・・・の首根っこをロープで括りつけて引っ張る少女が居た
ピンク色の長い髪を両端で束ねたツインテールの髪型に赤い瞳をした少女であった

そして、それを見たピッケルは驚愕した

「げえっ！あのツインテールは！」

「何だ？ピッケル・・・知り合いか？」

「ええ・・・僕の村の幼馴染なんですけどね」

ピッケルが説明しようとする前に少女がピッケルを発見する

「ああああああああ！ピッケルじゃん！奇遇だねえ！」

少女が犬を持っていた手を振って挨拶する

そうなれば当然犬達は空中で振り回されまくる

すると少女は犬の群れを「邪魔」と言って外に放り投げてしまった手をパンパンと叩いて少女はピッケルに近づく

「ムフウ・・・こんな所で会うなんて・・・貴方もやっとロマン道に目覚めたのねえ？」

「はあ？ロマン道？・・・何じゃそりゃ？」

クリスが首を傾げる

すると少女がクリスを見て顎に手をやる

「貴方のその格好・・・きっと何かロマンティックな事があってそうだったのね！」

「ろ・・・ロマンティック？」

突然何を言い出すのかといった顔でクリスは少女を見た

「私は「ナツチャン」見ての通りさすらいのロマニストよ」

「ろ、ロマニスト？」

意味不明な言葉にレベッカもジルも首を傾げていた

其処にピッケルが付け足す

「えっと・・・ロマニストって言うのはですねえ・・・日々ロマンを求める人達の事でして・・・三度の飯よりロマンが大好きな人達の事を言うんです」

「因みに私は世間からは「ロマンハンター」って言われてるわ！」

「ろ・・・ロマンハンター・・・ですか・・・（汗）」

クリス達バイオ組は最早話題についていけなかった
すると

「おや？誰かと思えばナツチャンじゃないか！元気にしてたかい？」

「あら？誰かと思えば叔父様じゃないですか！そんなにロマンティックな姿になって・・・胸がときめきそうだわ！」

ナツチャンが父（魔王）を見てポツと頬を染める

落ちたピツケルが苦痛の声を上げる

それを魔王が余裕の表情で見下ろす

「そんなヘツピリな体でこの私は倒せん！もつと力をつけて来い！」

「み……見てろよ……必ず力をつけてお前を……お前を倒してこの世界に平和をもたらしてみせるからなあ！」

拳を握り締めてピツケルは燃える夕日に向かって叫んだ

「あの時の誓いを・・・お前は破るつもりなのか？」

[illegible]

見に覚えの無い作り話にピツケルがどなる

その横ではナツチャンが涙を流していた

「やっぱり、貴方はロマンを撒き散らしているんだわ！」

「知らないよ！それに僕はロマンなんか撒き散らさないよ！（怒）」

ああ、またボケが増えた・・・そう思ってピツケルは頭を抱えた

「でも、これじゃ例の大事な物も取れずじまいですね」

レベツカがガクンと肩を落とす

「大事な物ってこれかしら？」

そう言つてナツチャンが胸のポケットから鍵のイミテーションを取り出した

それには鎧のマークが掘られていた

「何じゃこりや？」

「これって・・・鍵の偽者？」

「でも、こんなの仕えませんよ」

「きっと何かに使うんだろう！」
とにかく一行は鍵のイミテーションを手に入れたのであった

そんで一行はとある部屋に来ていた
其処はとても狭い部屋であり、一人が通るのがやっとな位の狭さ
であった

そして、通路の奥には一つの鍵が置かれていた

「ん？何だこれ？」

主室にクリスが取ろうとする
が、

「まてええええええええええい！」

ドカアッ！

「はうちゅうう！」

ジルの飛び蹴りを食らいクリスは吹き飛ぶ

「な・・・何すんの？・・・ジルさん・・・」

頭にタンコブをつけてクリスが立ち上がる

「あんたねえ！また変なのが作動したらどうするのよ！」
確かにジルの言う通りである

以前もクリスに変なボタンを押したばかりにカラスの糞攻撃を受け
る羽目になったのだから

（全段クリスが食らったが）

今回も何か不味い仕掛けがあるかも知れないので警戒を怠らないよ

うにした

ジルは先ほどクリスが興味を持った台座を見た

「これは・・・さっきナツチャンが持ってきた鍵と良く似てるわ・
・きつとコレが鍵なのよ!」

「へー、そうなんだ」

そう言ってクリスは鍵を取る

「あ!」

「え?」

またやらかしたなコイツは!

と言いたげな顔でジルはクリスを見た

すると、鍵の置いてあった台座が突如床に入っていく、後ろを西洋
の鎧が立ちはだかった

そして、来た道から何かが近づく音がしていた

「な、何ですか? このゴウンゴウンって言う音は?」

「あっちから聞こえるわよ!」

「これは・・・きつとロマンが迫ってきてるのね♪」

「絶対に無い!」

ナツチャンの場違いな言葉にピツケルは反論する

そして、音のする方を見ると、西洋の鎧が持った盾に取り付けられ
た鋭利な刃物が真っ直ぐこちらに迫って着ていたのだ

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ!」

ピツケル、ジル、レベツカは絶叫した

そりゃそうだ

あんなもんこんな狭い空間で食らったら間違いなく大怪我してしまう

「く、クリスううううううううううううううううううう! 早くその鍵を元
戻しなさいiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

「え~~~~、やだよ! これは俺が取ったんだから俺の鍵だもん!」

「一辺本気で殴ったろうかゴルァ! (激怒)」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiii! こ、こわiiiiiiiiiiiiiiiiiiii

その25（後書き）

次回、いよいよ仮面が揃ったのであそこに行きます
そして、いよいよアイツが出るぞお！

その26 (前書き)

今回ターボ男さんのキャラクターを使わせて貰いました
ターボ男さん。有難う御座います

「あれ？　そう言えばジョゼフさん達はどうしたんですか？」
「あり？　そう言えばあいつら何処行っただ？」

そう、今まで気づかなかったが、此処ホールに置いていた筈の原作
死亡者組の姿が何処にも無いのだ

「トイレじゃねえの？　きっとそうだよ」

クリスが気にせず言う

それに皆も「そうだよねえ」と、大して気にもしなかった
まあ作者も特に気にしてないので先に進む事にする

そして一向は墓場に出た
其処は夜なだけあってかなり不気味である

「ふえゝゝゝん、ジルさゝゝゝん！　怖いよゝゝゝ！！！！」
「うっさい！　黙れ！！」

抱きつこうとしたクリスにジルの正拳突きが決まる
そのままクリスは遙か後方にある天使が弓を番えた石版にぶち当たる
すると石版が壊れて地下に続く階段が現れた

「ア！ジルさん見て下さい！階段ですよ！」

「えゝ、私あんまり怖い話知らないんだよなあゝ」

「あのおゝゝ怪談じゃなくて階段ですけど（汗）」

レベッカがやんわりと突っ込む

「そうか！いやあしかし母さんはああ見えて夜は結構激しい方だなあゝゝゝ」

「誰がY談言えって言ったんですかあああああああああああああああ
ああ！怪談でもY談でも無くて階段ですよか・い・だ・ん！！！」

レベッカが強調して言う

「成る程、それじゃ早速あの階段を降りて見るか」

父（魔王）がマイペースに言う

「すみませんレベッカさんゝゝあんな父親のせいで苦労してしま
って」

「いえゝゝでもピッケルさんに比べれば大した事ないですよ」

お互いに言い合うピッケルとレベッカ

「どうでも良いけどさっさと行きましょう！きっとあそこにはロマ
ンティックな何かがあるに決まってるわ！」

と言いながらナツチャンはピッケルの襟首を掴みながら階段を下りる

「ちょ、イダダダダ！磨り減る！お尻が磨り減るよおおおおおお
おおおおおおおおおおお！」

涙を流してピッケルが叫ぶ
そんなピッケルの後をクリスとジルが続く

階段を降りた場所にはこれまた変な空間が漂っていた
壁には仮面を付けるであろう4つの顔が壁に掛かってあり、天井には棺桶が鎖に付けられていた

「これって・・・きっと此処であの仮面を使うんですよ！」

ピッケルが推測する

それにクリスが手をポンと叩いて納得する
因みに未だにパンツ一丁である

ってか、いい加減服着ろよお前！！

「とりあえず！父さんさっきの仮面をあの壁に付けようよ」

と言ってピッケルが父（魔王）を見た
其処には

「あ、それそれ♪」

「あ、ほくれほくれ♪」

父（魔王）とクリスはさっき手に入れた仮面をかぶって踊っていた

「って、何やってんだ二人ともおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

そんな二人にピッケルが突っ込みを入れる

「いい加減にしろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

すると、天井に吊るされていた棺桶から「バイオハザード2」に出て来た「リッカー」に良く似た生き物が飛び出してきた

「ん？誰君」

一同は出てきた生き物を見た

それに生き物は額に青筋を浮かべて怒鳴る

「俺はなあああああああああ！」「高速戦士 ターボX」に出ていた「リッカーボーマ」だああああああああああああああ！！！！」

リッカーボーマが大声を張り上げて言う

すると一同が一箇所に集まる

「なあなあ、あんなキャラクターXに出てたっけ？」

「さあ、出てなかったんじゃないの？」

「あれだよ、きっと作者が作ったオリジナルキャラじゃねえの？」

「そうだよ！だってあのキャラからはロマンが一滴も感じられない

もん」

「そうなんだ！で、どうするあれ」

「えっと・・・皆さん・・・リッカーボーマさん・・・凄く落ち込んじゃってますけど」

レベッカの視線の先では落ち込んで床で「の」の字を書くリッカーボーマが居た

それを見て父（魔王）が盛り上げる為にある一計を案じる

「ところで君、中々良い爪持ってるねえ、それって何でも斬れるのかい？」

その言葉を聞いて突如リッカーボーマの顔がパツと明るくなった

「おお！勿論だとも！俺様の爪に切れない物はこの世に無いぞお！」
「え？マジ？それじゃこれ斬れるの？」

と言って懷から取り出したのは「大根」だった

父（魔王）は大根を放り投げる

「あ、ほぐれ」

「はい、スッパスッパ♪」

空中に飛んだ大根をリッカーボーマは凄まじい速さで切り刻む
丸々一本だった大根は瞬く間に粉みじんになり下に置いてあったザルに入る

「お、おお！こ、これは・・・」

クリスは切り刻まれた大根を見る

「これは凄い・・・切った大根の一粒一粒が同じ大きさになってる！しかも断面が滑らかだ！無駄な力が一切入ってないからこんな切れ味が出るんだ！しかもこの味・・・生で食っても美味しい！！これこそ真の微塵切りじゃああああああああああああああああああああ！！！！」

クリスは大声で叫ぶ

ジル達はそんなクリスをとおりあえず無視する
しかしその切れ味は凄まじい物であった

「へえ、んじゃ次行くよお」

意気揚々と父（魔王）は懷に手を入れて物を取り出す

「人参！」

「あ、スッパスッパ」

「南瓜！」

「あ、スッパスッパ」

「金庫！」

「あ、スッパスッパ」

「車！」

「あ、スッパスッパ」

「超合金！」

「あ、スッパスッパ」

「ダイヤモンド！」

「あ、スッパスッパ」

「じゃあ、これ」

「あ、スッパスッパ」

その頃、何時もの待機組はと言うと

「おゝゝい、まだかゝ」

「早くしてくれよゝゝ」

「イヤアアアアアアアアハアアアアア！早くしろよおおおおお
おおお！」

「ウホウホウホホオオオオオオオオオ！！（次が控えてるんだよ
おおおおお！）」

4人は今扉の前に集まっていた
そして、扉の中には

「ウゝゝゝゝゝゝゝ、アゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」

と、ゾンビのうめき声が聞こえていた
因みに、扉には「トイレ」と書かれていた

その27（前書き）

今回ゲストが出演しますよお

その27

父（魔王）達はワープにより墓地下から一気に寄宿舍前に来ていたえ？何でワープなんて使うかって？

作画が面倒だからです！

という訳で話は始まりました

「久しぶりの話なのに何この展開・・・」

「まあそう言うなピツケル。これも作者だからこそ出来る仕様と言う物だろう」

「いや、それじゃ不味いから！」

何時ものように呟く父（魔王）に毎度の如くピツケルのツツコミが入り込む

「どうでも良いけど早く入ろうぜ！此処は寒くて適わないぜ！」

「って、あんたはパンツ一丁だからでしょうが！この馬鹿クリス！」

相変わらずパンツ一丁のクリスにジルのツツコミが入り込む

「あのお、そろそろ入りませんか？」

「そうよ！きっと此処には何かロマンが眠っている気がするわ！」

「ナツチャン・・・久しぶりだったのにテンション高いね」

ハイテンションな皆の中一人テンションが低いピツケルであった

と、言う訳で一同は寄宿舍の中に入る

中は木造であり時代を感じさせる作りをしていた

・・・と、聞こえは良いが要するに「ボロい」のだ

所々木は腐敗してるし何か虫は飛び回ってるしあちこちではゾンビが一升瓶片手にうわ言を呟きまくってるしともう散々な光景である

「なあんだ。あんまりロマンが感じられないわねえ・・・つまんないの」

どうやらナツチャンのロマンセンサーには此処にはロマンが眠って居ないと言う結論に達したらしく急にテンションが下がってしまった

「とにかく何処か落ち着ける場所探しましょう。此処だと何かゾンビ臭いし」

「そうだなあ、すぐとなりじゃゾンビが苦しそうだし・・・って、おい大丈夫か？」

クリスはすぐ其処で猫背になり苦しそうにしていたゾンビの背中を叩く

するとゾンビは元気になり襲い掛かってきた

折角介抱してあげたのに顔面に思いつきり殴られた跡を作ってしまった上に他のゾンビがやってきて思いつきり胃酸を吐かれて散々な目に会ったクリスであった

「ねえジルさん・・・どっかに着替えとか無い？俺もうこの格好やだ」

「そうねえ、これ以上あんたの裸なんか見たくないし、とりあえずあそこの部屋とか良いんじゃない？」

と言って皆は部屋に入っていく

其処は運良く普通の部屋であり其処には服一式とシャワーがあったオマケとしてベットやテーブルにテレビに任○堂6○にお菓子など

が置かれていた

「お！結構良い部屋だなあ」

クリスは早速ゾンビから食らった胃酸を洗い流す為にシャワーを浴びる

因みにサービスシーンは無しですよ奥さん

「はあ、何か私疲れちゃった。少し休むわ」

「それなら私もこの馬鹿を置いて行く訳には行かないから残ってるわ」

「私は薬の調合を行っていますね」

と、言う訳でクリス、ジル、レベッカ、ナツチャンが部屋に残る事になった

「よし、それなら私とピツケルの二人で探検をしようではないか」

「はあ・・・何か二人で行くのも久しぶりだなあ」

何処か嫌な予感を思いながらも渋々付いて行く事になったピツケルそして父（魔王）と共に寄宿舎の中を探検する事になった

まず一つ目の扉を開けた際に二人の目に飛び込んできたのは巨大なバーであった

「ほほう、これまた洒落たバーですなあ」

「そうだねえ、って・・・うん？」

見るとその視線の先では巨大な蜘蛛が八本の足で綺麗に雑巾掛けをしていた

と言うけど決してビリヤードのキューで殴りあうとかそう言うのではなく純粹にビリヤードで遊んでいたのだ

「うゝゝあゝゝ（さて、次の相手は誰かな？）」

一体のゾンビが慣れた手つきでキューを構えてみていた

「次は俺が相手だゾンビ野郎！」

と言って零斗がキューを構えて玉を弾く
弾いた玉が狙い通りに穴に向かっていく
だが、

「うゝあゝ（まだまだだね！）」

ニヤリとしたゾンビが玉が入ろうとしていた穴に蜘蛛の卵を入れる
そのせいで玉が穴に入らずそのまま元の位置に戻ってしまった

「ちっ！まさかこんな手があったなんて！」

「零斗さん！このままじゃヤバイですよ！」

「くそお！元の小説ならボッコボコにしてやれるのにこれが100
%ギャグ小説な上に残虐表現禁止だって言うからやり難いぜ」

そう、彼等の言う通りこの小説では残虐表現は禁止しているのである
ついでにムフフなシーンもありません
それを期待していた読者の方々・・・残念でした

「うゝうゝあゝあゝ（どうしたんだい？僕にビリヤードで勝つつも
りじゃなかったのかい？）」

ゾンビが明らかに挑発していた
それを見て二人の額に青筋が浮ぶ

（調子に乗りやがってこのゾンビ野朗）

間違いなく二人が居る小説であつたらこのゾンビは只ではすまなかつただろう

その横では流しのゾンビが歌っていた
しかしゾンビなので歌は全て

「うゝうゝあゝあゝうゝうゝあゝあゝ♪」

本人はノリノリのつもりらしいがハッキリ言つて聞いてもらえない

「おお、あれは世に聞くビリヤードではないか！懐かしいなあ」

「え？父さんやった事あるの？」

「おいおい、父さんは若い頃はスペシャルハスラーテツと呼ばれて
いたんだぞお」

「初耳だよそれ」

その通り、だって今書いた設定だもん

「いい加減にしてよ馬鹿作者」

五月蠅いよこの野朗！その主役の称号を剥ぎ取って只のヤラレ役に
してやろうか？

「うゝ、久しぶりの話なのにまたこの扱い？」

相変わらず嘆いているピツケル

まあこいつ主人公なのに影薄いから仕方ないよねえ

「ねえ、主人公なのにこの扱いって酷くない？」

「それがイヤなら強くなれピッケル」

そんな事を言って父（魔王）は零斗と亮のプレイしているビリヤード台に向かった

「うん？お前は誰だ？」

「私はこの小説の主人公であるピッケルの父の魔王だよ」

「ど、どうも・・・」

父（魔王）に紹介されてピッケルは多少恥ずかしがりながらも挨拶をする

「何だ？主人公の割りに地味だなあ」

「そうですねえ零斗さん」

「ひ、酷い・・・」

二人の率直な意見にピッケルは涙する

「ところで二人とも苦戦中みたいだねえ」

「ああ、あのゾンビ野朗中々手強いんだよ」

零斗が苦虫を噛み潰したような顔で言う

「成る程、なら私に任せなさい」

「って、あんたビリヤード出来るのか？」

「フッフ、それでも昔はスペシャルハスラーテツと呼ばれていた位だからなあ」

「凄い自信ですねえ」

亮が感心する

「うし、なら頼む。本来ならあんな奴コルトパイソンでぶつとばしたいんだがこの世界だと残虐表現が出来ないから結構辛いんだよなあ」

零斗が苦い顔をする

「ハッハッハ、まあこの私に任せなさい」

（（大丈夫かなあ、こんな魔王っぽい人に任せても？））

二人は些か公開していた

そんな中、父（魔王）の前ではゾンビが早速玉を弾く
弾いた玉は狙い通りに全ての玉が穴に入って行くコースを取っていた
だが、

「甘い！」

と言って天高く跳びあがる

そして何とビリヤードのキューを台のど真ん中に投げつけたのだ
するとどうだろうか。

台は真ん中からひしゃげてバラバラの粉々になってしまった
これでは穴に入ったかも分からない状態なのだ

「う！う！（ま、まさかそんな手があったとは・・・僕の負けだ）」

潔く負けを認めたゾンビがその場にしゃがみこむ
そしてそれを見ていたピッケルは

「何処がビリヤードだあああああああああああああああ
ああああああ！」

と、盛大にツッコミを入れたそうである

その27（後書き）

次回もゲスト登場の予感が・・・

その28（前書き）

そろそろバイオ編も終りに近づくかな？

その28

ビリヤードで大勝を飾った父（魔王）は上機嫌でバーに座っていた手にはキラリと輝くロックの氷とグラス、そしてその中に並々と注がれてるお酒があった

そのグラスの隣にはつまみとして子蜘蛛のから揚げがあった

どうやら掃除の蜘蛛がボトボトと産み落とすらしいので邪魔らしく店主が頭に来てから揚げにしてみましたらしい

だが、これが食ってみると中々美味なのだ

しつかり味のついた海老である

これは美味い

そしてその隣では

「・・・・・・・・」

終始無言で座っている我等が主人公のヘッポコ勇者「ピッケル」が座っていた

因みにピッケルは未成年と言うかガキなのでグラスには牛乳が注がれている

「どうしたピッケル？黙り込んでるじゃってらしくないぞ？」

「ねえ父さん・・・僕今日の前に居る人どこかで見た事あるんだけど・・・」

ピッケルはそう言って目の前でカクテルを作ってるバーテンを見た確かに何処かで見た事がある

そんなバーテンはピッケルにノンアルコールのジュースのカクテルをそっと差し出す

「どうぞ、俺のオリジナルのミックスフルーツカクテル（仮）です」
「何で仮？」

「ノンアルコールだから」

ピッケルの問いにバーテンは簡単に返す
そう言ってバーテンは再びシャカシャカとカクテルを作り出した
すると後ろの扉を開けて入ってきたのは

「あら、貴方達まだ其処に居たの？」

「あ、ジルさん達だ！」

振り返るとジル、レベッカ、ナツチャン・・・そして何故か黒の全身タイツを着たクリスが居た

何故クリスはまともな服装をしないのだろうか？

正直問い正したい

小一時間問い正したい

まあそんな思いは抜きにして

「それで皆さんどうしたんですか？」

「クリスが丁度服を見つけてね、それで追いかけてきたのよ」

「服って・・・あれがですか？」

ピッケルは遭えて見ずに指だけクリスの方を向けた

それはピチピチの黒の全身タイツのスーツである

体のスタイルがでまくりである

はつきり言ってこんな服装を選んだクリスの思考を疑わざるを得ない状況なのだ

そんなクリスはふと目の前に居るバーテンを見た

「ところでよお、お前バリーじゃないのか？」

「よお、クリスマスじゃねえか・・・って、お前なんて格好してるんだ？」

出会ったの第一声がこれである

それには流石のクリスマスもずっこけてしまった

「なんだよお！俺のナイスなチョイスの服に文句をつけるなよお」

「何処がナイスだ！どう見てもチョイスミスだろう！」

「何処がだ！これなら俺の肉体美も見えまくりじゃないか！」

と言ってポーズを決める

しかしそれに対しジルとレベッカは視線を逸らした

余程見たくないのだろう

「ところでよお、何でバリーが此処でバーテンやってんだ？」

「バイトだ」

「バイトですか？」

「ああ、此処の店主に頼まれてなあ」

そう言ってバリーは親指を店主と思われる奴に向ける

そいつは言うまでも無くゾンビであった

所々腐食して瞳が濁った目をしたゾンビが新聞を読んでいた

「うゝゝあゝゝ（おらバイトオ！サボってると給料払わねえぞ！）」

「うっさい！」

口やかましいと思ったのか懷から愛銃であるマグナムをゾンビの頭に向けて放つ

弾丸が命中しゾンビの頭には巨大なタンコブが出来上がりそのまま延びてしまった

それを確認するとバリーはバーテンの服装を着替えて普段の防弾服に着替える

「さて、バイトも終わったし俺も探索に参加するのでしょうか」

「ほほう、流石だねえゾンビの頭を一発とは」

「いや、あれ軽く犯罪じゃないの？」

感心する魔王の横で青ざめた顔をするピッケル
そりやそうだろう

何故なら普通ならマグナム弾を食らえば頭が吹き飛ぶ筈なのだ
しかしこの小説はあくまでギャグ小説なので暴力シーンやグロテス
クな表現は全く含まれないのだ
その為マグナム弾で敵を撃つても頭が吹き飛ぶ事は無い
それはこの世界では当然の事なのだ

「それで、これから何処に行くんですか？」

「うむ、ならいつその事下に向かうか」

と言って父（魔王）は再び角を抜いて今度は地面に突き刺す
するとその角を中心にしてピッケル達の真下に巨大な穴が出来上
った

「え？」

「下へ向かいます」

父（魔王）の何気ない一言により緊張感が台無しになった気がするがピツケルたちはそのまままっさかさまに地下へ落ちてしまったのであった

[illegible]

あああああああああああああああああああああ！』

皆は叫び声を上げる

そしてそのまま落ちていった先は・・・何故か巨大な水槽のような場所であった

因みに水浸しである

「うわぁ、胸まで水があるよ」

「子供の私達にはコレ位なのね」

ピッケルとナツチャンは胸まで水に浸かっていた

そしてクリス達は大人なので腰までであり父（魔王）は背が高いので膝位しか浸かっていないのだ

すると、そんな一同の目の前にはあのリチャードが楽しそうに踊っていた

「何やってんだ？リチャードの奴？」

バリーはさっぱり分からず首を傾げていた

すると、そんなリチャードの後ろには巨大なヒレのような物が迫ってきていた

それを見て皆が何だろうと思っていた矢先であった

突如ガバアとその背びれの正体が現れた

それは巨大な鯨であった

巨大な鯨はリチャードを咥えてそのまま水中に帰っていった

「り、リチャード！」

バリー達はすぐさまリチャードが食われた箇所を見た

すると、巨大な鯨が突如また現れてペツとりチャードを吐き出した

そしてそれはバリーに命中する

「ガハアッ！」

見事に脳天にリチャードを食らったバリーはそのまま倒れる
そしてリチャードはと言うと

「〜♪」

呑気に鼻歌を口ずさみながら悠々と部屋を出て行った

鮫に食われたと言うのに何と言う生命力であろうか

すると鮫が突如苦しみ出したかと思うとそのまま仰向けになってプ
カプカと浮かび上がってしまった

するとそれに続いて小さい鮫も続々と浮かび上がってきた

「え？な、何で浮かび上がるの？」

「恐らくリチャードを食べたせいでお腹を壊したのだろう」

「父さん、普通人間を食べただけで鮫って死ぬの？」

「さあ？父さんは食われた事よりも食べた事しか無いから良く分か
らないなあ」

「食ったって・・・鮫を？」

ジルが恐る恐る聞いてきた

それに父（魔王）が頷く

「勿論、ちょっと臭みがあったけど中々美味だったぞお」

「って、鮫を食べるってつくづく貴方は凄いわねえ」

流石のジルも呆れるだけであった

「さて、そろそろこのバイオ編ってのも飽きてきたしそろそろ場所移すか」

そう言う父（魔王）は何も無い空間に自身の角を突き刺す
すると目の前の空間が歪みその目の前にはなにやら研究室のような
空間が見えた

「よし、それじゃ皆でジャ〜ンプ」

「なんじゃそりゃあああああああああああああ！」

盛大にピッケルがツツコミを入れる
物語はいよいよクライマックスに突入

「只作者が面倒臭がつてるだけじゃん」

うつせえ！

その28（後書き）

いよいよ次回は研究所ですよ
色々はしよって申し訳ないです

その29（前書き）

お待たせして申し訳ない
今回でバイオ編は終了です

その29

父（魔王）の使った角により一向は何と洋館内にあったと思われる研究所の来ていた

「あ、こんな所に羊羹が！」

見つけたのはクリスマスである

クリスマスはその場に落ちていた羊羹を手に取り何の迷いも無く口に放り込んだ

少しは躊躇と言う物が無いのだろうかこいつにはつくづくそう思えてくる

「でも父さん、こんな所に一体何があるの？」

「さあ？」

父（魔王）は肩を上げてそう言った

それを聞いて一同がズッコケル

「と、父さん！それじゃ一体どうして此処に来たの？」

ピッケルが父（魔王）に聞いた

それに対して父（魔王）の言った一言は今でもピッケルの胸に突き刺さっていた

「気分」

「気分かいいいいいいいいいいいいいい！」

今回一発目のピッケルのツツコミが炸裂した

「でも、此処にはきつと何か重大な物がありそうよ」

「ジルさん、それって一体どんな物ですか？」

レベッカがジルに聞く

「きつと此処には何か重大な情報がある気がするわ」

「重大って何？俺のプロポーションとか？」

「一辺頭がち割ったろうかい？この馬鹿」

そう言ってジルが自身の持っていた拳銃をクリスマスの額に押し付けたそれに対しクリスマスが青ざめる

「とにかく何か探しましょうよ」

「そうね、きつと何かロマンがあるに決まってるわ」

「ナツチャン・・・あんたは何時もそうなんですわ」

ナツチャンの相変わらざるのロマンズ酔狂っぷりに呆れるピツケル
しかしまあそんなこんなで一同は研究所を歩き回った

途中研究員のゾンビが現れたので道を聞こうとしたが噛み付こうと
したのでその辺に放り投げておいたが

そして一向はとある地下部屋に来ていた

其処はどうやら牢屋であった

そして牢屋の奥の扉には

「え・・・エンリコ隊長!」

「おお! クリスにジルにレベツカにバリー! 助けに来てくれたのか
?」

「隊長どうして此処に?」

「それが・・・突然緑色の化け物が現れたと思ったらいきなり此処
にぶち込まれたのさ・・・こいつらも一緒に」

そう言つてエンリコが指差すと其処には先の洋館で出会った残りの
メンバーが全っていた

しかもそのまま

ジョゼフは相変わらず頭がはっちゃけているしケネスは暗いし、リ
チャードは踊り狂ってるし、フォレストはゴリラだし

とりあえず喧しい面々が居た

「待ってて、すぐ開けるから・・・って、コレノブが無いわね」

「それなら私に任せておきたまえ」

そう言つて父（魔王）が扉を調べようと手を添えた

ところが、扉はその直後バキィと音を立てて壊れてしまいそのまま
開いてしまった

「あ!」

一同が声を上げる

その中父（魔王）は

「やっちゃった」

と言ってテヘツとした顔をした

しかしそれを見ていたエンリコは青ざめていた

「お・・・おい、誰こいつ？」

「えっと・・・魔王です」

返答に困ったジルがそう言った

しかしそれで納得出来るものなら世の中説明など要らないのだ

その証拠にエンリコはパニックを起こしそうになっていた

「おい！何で魔王が居るんだよ！ってか、何で俺が牢屋なの？普通お前かクリスのどっちかだろ？幾ら何でも作者の奴手抜きしすぎだろう？」

口々に酷い事を言うオッサン

しょうがないのだ、もうこれだけで話しを作るのも限界が来てるのだ
そろそろ終らせたいのだ

ってな訳でこれから先色々あったがはしょって行きます
その道中であつたのをハイライトでお送りします

此処研究所に来てから起こった事

・皮を剥いたゴリラみたいな怪物、名前「ハンター」が必死にジグソーパズルをやっていた

・研究員ゾンビ四匹が机を囲んでマージャンをしていた

・ニトロを運ぶミッションで転んだ拍子に倒してしまい爆発してしまった事（全員アフロヘアー化）

・ニトロを零してしまったので代わりに父（魔王）の角をバッテリー代わりに入れたら起動出来た事

・リチャードが頭から火が出る程踊り狂っていた事

・蠅みたいな怪物「キメラ」が天井から落ちてきた事

・ケネスの頭に毛が生えた事

・ナツチャンが新たななるロマンを探して歩いていた事

・クリスが再び下着姿になった事

- ・レベッカが回復アイテムを見つけた事
- ・ピッケルがゾンビ数匹をひのきの棒でやっつけた事

等等など書いてたらキリが無いのでこの辺でお開きにさせて頂く

そして一同はとある扉の前に来ていた

其処は二枚扉であり足元には「生物災害」を英語で書いた文字の書かれたカーペットが敷かれていた

そしてその前には銃を構える男が一人立っていた

その男は

「ウェスカー」

ジルが名を呼ぶ

するとクリスが涙目になる

「隊長！無事だったんですねえ！」

「嫌、其処は察しろよ！俺こうしているんだから裏切り者なんだよ？それ位分かるだろ？」

「え？マジ？それって本当なんスか？」

クリスが信じられない顔をして聞いた

それにウェスカーが頷く

「隊長、何故スターズの壊滅を？」

「いや、ジルさん・・・俺ら殉職者一人も出てないんですけど？」

ケネスがやんわりとツツコミを入れる

その通りであつた

通路にはスターズメンバーほぼ全員が勢ぞろいしていた

ハッキリ言つて狭い

そんな一同にウェスカーが言う

「まあ理由はあるんだけど私の口から話すと面倒だから作者さんよろしく」

ほい任された

では説明しよう

ウェスカーは本来アンブレラの研究員であつたそうだ

しかしこの洋館の研究主任及びスターズ隊長になつた際に事故が発生した模様

それでスターズが調べに来たのでお偉いさんが「こいつらに色々知られちゃうと不味いんで始末してね♪」ってな感じで命令が下つたので実行する事にした

しかしその際に手土産を手にしたその組織を離脱しようと考えたウェスカーは此処にある最高傑作を使う事にしたそうである
そしてその最高傑作が・・・

「これだ」

ウェスカーが一同を招き入れて見せたのはカプセルの中に浮ぶ奇妙な怪物であつた

体中血管が浮き出ており心臓は丸見えである

そして何よりすっぱだかであった

「寒くないのかしら？」

「嫌、ナツチャン・・・突っ込む所違うから」

ナツチャンのクールなボケにピッケルが突っ込みを入れる

そんな一同を無視してウェスカーが装置を操作する

「さあ、目覚めよタイラント！そして此処に居る奴等をメツタメタにしてやれ」

因みにこれはギャグ小説なので暴力的言動は控えさせてもらってます

そんなこんなで一同の前ではタイラントと呼ばれた怪物の入ってる

カプセル内の液体が無くなりタイラントは目を覚ました

恐らくガラスを叩き割るのだろうと思えたのだが違った

タイラントはガラスのケースをパカッと開いて降りるとピッケル達・

・・・には向かわずウェスカーが操作した装置をまた操作する

そしてカプセルの中に戻りガラスのケースを閉める

そして懷に持っていたマジックペンでガラスにこう書いた

『もうちょつと寝かせて』

そう書いて再びタイラントは眠りに付く

するとそんなタイラントの居るケースを再び液体が並々に満たしていく

一同に沈黙が生まれる

すると、その沈黙を破ったのは勿論ウェスカーであった

「嫌、起きろよおお！何後五分的な言い分してんじゃコラァ！さっさと起きてこいつらぶちのめせやゴラァ！」

叫びながら装置を操作する

するとまた液体が抜け落ちる

するとまたタイラントがガラスのケースを開く

すると今度はウェスカーに歩み寄る

その顔は明らかに不機嫌であった

「お・・・おい！こっちじゃないぞ！あっち・・・あっちだつてば！」

ウェスカーが必死にクリス達を指差す

が、そんなのお構い無しにタイラントはウェスカーを掴み上げる
するとそのまま遙か上空彼方に放り投げた

「あ~~~~~れ~~~~~！」

ウェスカーはそう叫びながら遙か大空に向かって飛んで行き星にな
ってしまった

しかしタイラントの怒りはまだ収まってないらしく今度はクリス達
を睨む

「今度は私達がターゲットみたいね」

「そ・・・そんなぁ」

自分達が狙われてると言う事を知ってレベツカは恐怖した
だが、それとは逆にクリスが前に出る

「上等だ！どっちが美しいマッスルか勝負しようじゃねえか」

そう言つてクリスがタイラントを指差す

するとタイラントは頷く

すると何処から現れたのか部屋の中に巨大なステージが現れた

其処には「第一回マッスルグランプリ」と書かれていた

「何じゃこれはあああああああ！」

はい、これピッケルのツツコミね

そんなこんなでクリスとタイラントのマッスル勝負が始まった

次々と二人がステージの上で肉体美を披露する

因みにタイラントは衛生上の都合と言う事でブーメラnpantを履
いている

因みに審査員はゾンビ、ハンター、キメラ、ヨーンの四匹であった
そして結果は

『クリス・レッドフィールド 50PT タイラント 50PT』

結果、引き分けです』

審査員のクリムゾンヘッドがそう言う
こうして二人の熱い戦いは幕を閉じた
二人はステージの上で熱い握手を交わす
しかし、ハッキリ言おう・・・どうでも良いのだ

やがて、屋上に出た一同をブラッドの操るヘリがやってきた

「皆無事か？」

「お！あれで脱出するんだな」

父（魔王）がヘリを見ながら呟いていた
そして降り立ったヘリに一同は乗り込む

しかし其処で問題が発生した

「済まない、スターズメンバーが全員（？）生存してるせいか後一人しかヘリに乗れないんだ」

ブラッドが申し訳なさそうに言う

因みにスターズメンバーは全員乗り込んでおり後乗ってないのは父（魔王）とピッケルとナツチャンの三人であった

どうしようかと悩んでいると父（魔王）が思いも寄らない発言をした
「ナツチャン、君が行きなさい。私とピッケルは徒歩で此処を離れるから」

「え！ちょっと待ってくれよ！あんたら外の状況分かってるのか？

あの化け物犬だらけなんだぞ！」

父（魔王）の強さを知らない連中がそう言うが父（魔王）は胸を張って言う

「心配ない！何しろ私は魔王だからな」

（な、何か納得できる）

一同がそう思えた

「ちょっと待ってよ！それじゃ僕はどうなるの？僕も徒歩になるの？」

「ピッケル、良く考えろ！私達は冒険の為にこうして旅をしてるのだろう？なら丁度良いじゃないか。また旅をしようじゃないか！それおれ行くぞお！」

「ちょっと待って・・・ってうわああああ！」

父（魔王）はピッケルの制止を聞かずに彼の首根っこを掴んで屋上から飛び降りた

そして見事に着地する

するとそのまま真っ直ぐ何処へとも当ての無い旅を再会するのであった

途中犬が襲ってきたが物の見事に返り討ちにしていた

それを見ていたスターズ一同が青ざめる中、ナツチャンを乗せたヘリが悠々と空に舞い上がっていった

暫くして父（魔王）は館の方を振り返った

「もう良いかな」

そう呟くと自身の角を取って角の折れた部分を親指で深く押し込んだ
すると目の前の館が突如

『ズズウウウウウウン』

と、ド○フ顔負けな位見事な勢いで崩れて瓦礫の山になってしまった

「え？何？何したの父さん」

「ああ、念のために誤爆スイッチをあの中に仕込んでおいたのさ」

「何故誤爆？ つか自爆じゃないの？」

ふとそうツツコミながらピッケルと父（魔王）は再び当ての無い二人旅を始めた

これからどんな冒険が待っているのだろうか

そんな期待と不安にピッケルの心は躍っている・・・訳ではなく

「早く帰りたいなあ」

と、切ない願望があったのであった

バイオ編

終

その29（後書き）

次回は作者オリジナルの冒険編に突入です
暫く作者路線で行きますので多分ゲストとかは出ない方針です
では

その30（前書き）

いよいよ冒険編開始
どんな冒険が待っているのか？

その30

父（魔王）とピッケルが謎のウィルス（なんだっけ？）を作っていたっぽい洋館をドリフばりの勢いで崩壊させてから既に三日経っていた

既に父（魔王）とピッケルは森を抜け出し新たなる進展地へ旅立ち・
・・・え？まだ！

し、失礼しました！父（魔王）とピッケルの二人はまだ森の中を歩いていた

しかも何故か父（魔王）は楽しそうに歩いておりその口からは鼻歌が混じっていた

しかし、それとは対照的にピッケルはこの世の終りを思わせる顔をしていた

それもその筈・・・何故ならピッケルは三日間連続で歩きっぱなしであったのだ

その為彼の疲労は既にピークに達していたのであった

「と・・・父さん・・・一体何時まで歩くの？」

「勿論！森を出るまでだぞお我が息子よ」

それから更に三日後

「・・・・・・・・」

すっかりゲンナリしてしまった我等がピッケルくん
比べて父（魔王）は未だに元氣一杯でした

「ふゝむ、しかしそろそろ森を歩くのも飽きて来たなあ」

悠然と森を歩く父（魔王）がそう呟く

そっちは飽きの問題なのですか？こっちは既に生命の危機にまで
展してるのですが・・・

最早今のピッケルにツッコむ体力も氣力も残っていなかったの
であります

「んじゃさっさと出るか」

「ど・・・どうやって出るの？」

「簡単簡単。私に捕まりなさい」

ピッケルは多少不安になりながらも父（魔王）にしっかりと捕
まる

そして
「んじゃ行くぞお！『父さんは飛べるぞジャアアアンプ！！！！』」

「ぎゃああああああああああああああ！！！！」

ピッケルは叫んだ

何故か？

そりゃ勿論だろう

突然物凄いスピードで空に舞い上がったのだから
下には先ほどまで歩いていた森が見える

その上を父（魔王）が猛スピードで飛んでいたのだ

「ととととさあああああああ！一体これ何キロ出してるのお
おおおお！」

「ハッハッハ！私にかかればマッハ200なんて朝飯前さ」

「ま、マッハ200うううううううううう！」

「ウル○ラマンも余裕で抜けるぞお」

そう言って父（魔王）は嬉しそうな顔になる

余程嬉しいのだろうが、反対にコチラはいい迷惑である

そして、二人が降り立ったのは丁度森の終りであった

「あれ？ マッハ200なんだからもつと行ける筈なのに？」

「御免、勢い余って地球を10週しちゃったんだよ」

「うっぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

森を抜けた辺りにピツケルのツツコミが木霊する

此処から始まる大冒険

果たしてそれはどんな冒険になるのか？

そしてピッケルは本当に勇者になれるのか？

「だから僕はなる気は無いって言ってるじゃないかあああああああああ
あああ！」

はいはい、それじゃ次回もお楽しみにい

その31（前書き）

今回久しぶりにあそこへ行きます

その31

森を抜けて僕と父さんは暫く真っ直ぐな道を歩いていた

その道中で勿論戦闘は多少あったのだが、その度に僕がマジメに倒し、父さんはふざけ半分に倒してしまった

だって父さん強すぎるんだもん

何時だったかレベル5000はあるって言ってた気がする

でもそれは最初の話・・・

父さんは日々レベルアップしてるんです

しかも最速ジェット機並のスピードで

父さんに至っては「皆のレベルアップが遅いからそう見えるだけだよ」等と言ってはいますがハッキリ言います

あんたが強すぎるんだよ。あんたに勝てる勇者は世界中探しても多分居ないよ。うん、断言出来る

しかし問題なのは僕自身だ。僕も父さんほどでは無いがレベル30はいってる。だが、この物語は色々横道が入ってしまいやと本道に入ったのだ

つまり今はまだ序盤の序盤なのだ。それなのにこんなにレベルがあつて大丈夫なのだろうか？否、大丈夫じゃない。現にこうして戦っている間も妙に物足りない感じに襲われていたのだ

そう、僕の村の周辺には激強モンスターがウジャウジャ出るのだが、一歩外を出ると出てくるのは雑魚モンスターばかりなのだ。これではレベルなど上がる筈が無い

しかも敵の数も微妙なので益々レベルが上がり辛い状況なんですこのままだと父さんとの差が益々開いてしまう。どうしよう

あ、因みに依然父さんのレベルを計ったんですが・・・レベル70000ってました。何時の間に2000もレベル上がったの？父さん

そんなこんなで僕と父さんは無事に次の村に辿り着いた
村の入り口には木で作られた看板があり其処には「アジナ村」と掘られていた

アジナ村って・・・どんだけ適当なネーミングなんだよこの村は・・・
つくづく僕はそう思えました

しかし村なのだからきつとフカフカのベットに暖かい食事が出来る
のだろうと僕のテンションはヒートアップしていました

しかし・・・一步村に入ってみるとその思いは急速に冷めました
見ると村一面がドス黒い雲に覆われていてしかも村人の皆お先真っ
暗な顔してるんです。まるで死人の村でした

側から見てると凄く不気味です。何故こんなに皆暗いオーラを出し
ているのでしょうか？僕はふと父さんを見ました

父さんは別に気にして無いのかそのままの顔です。少しは驚いたら
どうなんですか？一瞬本気で父さんの足を蹴ろうと思いましたが止
めました。反撃が恐ろしいからです

今の僕では父さんのデコピン一発でさえ致死量になりかねないので
す。下手に刺激しないに越した事はありません

そう考えていると僕達の方に一人の老人がやってきました

顔はしわくちゃで頭は残念なくらいに禿げていて小さな丸眼鏡を掛
けてて木で作った簡素な杖を使ってヨロヨロとこちらに歩いてきます
・・・ですが、その速度が残念なくらいに遅い！カタツムリの方が

早いぐらいです。いらだって僕が先に前に出ようとしたが、その時突如後頭部に激しい痛みが走りました
見ると父さんが拳を振り上げていました

「冒険物足るもの長老が来るまで待つものだぞピッケル」
そう言ってきたのです。ですが、この父さんの一撃は僕のHPを余裕で全部奪ってしまいました。その為僕はその場に倒れこみ意識を失ってしまいました。すると此処でまた父さんのセリフが聞こえてきます

「おお、ピッケルよ。死んでしまうとは情けない」
あんたのせいだよ！ってか、僕死んでないからね！

目を開くと其処は一面真っ暗でした

これまた懐かしい死後の世界と言った所です

本当に此処に来るのは懐かしいです。出来れば二度と来たくなかったのですが

ゆっくりと起き上がって回りを見ました。ですが回りには僕以外誰も居ません

一体どうしたのでしょうか？

「誰かー、居ませんかー」

僕は大声で叫びました。もしかしたら誰か叫び返してくれるかも知れないと思ったからです

すると突如僕に向かって聞き覚えの無い声が聞こえてきました

『何でも呼べば返って来るなんて考えるんじゃないやねえぞバカヤロー』

一体誰でしょうか？僕自身聞き覚えの無い声です。でも不思議な事に何処か親しみのある声でした

重みがあるのに妙に軽い、それでもって渋く見えて実は渋くない

まるで渋い柿のような声・・・って、其処で僕はハツとした

渋い柿・・・渋柿・・・しぶかき・・・しぶがき・・・s i b u g

a k i

「って作者じゃねえかあああああああああああ！」

『ご名答、今回は俺が一緒だぜ、嬉しいだろこの野郎』

そう言って僕の前に現れたのは線だけで描かれた棒人間でした。作者さん、幾ら面倒だからって自分を手抜きにするのはどうかと思いませんよ

「それで、何しに来たんですか？作者さん」

『ん？別に用は無い、只暇だったから来ただけえ』

そう言って棒人間は消え去った

一体何がしたかったのだろうか？今となってはもう確かめる事すら出来ないのが現状でした

その31（後書き）

次回はアジナ村を舞台に父と息子が冒険します
では

その32（前書き）

今回、父さんが少しだけ怒ります

その32

目を覚ますと其処は家の中だと直ぐに分かった。そして自分がベツトに寝かされている事にも分かった。そして・・・直ぐ隣で父さんが食い入るように見ているのにも気づいた

当然僕は驚いて声を上げて飛び起きた。普通はそうである。皆さんも想像して欲しい、朝起きて目の前にへ○口並の怖い顔があったらさぞ驚くだろう。下手したらショック死してしまう危険性すらあるのだ

しかし、このお方、そんな心配など微塵も感じないのか笑っています。本当に笑っています。

「おお、やつと目を覚ましたかピツケルよ」

父（魔王）は嬉しそうに目覚めたピツケルを見た

しかし顔が顔だけに怖いの一言でしか言えないのは事実であり

「と・・・父さん・・・此処は？」

「うむ、どうやら優しい長老様が我等に部屋を貸してくれたのだぞ」と、父（魔王）は誇らしげに言う

いや、あんたが威張る事じゃないだろうに
そう思っていた

すると部屋の扉を開き一人の老人が現れた

先ほどの頭が残念な事になつてゐる老人であつた

「おや、目を覚ましたようですねえ」

「うむ、長老のお陰ですよ。感謝します」

「いや、ワシ長老じゃなくて村長なんじゃけど」

さらりとボケた父（魔王）にこの老人はやっぱりとツツコミを入れる
あんた凄いよ爺さん

「いやあ、これは失敬だったねえ酋長」

「いやいやいや、だからわし村長ね。間違えないでね」

「分かったよ曹長」

「つてか、此処にも魔王がいるんですけどね」

そう言って僕は父（魔王）を見た

すると突如村長が青ざめた

「ヒイヒイヒイヒイ！ ああああああんたああああ！ ままま魔王だったのおおお！」

村長はその場で尻餅について血の気の引いた顔で父（魔王）を見ていた

そんな村長に向かって父（魔王）は笑顔で手を振った

だが、ハッキリ言おう・・・滅茶苦茶怖いのだ・・・顔が

と、まあそんなこんなでヘッポコ勇者ピッケルとチート魔王のお父さんは二人して村から出てすぐ隣にあった魔王城の前に来ていた因みにどんな呪いかと言うと・・・終始真っ暗になる呪いであるその為みんなお先真っ暗な顔になっているのである

そんな訳で二人は今魔王城の扉の前に来ていた

大きさはかなり大きい

しかも豪華に二枚扉である

「大きい扉だなあ」

「うむ、きつとこの城に住んでる魔王は大物である気がするぞお」

父（魔王）は戦慄っぽいセリフを言っていたが顔は相変わらず余裕そのものであった

とりあえず城の中に入ろうと扉を押したが・・・案の定の如く扉は

ビクともしない

勿論引いても駄目であつた

「駄目だ、父さん・・・この扉開かないよ」

「本当かい？どれどれ・・・」

それを見て父（魔王）は扉の底を持ちゆっくりと持ち上げた
するとその扉はシャッターの如く開いたのであつた

ってか、シャッターだったのであつた

「そういう開け方だったのおおおおおおおお！！！！」

案の定の如くピッケルのツツコミが炸裂した

とまあそんなこんなで開いた城の中を二人は無断で入っていくのであつた

当然そんな輩にはお城の警備をしていたモンスターが問答無用で襲い掛かる

んが、

「とりゃあ！」

流石レベル30の勇者、そんじよそこの雑魚モンスターでは相手にならないのである

そして我等が魔王はと言うと

「はいお掃除お掃除っ」と

まるで誇りを払うかのように雑魚を次々と星に変えていく

一応言っておくが此処に入るモンスターは皆レベル20はあるモンスターである

序盤では苦戦する難所である筈なのだがこの二人には全く意味が無いのである

はっきりに言ってピッケルもかなりチートになつてゐる気がした
でもやっぱり父（魔王）のチートっぷりには適いませんねえ

此処は魔王城の玉座である

其処には一人の魔王が座っていた

巨大な角に禍々しい目に鋭い牙

そして紫の肌にでっぷりと肥え太ったお腹

そんでもって短い足

側から見ると蛙っぽい魔王が其処に居た

「グエツフェツフェツフェ、村に呪いを掛けてやったぞい。この調子で世界中をお先真っ暗な世界に変えてやるわあ」

其処に居たノロイ魔王が下卑た笑みを浮かべていた

そして手元にあった赤い血のような酒を一気に飲み干す

そして赤いゲップをした

「グッフッフッフ・・・もはやこの世にワシより強い奴など居ない・・・ワシこそ最強の魔王なのじゃあ！」

ノロイ魔王は諸手を上げて叫んでいた

すると突如目の前にあった扉が破壊され、中からピッケルと父（魔王）が出てきた

「おやおや、此処が玉座のようだねえ」

「ふう・・・流石にちよつと疲れたよ」

「ななななんだ貴様等！このワシの玉座に土足で入り込むとは！衛兵は何をしていたのだ！」

ノロイ魔王が回りを見回す・・・が、出てくる筈がない

何故なら此処に来るまでに殆どのモンスターは倒されてしまったのであった

ついでに城中にあったお宝は殆どこの二人が根こそぎ頂いていたのであった

「おのれ貴様等！ワシの城に入り込んで只で済むと思っておるのか。このワシ、ノロイ魔王の力を思い知らせてやろう！」

玉座からゆっくりと出てきたノロイ魔王が歩き出した
一歩一歩踏みしめるたびに大地が震えている

この魔王・・・相当重いぞ

「す・・・凄い！何て威圧感だ・・・」

思わずたじろぐピッケル

そしてこれまた何処から取り出したかは問いただして欲しくないと
思いながら黒いボードを取り出した

そして其処には恐ろしいデータが出てきた

『性能データ』

ノロイ魔王

レベル	..	8	0	0	0
HP	..	8	0	0	0
MP	..	6	0	0	0
力	..	5	0	0	0
守	..	4	5	0	0
足	..	5	0		
魔	..	9	0	0	0
身長	..	1	6	0	CM
体重	..	6	0	0	万t

「いけね！早く戻さないと」

そう言って割れた地球の両端を持って力任せにくっつけた
そして殴った個所にペタッとセロテープを貼って事なきを得た顔を
していた

そんな父さんを見て僕はこう一言言ってあげた

「あんたが間違いなく最強だよ・・・」

・・・と

その頃、父（魔王）とピッケルの戦い振りを見ている姿があった
皆禍々しい姿をしていた

そう、此処に居る者皆魔王だったのだ

「ノロイ魔王がやられたか」

「ま、アイツは雑魚だったし・・・しょうがないんじゃない？」

「しかし、人間の分際で魔王になるとは生意気な」

「いよいよ我等が動き出すときが来たか」

「そう・・・我等・・・」

『大魔王がな』

その32（後書き）

なんと新たな敵が現れた
魔王より強い大魔王
果たしてこいつらは一体
ってか、また強くなってるよ父さん

その33 (前書き)

今回お約束の展開に行きます

その33

ノロイ魔王を倒した父（魔王）とピツケルのコンビはノロイ城で手に入れたお宝を手土産に村に凱旋した
その夜、村では飲めや歌えやの大騒ぎになったのである

「有難う勇者ピツケル！」

「有難うその父魔王様！」

「貴方達のお陰で私達の村には光が戻りました」

村人が一斉に口々にそう叫ぶ

それを聞いててピツケルが何処か恥ずかしいようなムズ痒いような感じになった

しかし、それとは対照的に父（魔王）は険しい顔をしている

「どうしたの？父さん」

ふと隣に居たピツケルが聞いた
すると父（魔王）がゆっくりと口を開く

「思ったんだが・・・魔王って怖がられて当たり前なのに、こうして村人達に笑顔を振る巻いて良いのだろうか・・・と、思えてね」
「またどうでも良い事を・・・」

相変わらずマイペースな事を呟く父親である

そのマイペースに一体どれほどまで自分が巻き込まれた事か
走馬灯ではないが今までの苦しい思い出が脳裏を駆け巡っていく
しかし、思い出したくないし思い出すのも面倒なので割愛させて頂
くが・・・

決して面倒だからではないので誤解しないように其処の読者諸君とまあ、ピッケルの脳内妄想は置いておき、今日の前では村人達と父（魔王）達がそれは楽しそうに騒ぎまくっていた
まあどうでも良いのだが

しかし、何時までも騒いでばかりでは話が盛り上がらないので此処らで新しい展開を用意するでしょう

皆様に質問したい

魔王と言えばまずすべき事があるであろう

そう、魔王と言えば「お姫様」を誘拐する事である

古今東西魔王と言えば勿論な位お姫様を誘拐してきたのだ

そして、それは父（魔王）も例外ではないのだ

そうと決めた彼は行動が早いのであって

「ところでこの近辺にお姫様の居る城はあるかい？」

と、こんな具合に村人に聞いていたのである

普通は答えないのだが其処は恩人だしてな具合に村人は答える話しによるとこのアジナ村から北に歩いた先に立派な城のある町その名を「マジデリアン」と呼ばれる町がある

そして其処には正しく玉のように美しいお姫様が居ると言う

そんなお姫様を見て町の人々はうっとりするとかしないとかと言う噂のようである

それを聞いた父の目はまるで少年時代のように輝いていた

「うむ、では早速そのお城に向かうとしようではないか」

「はあ・・・結局こんなノリになるんだなあ」

何時もの事ながら呆れ果てるピッケルである
もう慣れたのだろう

それから翌日の朝早くにピッケルと父は旅路を急いだ
目的地は勿論北の都「マジデリアン」である

道は平坦な道であり、特に変わったところは無かった
途中で野生のモンスターが現れたりしたが其処はまああの二人なの
で軽くあしらったのであるが

その後も様々なモンスターが現れたり道行く勇者もどきが父に挑戦
を挑んだりしてきたりしたのだ
例えばこんな奴等である

「見つけたぞ魔王!」

「今度こそ積年の恨みを晴らしてあげるわ!」

「覚悟しろ」

其処には、戦士、魔法使い、僧侶の三人が居た

布の服にマントを靡かせて頭には輪のような飾りをしており手には
一本の長い剣を握った戦士

ローブと杖、そして帽子の三点セットに身を包んだお約束の姿の魔
法使い

服に教会で良く見る十字の模様が描かれておりいかにも華奢な体つ
きの僧侶

お約束と言えばお約束の三人組みが目の前に現れたのだ

「おや? 君達何処かで会ったっけ?」

『その4を見ろおおおおおおお!』

ちゃっかり忘れてしまった父

そんな父に三人が声を揃えて叫ぶ

しかしそれは読者にしか分からないネタだ
それをおいそれと出すのは反則だぞ君達

「良いから見てください！」

「はいはい・・・」

涙まで流し出した戦士に仕方なく父はその4を見る事にした
其処には・・・知りたかったらその4をチェキラア
ってな、感じで確認を終えた父が納得するかのように目の前で手を
叩く

「ああ、君達はあるの激弱三人組かい？懐かしいねえ」

「その言い方は止めろお！もう俺達はあの時の俺達じゃない！見ろ、
この強さを」

戦士ギルが自身のパラメーターを見せる

そして、それに釣られて魔法使いマリンと僧侶ボブも同様にパラメ
ーターを見せる

戦士ギル

レベル…100

HP…2000

MP…100

力…500

守…300

足…350

魔…50

魔法使いマリン

レベル…100

HP…1500

MP…3000

力…150

守.. 1 0 0
足.. 1 2 0
魔.. 5 0 0

僧侶ボブ

レベル.. 1 0 0
H P .. 1 0 0 0
M P .. 1 0 0 0
力.. 1 0 0
守.. 2 0 0
足.. 1 2 0
魔.. 1 0 0

であつた

普通のR P Gでなら破格の強さを誇るだろうが、生憎この小説では
雑魚同然である
その為・・・

「はい、退場！」

父のその一言と同時に放たれたデコピン一発で三人は星にされてしまつた

悲鳴すら書いて貰えない

出してもらつただけでも感謝して欲しいと思う

「何気に作者さんが酷い気がするんですが」

気のせいさピッケル君

そんなこんなで色々な事があった物の父達は無事に北の都「マジデリアン」に辿り着いた

其処は都と言われるだけあってとても活気付いていた
城下町では溢れ返る人の山である

そして、その人々全てが輝いているのだ
見ていてとても清らしいとはこの事である

「うわぁ、凄いいところだなぁ・・・僕都って始めて来たよお」

「うむ、父さんもこの格好で来たのは初めてだぞお」

「そりゃそうだ」

父の何気ない一言にピッケルは納得した

確かにその格好で都を歩けば間違はなく何か投げつけられる

だって今僕の隣に居るのは魔王なんだもん

顔だって怖いし角だって生えてるしいかにも魔王っぽい格好だし

もう隣に居ても凄く怖かったのだけれど、慣れと言うのは恐ろしい
物でありもうとっくに慣れてしまったのだ

「さて、それじゃお目当てのお姫様を探すのでしょうか」

「って、やっぱり僕も一緒に行くのお？」

「当然じゃないか、折角だし見に行くのも良いだろう」

そう言ってピッケルの襟首を掴んで父が悠々と町を練り歩く

最早慣れたのかピツケルは成すがままになっていた
諦めたのだろう

しかし勇者なら最後まで抵抗すべきではないのかい？それでも勇者
かてめえはこのボケエ！

「だから僕は勇者になんてなる気はないの！」

「何を言う、お前は勇者になって私を倒すと言う重大な使命がある
のだろうが」

「いい加減にしてよ！僕は勇者になる気はないって言ってるでしょ！
う！」

忽ち父と息子の口論に発展する

町行く人々はそんな二人にチラリと視線を移す

だが、すぐにまた元の視線に戻る

ここでもどうやら魔王とはそれ程珍しくないようである
でも、それってやばくないか？

さてさて、父と息子の口論なんか見たくないなので少し時間を早める
事にして・・・

此処はあの噂のお姫様が住むと言われている大きなお城である

まさにお城であった

豪華な作り

△の屋根

靡く旗

大きな門

正にお城としか言えない作りであった

そして、そのお城の中にある開かれた窓から一人の少女が現れた
年は13歳位

純白のドレスを着こなし金色の長い髪が風に舞い踊り、頭に飾られ
た白銀のティアラが太陽の輝きを浴びて光沢を発している

少女の顔も素敵であった

ルビー色の瞳は吸い込まれそうな程透き通った色であり、整った顔立ちは正に美人と言えた

人々はそんな姫を見て高値の華を見るような目で見つめ、そして溜息をつく

そんな中、ピッケルと父も姫を見ていた

「うわぁ・・・綺麗な人だなあ」

「うむ、正に攫ってくれと言わんばかりのお姫様だなあ」

「まだ攫う気だったのかこの馬鹿親父は」

呆れ果てるピッケル

どうやら父はやっぱり攫う気らしい

止めないといけないのだがピッケルじゃ父は止められないので出来る事なら巻き添えを食らわないようにしたいのだが

そう思っていた時であった

ふと、ピッケルの後ろに自分を見つめる気配を感じた

回りの皆は姫に夢中なので自分を見る事などまず無い筈である

では一体誰が・・・

そう思い振り返ると、其処には見覚えのある少女が居た

ピンク色のツインテールに赤い瞳

そして常にロマンを捜し求める自称「ロマンハンター」

その少女は・・・

「あ、ナッチャン！」

「やっぱりピッケルに叔父様！」

そうであった

予想通り幼馴染のナッチャンであった

彼女はロマンを求めて諸国を渡り歩いているのだ

しかし最後に出合ったのはあの洋館の時以来である
それが一体何故此処に・・・

「噂のお姫様が攫われるシーンを一目見ようとやってきたのよ」

「最早攫われる前提ですかあのお姫様」

「そりゃそうよ、良いピッケル。お姫様って言うのは攫われるのが
お約束なのよ！攫われないお姫様なんてお姫様じゃないわよ」

「何？その哲学っぽいのは！そんな哲学いらないよ！」

ナツチャンのこれまたどうでも良い美学にピッケルは眉を顰める
確かに七面倒くさい話である

幾らお姫様だからって一々攫われてたらキリが無いのだ
攫う奴や救いに行く奴の気持ちも考えて欲しい物だ

「なるほど、なら安心なさいナツチャン。これから私があのお姫
様を攫いに行くのだから」

「まあ、流石叔父様！それなら私も一緒に行って良いかしら」

「良いとも、さあ早速あのお城に潜入してお姫様を誘拐しようじや
ないか」

何とも軽いノリでお城に向かう父とナツチャンとピッケル
当然ピッケルは強制参加である

「もう嫌だ・・・こんな人生」

諦めろ

お城のある巨大な門の前には二人の屈強な門番が立っていた
厳つい顔で手には立派な長い槍を構えている
いかにも「此処から先は通しませんよ」と言いたげな感じである
しかし、そんな門番の前に魔王達がやってきた

「すみませうん」

「何だお前達は？ 此処から先は通行禁止だ！」

「怪しい奴だな。一体何の目的で来た？」

「ええ、ちよつとお姫様を誘拐しようと思って着ました」

言っちゃったよこの父はひとああ！

ピッケルは内心叫んでいた

普通攫いに来る人が攫いに来たと正直に述べる筈が無いのだ
それをこの人は思い切り言ってしまった

ああ、もう目の前の門番さんが殺気立ってるよ

槍を両手で構えて父を威嚇してるもん

こりゃ100%巻き込まれるなあ

「貴様、ルビー姫を誘拐すると言うのか！」

「ならば此処で我等の槍の錆になれい！」

二人が同時に槍を突き立てる

だが、その槍は父の胸辺りにぶつかった瞬間粉々になってしまった
パラパラと槍の破片が下に散らばる

後に残ったのは槍の棒の部分だけである

それを見た門番の二人は驚愕した
そりゃそうだろう

攻撃した矢先に槍がバラバラになってしまふのだから

「とりあえず・・・君達邪魔だから退いて」

父がそう言って平手打ちをかますと、門番の二人は瞬く間に空に舞い上がり夜空に輝く正座の一つとなってしまうた

御免なさい門番さん、後で謝りますから許して下さい

聞こえないと思うけど内心そう誓うピッケルを他所に父は門を開いて中に入っていく

それにナツチャンも続く

当然ピッケルは強制参加なのでついていくのは当たり前である

はぁ・・・退屈だわ

この日ルビー姫は本日何度目かの溜息をついた

原因は言わずもかな今の現状に不満なのだ

毎日毎日こうして民衆の前に姿を現せて笑顔を振りまき、その後は勉強にお稽古、正直窮屈で適わないのだ

外の世界に出てみたい

そんな思いもある

だが、それをしようとすれば直ちに城の兵士に捕まり戻されてしま

うのだ

正に籠の中の小鳥である

さながら自分は飛べないカナリアであろうか
退屈である

「はぁ・・・」

再び溜息が出た

このままでは退屈の余りバターになってしまいうだろう
立派な作りのベットの上にダイブしゴロゴロしながらそう思っていた
ふと、彼女はこう呟いた

「誰か・・・攫ってくれないかなぁ・・・」

その頃、父達一向は城の中を練り歩いていた

当然そんな事をしてれば衛兵達が向かってくるのはお約束なのだが
何しろ相手は魔王である

手加減してるとは言え殆どが一撃で倒されてしまうのだ

「やれやれ、お目当てのお姫様は何処に居るのかなぁ？」

「ああ、遂に目の前でお姫様が攫われる瞬間が見られるのねえ・・・
楽しみだわぁ」

「僕は複雑だよ・・・」

テンションの高い二人に対しピッケルはテンション低めである
まあ常人ならこんな状況で騒げないのは当たり前なのだが
やがて一同の前に立派な作りの扉があった
そして其処には「ルビーのお部屋」と書かれていた

「うむ、私の魔王センサーが反応してる。恐らくお姫様は此処に居るのだろう」

「やったわ！是非会いましょう！」

「ちょ、ちよっと待ってよ二人共」

ピッケルの制止を無視して二人は扉を開けて中に入る
中は立派な作りの部屋であった

辺りには女の子らしい可愛らしい装飾が施されておりいかにも女の子の部屋である

そしてその部屋の隅にあるベットには一人の少女が眠っていた
先ほど見たお姫様である

「うわぁ・・・居たよ本当に」

「よし、では早速誘拐しよう」

「ちょ、ちよっと待って！」

誘拐しようとする魔王の前にピッケルが立つ
何で邪魔するんだ？

そう言いたそうな顔で魔王はピッケルを見る

「ま、マズはお姫様の意見を聞いてそれから決めようよ」

「なるほど、確かにそうだな。お姫様の意見もなく勝手に誘拐したら迷惑だしな」

（って言うか、誘拐する時点で迷惑になってるんだよお父さん）

口で言いたいのだがその後なにされるか分かった物じゃないので心の中でそうツツコミを入れた
それならばと三人は眠っているお姫様の前に立ちその肩をそつと揺さぶる

「う・・・うーん」

ゆっくりと瞳を開けたお姫様の前に映ったのは・・・言うまでもなく魔王であった

「キヤッ！ビックリしたわぁ・・・誰かと思ったら魔王さんだったのね」

「え？ちよつと待って！リアクションそれだけ？薄すぎない？」

余りにも薄いリアクションにピッケルは驚いた

普通だったら大声を上げるかその場で失神するのがセオリーなのにこの少女何処まで肝が据わっているのか

そう思っているピッケルを他所に魔王は話しを進める

「始めまして、私は父（魔王）です。たった今から貴方を誘拐させて貰います」

「まあ、絵に書いた展開ねえ。どうぞ攫って下さい」

「いや、ちよつと待てええええええええええ！可笑しいだろう！何で攫うのOKなの？普通抵抗するか兵士呼ぶでしょ？何で承諾してるの？」

「あら、こんなチャンスは滅多に無いのよ。それにお城を出られる絶好の機会じゃない」

「なるほど、お姫様も苦勞をしているのだなあ」

お姫様の言い分に魔王は頷いた
だが、ピッケルは頭を抱えていた
ああ、やっぱりこれってギャグ小説なのか
そう思っているようなので言わせて貰う
そうだよ

「だとしてもこの格好では動きづらいわ。何か動きやすい服って・
・私ドレスしか持っていないんだったわ」

「それならご安心を、道中で見つければ万事OKであろう」

「まあ、至れり尽くせりね」

「違うからね、明らかに違うからねお姫様」

目を輝かせるお姫様にピッケルのツツコミが入る

そんなピッケルをお姫様が見る

ルビー色の瞳がこちらに向けられた時にはドキンとした

何しろ窓の上からでも相当綺麗だと分かったのだ

それがこうして目の前に居られたらそりやもう心臓が飛び出しそう
になる

「貴方は誰？」

「うむ、その子は私の息子でピッケルと言ってなあ。将来勇者にな
って私を倒すと言う使命を持っているのだ」

「あらそうなの・・・頑張ってね」

「頑張りたくないです」

労いの言葉を送る姫に対しピッケルが一人呟く

「凄いわ、これこそロマンなのよ！ロマンが目の前で溢れ返ってい
るわ。あ、私はナツチャンって言って生粋のロマンハンターよ」

「ロマンハンター・・・そんな職業が巷には溢れているのですね？
益々興味が沸きました、さあ。今すぐ私を攫って下さい」

「良いのかなあ・・・こんなノリでえ」

普通お姫様が攫われるのを願望するのって可笑しい気がする
そう思うピッケルであつた

そんな時である

突如外の景色が一変した

さっきまで快晴だった青空が黒い雲に覆われ雷を放ち始める
それを見た町の人々が途端に騒ぎ出し始める
すると、上空から不気味な声が聞こえてきた

【ほう、噂どおり美しい姫だ・・・お主はこのワシ『ユウカイ大魔王』が頂くとしよう】

そうやって姫の窓から降りてきたのは鋭い牙を持ち黒い長いマント
をつけたドラキュラ張りの男である

「む、君も姫を攫いに来た口なのか？」

「いかにも、私は大魔王としてそのお姫様を誘拐させていただく」

「それは出来ないなあ、何しろ先に誘拐申請したのは私なのだ」

「フフフ、魔王にルールなどない。やりたいと思ったら即行動！こ
れ大魔王の哲学なのだよ」

「何、そのジャイアニズム」

ユウカイ大魔王の自分勝手な言い分にピッケルは汗をたらす

「さあ、では姫は頂いて行きますよ」

そう言う目にも留まらぬ速さで姫の前に立ったユウカイ大魔王は

片手で姫を掴みそのまま窓まで戻る

「こらあ、順番は守れえ！」

そんな大魔王に向かって魔王が駆け寄る
だが、

「馬鹿め、魔王如きが魔王に勝てる筈がないだろうが！」

ニヤリと笑い手を翳す

するとその手の平から一筋の魔弾が放たれた

魔王はそれを胸で食らう

すると一気に壁を突き抜けて城の外に弾き飛ばされてしまったのだ

「OHNOオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「と、父さああああああああああああああん！」

ピッケルが叫ぶ

だが、すぐに振り返りひのきの棒を構える

「グングニル様、力を」

「任せよ！」

グングニル様が元の姿に戻りピッケルはそれを握り締める

「ほほう、まさか君のような少年が神具を使うとは」

「姫を放せ！でないと切り倒すぞ」

「だが、私には勝てないな」

「何？」

「何故なら君はまだそれを使いこなせていないのだから」

そう言うで一瞬の内にユウカイ魔王が前に躍り出て手刀でグングニル様を弾き飛ばした

そして丸腰になったピッケルの溝に拳を当てる

体がくの字に曲がってしまったピッケル

そしてそのまま倒れる

「ちょっと、大丈夫ピッケル？」

「ご心配なくマドモアゼル。手加減はしておきましたよ」

「おお、お約束の展開、お前はまだ弱いからレベルを上げて出直して来いって展開？」

「その通り！弱い勇者を倒しても私の名に傷がつくだけですからね、もっと強くなってから来て下さい、では」

そう言い残してユウカイ大魔王は飛び去ってしまった

すると空も元の青空に戻る・・・筈もなくそのままであった

残されたナツチャンはどうしたのかと言うと

「とりあえず姫様救いに行くかあ」

と、一人勝手に決めているのであったそうなの

その33（後書き）

父（魔王）初敗北

その34（前書き）

父（魔王）が負けた。
でもあんまりショックは受けてないみたい（汗）

その34

前回でユウカイ大魔王にコテンパンにされた父（魔王）とピッケルはお城の前に立っていた。

と、言うのもお城では今忙しいので付き合ってもらえんから出てけ！とつまみ出されたのだ。

「さあ、お姫様が攫われるのを見れた事だし！今度はお姫様を救出に行くわよ！」

完全に乗り気なナツチャン。

ハイテンションで突っ走る気マックスである。

まるで「あたしについてきなさい野郎ドモ」と言っているかの如くであった。

「って、ナツチャン分かってるの？相手は父さんを一撃で倒した猛者だよ！大魔王なんだよ！勝てないんだよ」

何時ものようにピッケルは弱気であった。

だからこいつはヘッポコ勇者と呼ばれているのだろう。
情けない限りである。

「心配ないさピッケル。私に秘策がある」

其処へ名乗りを上げたのが勿論の事父（魔王）であった。
そんあ父（魔王）に疑いの目を向けるピッケル。

「何父さん。あの大魔王に勝つ秘策とかあるの？」

「フッフ、相手が大魔王ならこちらは大魔王になれば良いのさ」

そう言う父（魔王）は懷から油性ペンを取り出し主室に自身の名前の横に文字を書いた。

すると其処には父（魔王）から父（大魔王）と書かれていたのだ。

「これで私も大魔王になったぞ！さあ、早速お姫様を救出に行こうじゃないか」

「ってそんな簡単に出来る物なのおおおおおおおおおおお！」

大声で叫ぶピッケル。

まあ良いんじゃないの？だってこれギャグ小説だし。

丁度その頃、ユウカイ大魔王に誘拐されたルビー王女は暇を持て余していた。

「ねえ、貴方は私を誘拐して何をするつもりなの？もしかして私をお嫁さんにするの？それとも私を邪神の生贄にするの？」

「フフフ、知りたいか？」

ユウカイ大魔王がニヤリと微笑む。

それにルビー王女がうんうんと頷く。

するとユウカイ大魔王がクックククと微笑む。

だが、その微笑みの言葉が徐々に・・・うつすらとトーンが低くな
っていく。

そして・・・

「実は・・・何も考えてないんだ」

「え？」

何とも予想外な返答であった。

「マジ？」

「マジ！」

「何も考えてないの？」

「何も考えてないの！」

二人が部屋の中で短い問答があった。

その刹那、部屋全体に『しくん』と言った効果音が響き渡った。

「ねえ、それじゃ何で私を誘拐したの？」

「只何となく」

ユウカイ大魔王の言葉が部屋の中で空しく響き渡った。

まあ・・・そんなのはどうでも良いので。

そんなユウカイ大魔王とルビー王女は放って置いて、此処は地上、
其処では父（大魔王）達がどうやってユウカイ大魔王の元へ行くか
考え込んでいた。

「それでどうやって行くの？また父さんの角で行くの？」

「ノンノン、それでは面白くないだろ？此処は普通にユウカイ大魔

王の居る入り口でも探すとしようじゃないか」

ピッケルの言葉に父（大魔王）はさらりとそう答えた。
しかし今の状況を考えて欲しい。

面白みを求めている状態では無い筈だが・・・。
しかし作者がいかにそんな事を考えようと父（大魔王）がそんな事をしてくれる筈もないわけであり。

「でも、このままじゃお姫様が魔王のお嫁さんになったり邪神の生贄になったりする超ロマンス溢れるシーンを見逃してしまうわ!」
「ううむ、そりゃ不味いぞお! となったらさっさと入り口を見つけねば!」

「で、でも魔界に行く道なんだよ! そう簡単に見つかる訳・・・」

言葉を言い切る前にピッケルはふと空を見上げた。

其処にはユウカイ大魔王が魔界に行く際に開けたと思われる巨大な次元の穴がポツカリと開いていたのだ。

ええ、そりゃもうポツカリと。

あら奥様、丸見えですわよ! っと言いたくなる位ポツカリと開いていたのだ。

・・・少し道が逸れたかも知れませんがまあ気にしない気にしない。
ともかくそれを見つけた我等がピッケルがこう言いました。

「開きっぱなしだあああああああああああああ!」

・・・と。

その声に気付き父（大魔王）とナツチャンがそれぞれ空を見上げる。

「おお! 本当の開きっぱなしではないか!」

「本当だわ! あれじゃ蚊が入りまくりよ!」

ナツチャン、突っ込む所が違うと思うのだが・・・

まあそんな事より折角次元の穴が開いているのだからこれを利用しない手は無いだろう。

しかし問題があつた。

次元の穴は今彼等が居る地上から約200m位空の上にあるのだ。常人では決して届かない距離にその穴がある。

果たしてどうやって入ろうか。

「どうやって入れば良いんだろう？」

等と普通に悩む我等がピツケル。

しかし其処でナイスなアイディアを思いつくのが我等が大魔王である。

「フハハハ、なあに簡単じゃないか！ 要はあの穴に落ちる形になれば良いんだろう？ だったら地球を反対にひっくり返せば問題無いじゃないか」

「な、何言ってるんだよ！ 幾ら大魔王になったからってそんな事出来る訳・・・」

「よいしょと」

そんな掛け声と共に父（大魔王）は地面をひっくり返した。
するとどうだろうか。

今まで地面が下で空が上にあったと言うのに今はその真逆で地面が上にあって空が下にあるのだ。

それは即ち・
・
・

「おぉおぉおぉおぉおぉおぉおぉおぉおぉ
 いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
 うううううううううううううううううううう」

そう、お空に向かって無限に落下していくのだ。

何と言うナイスアイディア！

これで何の問題もなく次元の穴に行けるね♪

「全然問題無い！いいいいいいいい！これこの後どうすれば良いのおおおおおお！」

ピッケルが大声で叫んでいるが・・・其処は作者が代弁して差し上げよう。

別に良いじゃん。どうせこれ『ギャグ小説』なんだし。

その34（後書き）

次回は魔界で大暴れ！
お楽しみに

その35（前書き）

父（大魔王）のパワーをご覧ください
後ピツケルの活躍を・・・

その35

父（大魔王）が地球をひっくり返したお陰で三人は無事にユウカイ大魔王が通ったと思われる穴に飛び込む事に成功したのでえあった。そして、その間彼等と言うと・・・

「おおおおい　いいい　るうう」

落ちていた。

しかしその際騒いでいるのは我等がピッセルだけであり、父（大魔王）とナツチャンはと言うと。

「空中散步」♪

「浮遊感が溜まらないわあ〜♪」

自由落下を満喫中であつたりしていた。

「少しは緊張感を持ってええええええええええええええええええ！」

叫ぶピツケル君。

しかし落下しているのは見ての通りなのでそのまま落下して貰いましょう。

つてな訳で省略・・・

ピッケル達の視界に映ったのは一面真っ黒っぽい世界であった。
正しく其処は魔界と呼べるに相応しい世界であった。

「ほほう、此処が魔界なのか」

「ああ……来ちゃったよ……来たくなかったのに来ちゃった
よ魔界に……いきなりラストステージなの？」

一人魔界に來た事を後悔しているのかその場に蹲っている。

しかし当然の事ながら父（大魔王）とナツチャンは大して気にして
無い。

寧ろ魔界に來れた事を心底喜んでいる。

本当にどう言う神経をしているんだか。

「それで、これから何処に行くのかしら？」

「うむ、とりあえずこれから姫様を誘拐したユウカイ大魔王の元へ
行こうではないか」

「それで、この場所の地理とかあるの父さん？」

「勿論……ない！」

断言した。

それに思いつきりずっこけるピッケル。

そりゃそうだ。

そんなに自信を持って断言されたら誰だっけずっこける物である。

そんな時であった。

突如ピッケル達の目の前に大量の砂埃が巻き上がった。

何だと目を凝らしてそれを見るとそれは大量のモンスター達であっ

た。

どうやらピッケル達の来襲を察知したモンスター達がピッケルをやっつけようとやってきたのだろう。

「おお！なんと言う超展開！これぞ勇者者の醍醐味だぞピッケル！早速奴等をやっつけるんだ！」

「え？僕だけで戦うの？」

「勿論。あの程度の敵を倒せないでは私を倒す事など出来ないぞお！さっさと行きなさい」

「頑張ってねピッケル君」

「うわあああん！覚えてろおおお！」

大粒の涙を流しながらピッケルは一人モンスター達の元へ掛けていく。

そして、それをナツチャンと父（大魔王）が見守っていた。

「うおおおおおおおおお！」

ピッケルは一人モンスター軍団を相手にひのきの棒一本で叩きのめしていく。

現代用語で言うは無双である。

その無双をしまくりながらモンスターを蹴散らしていく。

その光景は凄まじいの一言であった。

だが、さすがに限界になったのか全軍のおよそ四分の一を倒した時点で息切れして戻ってきた。

「無理・・・もう無理・・・」

「情けないなあ・・・それじゃ選手交代でしょう」

今度は父（大魔王）が腕を鳴らしながらモンスター達の前に歩んで

私を倒せる勇者になって欲しいのだからなあ」

「まだ言うのお父さん」

未だにそんな事を言う父（大魔王）に呆れ果てる我等がピッケルであつた。

ふと、ピッケルはモンスター達のやってきた方向を見る。

其処には一つだけ巨大に聳える城があつた。

明らかに悪そうな城である。

正に魔王城と言える感じの城である。

その距離は想定100kmは有つた。

まともに歩いて行けば2、3日は掛かりそうである。

「うゝむ、このまま歩いてては時間が掛かってしょうがないなあ。よし！」

父（大魔王）は何を思いついたのか主室に自身の角を抜き取るとそれを地面に突き刺す。

そしてもう一本を抜き取り遙か彼方にある魔王城に向けて投げ放つ。投げた角は魔王城に突き刺さる。

すると二つの角が互いにシンクロし合い光を放つ。

「さて、それじゃスイッチオン！」

父（大魔王）が角のスイッチを押す。

するとゴゴゴと音を立てて魔王城がそのまま父（大魔王）の目の前に突き刺さっていた角の前にまで引き寄せられたのだ。

しかもかなり無理矢理。

その為魔王城からは「なんだなんだあ！」とか「ひい大地震だああ！」とか「何がどうなってるんだあああ！」とかモンスター達の叫び声が響いた。

「さて、それじゃ早速入城しようか」

「って、何とんでもない事してるのおおおおおおおお！」

「だって良いじゃん。ページ数が少ないんだしそれに作者も面倒がつてるしねえ」

「何作者の内情を暴露してるのおおおおおおおお！」

小説至上言ってはいけない事を父（大魔王）を見てピッケルが叫ぶのであった。

こうして父（大魔王）とピッケル、そしてナツチャン一向はユウカイ大魔王が居城を構える魔王城に入城する事にしたのであった。

「入城料は大人1000円、子供500円です」

「金取るんかいいいいいいいいいいいいいい！」

その35（後書き）

次回はいよいよ魔王城に乗り込みます

その36 (前書き)

無事にユウカイ大魔王の城に入城出来たピツケル達。
だが・・・

その36

「ユウカイ大魔王さまぁ！ たたた大変でえす！」

突如玉座にモンスターが転がり込んできた。

その玉座には例にもよってユウカイ大魔王が鎮座していた。

「何事だ！ 折角もう少しで勝てるどころだったんだぞ！」

苛立ちを隠さずにユウカイ大魔王が叫ぶ。

しかしその手には何故かランプのカードが握られておりその隣には誘拐された筈のルビー王女が同じようにランプのカードを握っていた。

しかしランプのカードの枚数は明らかにルビー王女の方が少ない。そしてユウカイ大魔王が部下と話している隙に手元から一枚のカードを取り出し山札の中に投げ捨てる。

「はい、また私の勝ちい！これで通算1678万6853回私の勝ち」

「な、何だとおおおおおおおおおおお！」

また負けてしまった事に愕然となり叫ぶユウカイ大魔王。

しかし、この時皆様は同じ事をお思いであろう。

それは此処にいる部下も同じ思いであった。

その考えとは、これである。

「ってか、あんたら一体どんだけババ抜きやってんすかあああ！」

と、言う事なのであった。

丁度その頃、ピッケルと父（大魔王）とナツチャンの三名は見事にユウカイ大魔王の城に入城していたのであった。

「つ、遂に来てしまった・・・大魔王の城の中に・・・」

我等が勇者であるピッケルは魔王の城に入ってしまったって事で酷く落ち込んでいる。

と、言うのも最上階に待つのはあの大魔王である。

大魔王と言えばRPG物とかで良くあるラスボスを思わせる雰囲気が出まくっている印象があるが、実は全然関係ないのだ。

しかし強敵であるには変わり無いと言えば変わり無い。

恐らく今まで戦って来た敵の中でもかなりの実力者なのだろう。

「よし、折角だからこの大魔王城を占拠してしまおう！」

「うわぁ、流石叔父様ぁ！やる事が大胆だわぁ！」

緊張するピッケルの隣では緊張感ゼロの父（大魔王）とナツチャンが居た。

どうやらこの二人はこの大魔王城を占拠してしまおうと言うらしいのだ。

まあ確かに出来ない事はないのだろうが本来RPGで敵の本拠地を

ったり、バイオ○ザードで敵の真っ只中で弾切れを起こした状態でもある。

「何でナツチャンはそんなにやる気になってるの？」

「何言ってるのよピッケル君！大勢のモンスターを蹴散らす！これこそ勇者の醍醐味じゃない！」

ナツチャンの顔色が何時になく輝いている。

だがこの時ピッケルには何故ナツチャンが輝いているのかとても理解できなかった。

まあ何はともあれ戦わなければこちらがやられてしまう。

と、言うのでピッケルもひのきの棒を手に取り構える。

「あたた・・・変な所に落ちてしまったなあ」

辺りを見回すと父（大魔王）の周りには骸骨が落ちていた。

どうやら此処は力尽きた人間を捨てる場所なのであろう。

そしてそこにどうやら父（大魔王）は落ちてしまったようである。

「むうう、はてさて、どうやって上がろうか？」

とりあえずその場に座り込んで考える父（大魔王）。

そんな時であった。

ズシンズシンと地響きを上げて父（大魔王）に近づいていくのが聞こえる。

どうやら他にも誰か居るのだろう。

そう思って父（大魔王）は振り返る。

しかし其処に居たのは明らかに友好的な人種とは思えない生き物が立っていた。

全身毛むくじゃらで口元には鋭い牙が生えており目がギラギラと鈍く輝いている。

手足には鋭利な爪が生えており口元から涎が滴り落ちている。

そしてその鋭い目線が父（大魔王）に向けられていた。

「おやおや、これはとんでもない来客だなあ」

しかしそんな怪物を見ても父（大魔王）は全然余裕の表情で見ているのであった。

「フッフッフッ、貴様らを分断させた事で貴様らをまとめて始末してくれるわ！何しろ地下に居る魔物は私ですら手を焼く化け物だからなあ！」

父（大魔王）とピッケル達の行いをモニターからユウカイ大魔王が見ていた。

そしてご満悦な顔をしている。

だが、彼の笑顔は其処で終わっていた。

「チェック！私の勝ちい！」

「うげえ！ま、待った！その手は待ってくれ！」

ユウカイ大魔王が青ざめた顔でルビー王女に言う。

因みに二人の間にはチェス盤が置かれていた。

尚勝負は明らかにルビー王女の圧勝である。

「ええ、またなお。これで18億7895万3674回だよお」

「そ、其処を何とか！お願いします！ルビー王女おお！」

大粒の涙を流しながら王女に頭を下げるユウカイ大魔王であった。

最早大魔王の威厳が全くない物であった。

ってかあんたら其処まで暇だったんかい！

その36 (後書き)

果たしてピッケル達と父（大魔王）の運命やいかに！！！！

その37（前書き）

今回遂にユウカイ大魔王と決着が・・・あっさりとかな？

その37

此処はユウカイ大魔王のお城の最上階。

其処では何とあのユウカイ大魔王が両手で頭を抱えてうずくまっていた。

そしてその奥ではあのルビー王女が勝ち誇った顔をしていた。

その二人の間にあったであろう机の上には古き良き卓上ゲームが置かれていた。

そして、其処には『2P Win』と書かれていた。

「わあい、今度のゲーム対決も私の勝ちねえ。これで1687万5589回私の勝ちだねえ」

「ば、馬鹿な・・・このユウカイ大魔王が此処までの敗北を喫するとは・・・」

どうやらユウカイ大魔王にとっては相当に悔しい事らしい。

「ええい！このままでは大魔王の面子に関わる！ルビー姫よ！今一度勝負だ！」

「えゝゝゝゝ、私もう飽きたあ。他にやる事ないのお？」

「つと・・・言われても・・・」

「何なら私達が良い知恵を貸してやろう！」

「「え？」」

突如入り口の方から声がした。

振り返って見ると其処には最下層に居た筈の父（大魔王）と勇者（？）ピッケル&ロマンハンターのナツチャンであった。

「き、貴様らどうやって最上階に？あれだけの魔物達はどうした？」

「皆倒しましたよ。僕だって少し位強くなってるんです。あんまり舐めないで下さいよね」

「そうそう、ピッケル君凄かったよお。迫り来る魔物達を千切っては投げて千切っては投げて・・・」

ナツチャンが力説する。

どうやらあの程度の魔物ではピッケルにとっては大した力ではなかったようである。

しかし問題はもう一つある。

「そ、それより其処の大魔王！お前は最下層に居る魔王キラーと呼ばれているデビルジャガーの巢に落ちたはず！何故無事なんだ！」
「うむ、偶々拾ったマタタビを上げたら大人しくなったぞ」

所詮猫科であった。

どうやら偶々持っていたマタタビのせいでスッカリなついてしまったようである。

その証拠に父（大魔王）の後ろではゴロゴロ喉を鳴らしながら猫らしい愛くるしいポーズを決めまくるデビルジャガーが居た。
本当にあれ魔王キラーなのだろうか？甚だ疑問である。

「お、おのれえ！折角ルビー姫を誘拐したのに奪い返されてたまるか！」

「でも、誘拐する必要なかったんでしょ？」

「実は・・・そうだったりして」

後ろのルビー姫の呟きで完全に化けの皮が剥がされた気分であった。と、言うのもユウカイ大魔王と名乗っていた割りに誘拐したルビー王女の使い道を全く考えてなかったのだから救いがない。

「さて・・・ピッケルや。此処は私が彼と戦う事になろう」

「え？良いの？何時もなら『勇者が魔王を倒すのは常識だ！』とか言って僕に戦わせる場面だと思ったのに」

「何を言う！魔王と言えばRPGで俗に言うラスボス！そして、お前のラスボスはこの父（大魔王）を置いて他に居ない！しかあし！他の魔王を倒してしまえばそれでこの冒険はおしまい！ラスボスを倒してハッピーエンドになってしまわないか！そんな冒険お父さんは絶対に認めません！」

等と長々と自身の価値観を言う父（大魔王）。

要するにピッケルには最終的に自分を倒して欲しいので他の魔王は自分が叩きのめすと言う結論に至ったようである。

（い、良いのかなあ？そんな考えで）

内心複雑な気分なピッケルである。

そんなピッケルの前で父（大魔王）が腕を鳴らしながらユウカイ大魔王の前に立っていた。

「さあて、それでは魔王同士の戦いに行こうではないか」

「ほざけ！前は私の手で一撃で倒された分際で！今度は手加減はせん！一撃の下に貴様を粉碎してくれる！」

そう言うユウカイ大魔王の気力がどんどん上昇していく。

その気力は初めて会ったときのおよそ数百倍にまで上昇していた。

「す、凄い気迫だ・・・あのときはまだ全然本気じゃなかったって事なのか！」

「凄い、凄い展開だわ！これぞロマンなのよ！強敵が更にパワーアップ！これこそRPGの醍醐味！」

後ろではピッケルが青ざめておりナツチャンが目を輝かせている。

「さぁ・・・では、死ねい！」

思いつきり雰囲気出しながらユウカイ大魔王が突っ込んでいた。

「はい、デコピン」

だが、その突進を父（大魔王）はあろう事かデコピン一発で終わらせてしまった。

しかしその威力は相当だったらしく、吹き飛ばされたユウカイ大魔王は遥か後方にある壁に激突する。

「がはあっ！な、何故だ！何故一撃で・・・しかもデコピン一発で倒されるんだ？」

「それは決まっている！お前はラスボスじゃない！言うなればRPGで勇者が最初に戦うボス！言わばファスボス（ファーストボスの略）だからだあ！」

ズビシと指を指してユウカイ大魔王に宣言する父（大魔王）それを聞いたユウカイ大魔王は思いつきりガビーンとなっていた。

「な、なんだとお！」

父（大魔王）の言葉にカルチャーショックを受けるユウカイ大魔王。その後ろでは「そんなので良いんだあ」と思うピッケルに「これこそロマンなのよ！」と叫ぶナツチャンが居たり、「これが魔王同士の戦いのねえ！二人の魔王が私をめぐって争い合う・・・ああ、私って罪なのねえ」などと自画自賛しているルビー王女が居たりし

ている。

「で、では・・・ラスボスではなく、ファスボスである私はこの後どうなると言うんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか。この私の拳で星になる事だよ♪」

そう言って力一杯ユウカイ大魔王を殴り飛ばして上空に星にしてしまった。

「さて、ルビー王女を救出した事だし、後はこの城に私の所有物と言う証明をしなければな」

と言う事で父（大魔王）は巨大な旗を取り出すと城の天辺に思いっきり突き刺したのであった。

因みに旗にはデカイ文字で『父（大魔王）のお城』と書かれていた。

ルビー王女を無事にお城に連れ帰ってきた父（大魔王）一向。

「おおお！愛しい我が娘ルビーよおお！」

「ウフフ、ただいまお父様」

玉座の間では娘の帰還を滝の如く涙を流して喜んだ父とその父を元

その37（後書き）

次回はタダの村を中心にまた新しい物語がスタートします

その38 (前書き)

今回RPGの裏側が明らかに・・・

その38

ルビー王女をあらう事か救出された直後にまた誘拐された王様は滅茶苦茶怒り心頭であつた。

「おのれ・・・おのれえあの大魔王がああ！我が愛しの姫を誘拐しておつてえええ！こうなれば城の全兵士を集めて姫を奪還するのだあ！」

「し、しかし王よ！我が城の兵はユウカイ大魔王の襲撃のせいで殆どありません！金がありますが」

「だったらあちこちから勇者を雇つてなんとしてもあの大魔王を倒せ！ルビー王女を取り戻すんだああ！」

完全に怒り心頭になった王様が大臣に命じる。

それから大量の勇者候補が父（大魔王）の討伐とルビー王女奪還に乗り出すのであつた。

一方その頃、我らが父（大魔王）とピッケル達は一路タダの村に戻つていた。

そして大喝采を受けたのであつた。

「よっ！流石大魔王！」「うわあ！お姫様を誘拐してきたんだあ！」

「へえ、あれがお姫様なんだあ！初めて見たなあ」

等と皆お姫様を誘拐してきた父（大魔王）を見て大喝采を送るのであつた。

そしてそのままの足取りで父（大魔王）達は一路魔王城に戻る。

「ただいまあ」

「あらお帰りなさい。皆随分と遅しくなつたわねえ」

城門を開くと其処に現れたのは多くのモンスター^{アルバイト}達と母のルーであった。

「始めまして。私はマジデリアンと呼ばれる都のお姫様をしておりますルビーと申します。この度こちらの叔父様に誘拐されてしまいました」

「あらあら、大変ねえ。因みにあの人は私の旦那よ」

こちらではルビー王女と母ルーとの楽しげな会話が展開していた。

「うんうん、これこそロマンよお！」

「ナツチャン、最早何でも良いんじゃないの？」

ピッケルの横ではナツチャンが目を輝かせてそう言っている次第であった。

「さて、これから忙しくなるぞお！」

「え？何で？」

父（大魔王）の言葉にピッケルは首を傾げる。

「決まってるだろう。これからルビー王女を奪還しようとする勇者が押し寄せてくる。それを返り討ちにするのが私の仕事になるんだ。そして勇者達は私を倒す為に町で装備を整えてアイテムを買う。それで町が潤うと言う事なのさ！」

何とも微妙な話である。

つまり勇者の襲撃がそのまま町の発展につながると言うのだ。

勇者達は王女奪還の為に城に殴りこみ、それを魔王が返り討ちにし、

された勇者達は魔王に勝つ為に町で装備を整える。

更に言うに勇者達はレベルを上げる為に周囲のモンスターとバトルをする事になる。

実はこれも村の利益につながるのである。

それは、勇者達がモンスターを倒し、その残骸を回収して新たな装備を作るのだ。

強いモンスターであればそれだけ強力な装備が作れると言う事である。

しかもお誂え向きに村の周囲には強いモンスターしか生息していない。

勇者達にとってもレベルを上げるには絶好の場所なのだ。

勿論外でモンスターに負けた場合そのまま村の宿屋で治療するのでその際の治療費もばっちり徴収する。

つまり勇者がこの村に来るだけで村は潤うのである。

しかも気のせいかな最近では村の中でモンスターも平気な顔して歩き回っている。

その上買物もしているのだから驚きである。

実はこれにも理由はある。

モンスターだってタダで倒される訳にはいかない。

其処で彼らは町で自身の装備出来る物を住人に注文してそれを装備して勇者に挑むのだ。

「でも、それだと倒されたモンスターはどうなるの？」

「その場合は心配ないさ。倒された場合は魂だけが魔王城にやってきて新しい肉体を貰って蘇るのさ」

読者の皆様は疑問に思ったであろう。

何故フィールドのモンスターは全滅しないのか？

それは近くに魔王城がある場合其処に魂が行きすぐさま新しい肉体を貰い蘇生出来るからなのだ。

だから魔王城を陥落させないと世界は平和にならないのがその理由なのだ。

因みにこの村の周囲のモンスターは父（大魔王）が仕切っているお陰か勇者以外には手を出さないようになっている。

あくまで勇者のレベルアップの為のバトル要因と言う感じになっているのだ。

「知られざるRPGの裏側・・・ああ、ロマンだわあ！」

「あはは・・・本当だねえ」

目を輝かせて言うナツチャンの横でピッケルは苦笑いを浮かべるだけであった。

それから時期的に1週間経ったある日、遂に村に勇者がやってきた。

「我が名は勇者ダルウ！この聖剣エクスカリバーで見事魔王を打ち倒し姫を救い出す！」

剣を片手に勇者は宣言する。

そして勇み足で魔王城に向かう。

やがて城門前に辿り着くとその横に何故か受付があった。

「いらっしやい、見学？それとも挑戦？」

「え？見学？挑戦？何の事お？」

受付と書かれたテーブルには人型モンスターであると思われるゾンビが居た。

机には紙とペンが置かれている。

「あの・・・何これ？」

「何って受付だよ。これから魔王に挑むんなら挑戦料を払って貰わないと」

「って、金取るんかいいいいいいいいい！」

何ともせこい話である。

「何言ってるの。お宅勇者なんでしょ？その辺のモンスターなぎ倒してたんまり儲けてる話じゃん」

「モンスターの癖に血も涙もない事言うなあ」

「どうも。んでどうすんの？見学？それとも挑戦？」

「無論、魔王を討伐する！」

何の迷いもなくダルウは用紙に名前と挑戦と書いた。
それを見たゾンビは頷く。

「それじゃ挑戦料として5000G頂きます」

「い、以外と高いなあ・・・まあ良い！ほれ」

ブツブツ言いながらもダルウはお金を払う。

そして城門を開く。

すると其処には腕を組み圧倒的な威圧感を誇る父（大魔王）が居た。

「ハッハッハア！良く来たなあ勇者よ！待っていたぞ！」

「大魔王！ルビー王女は無事なのか？」

「フッフ、無事だとも！見るが良い！」

大魔王が後ろを指差す。

すると其処には玉座に座っているルビー王女が居た。

「あれ、助けて〜」

「おお！ルビー王女！待っていてください！すぐにお助けします！」

ダルウは胸に手を当てて宣言し、エクスカリバーを手に入れた父（大魔王）に迫る。

「大魔王！覚悟お！」

「さあ来い！勇者よ！」

勇者と大魔王の歴史的一戦が始まる。

その戦いは余りにも凄まじく、昼夜を通して行われる……………
………

「あふん」

城の外ではズタボロになったダルウが居た。

傲慢の聖剣エクスカリバーは真ん中からポツキリと折られており鎧ももう使い物にならない状態である。

「全然駄目だなあ。もつとレベルを上げて出直して来なさい」

手を叩きながら父（大魔王）は城の中へと戻っていく。

「く、くそお・・・覚えていろお・・・もっとレベルを上げて、もっと強い武器を手に入れて、必ず奴を倒してみせるぞお！」

折れたエクスカリバーを松葉杖代わりにしてヨロヨロとダルウは城を後にする。

こうしてタダの村はより一層発展していく事になるのである。

その38（後書き）

タダの村が都になるのも時間の問題だと思われます

その39 (前書き)

今回重大発表をいたします

その39

えー、毎度御馴染み作者でございます。

今回重大発表がありましたのでこの場をお借りして申し上げます。
実はこの小説『父が魔王で息子が勇者で!?!』の小説を今回で終了
させていただきます。

と、言うのも此処までの話をファーストシーズンとし次回からは『
セカンドシーズン』として生まれ変わらせようと考えております。
その際には完全オリジナルのストーリーで行きたいと思っております。

まこと勝手な事を申ししております作者を勘弁してやって下さい。
では皆様・・・更にパワーアップする予定のセカンドシーズンをお
楽しみに

その39 (後書き)

セカンドシーズンをお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7745m/>

父が魔王で息子が勇者で!?

2011年11月14日09時26分発行